

富士宮市文化財調査報告書 第8集

上 石 敷 遺 跡

1985

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書 第8集

上 石 敷 遺 跡

1985

富士宮市教育委員会

序

富士宮市は富士山より南西および西方にかけてゆるゆるとした裾野の傾斜地にひろがる地であり、恵まれた気候、風土は遠く原始、古代より人々の生活が営まれて、市内の随所にはそれら先人の足跡として、貴重な文化財が数多く残されております。

これらの文化財については文化財保護法に基づき、積極的な保護、保存、さらにその活用を図り、地域の知的、文化的な生活環境の保全に努めておりますが、近年における地域開発の進展は文化財、とりわけ埋蔵文化財に対して少なからざる影響を与えつつあります。現在、この埋蔵文化財の取り扱いがもっとも大きな問題となっております。開発事業等、土地本来の利用との調整段階では、できる限り現状保存の方針で対処しておりますが、事業内容等により現状保存できないものに対しましては発掘調査を実施し、記録保存の措置をとっております。

このたびの小泉地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査につきましても、関係諸機関と慎重な協議を重ね、地元関係者の皆様の埋蔵文化財における積極的な深い御理解と御協力を得て、昭和56年10月より約4ヶ月にわたり発掘調査を遂行したものであります。

人類文明のあけぼのについての経過はまだまださだかではありません。その問題を解明するためには、発掘調査という地味な成果を除々に積み重ねる以外に方法はありません。こうして遅々ではありますが明らかにされつつある郷土の歴史は、単に学術的意義のみならず、今後の市民生活のなかに根付いた文化行政として大切に生かされていくべきであろうことに大きな意義を持たなければならないと思います。

ここに上石敷遺跡発掘調査報告書を刊行して、多くの方々の御批判と御指導を承るとともに、この調査に直接、間接に御指導、御尽力を賜りました関係各位に対しまして、深い感謝と敬意を表します。

昭和60年3月

富士宮市教育長 塩川 隆 司

例 言

1. 本書は昭和56年10月5日より昭和57年1月28日まで、約4ヶ月間にわたって発掘調査が実施された静岡県富士宮市小泉字石敷737-1番地他10筆に所在する上石敷遺跡（かんづつしよ）の発掘調査報告書である。

なお、昭和57年3月に概報を刊行しているが、記述に若干の相違があるので、本書をもって正式報告とする。

2. 発掘調査は富士宮市教育委員会が実施した。調査体制は次のとおりである。

富士宮市教育委員会 教 育 長 塩川 隆司

教育次長 風岡 大晃

社会教育課 課 長 諏訪 重夫

課長補佐 塩川 哲章

文化振興係 係 長 成瀬 正光

主 事 渡辺 孝秀

技 師 馬飼野行雄・渡井 一信

学 芸 員 伊藤 昌光

作 業 員 佐藤幸司・斎藤泰彦・杉沢正敏・武蔵金臣・依田孝郷

・馬飼野一正・望月秀雄・佐野秋男・友野勝・小林七造・勝亦英雄・佐野一・滝口たけ子・芦川美智子・中山民子・渡辺正子・渡辺朋江・大原初江・大豆生田律子・渡辺親子・渡辺すみ子・稲葉ふじの・望月たみ子・渡辺純子・渋谷里江・新田八重子・稲葉はる子・佐野美千代・深沢千鶴子・佐野かず子・土井満里子・阿部富士子・吉野順子・深沢由美子・田中徳代・太田智子・望月富士子・台高世・佐野かずみ・遠藤里美

3. 発掘調査の担当は馬飼野があたり、渡井、伊藤の両名が補佐した。
4. 発掘調査資料の整理は馬飼野が主体として行い、一部作業員の協力を得た。
5. 遺構の写真撮影は馬飼野が、遺物は渡井、伊藤がそれぞれの分担範囲で行った。なお、航空写真は市内東町在住の望月展敏氏、当時社会教育係長であった後藤章氏より提供されたものである。
6. 本書の執筆は馬飼野が主体となったが、第Ⅲ章第2節の縄文土器の執筆を伊藤に、第Ⅳ章第2節・第Ⅴ章第2節の土器観察表の作成を渡井に協力を得た。編集は全て馬飼野が行った。
7. 地形図、遺構図に記す高度は全て海拔高度をもって示している。
8. 印刷、出版に関する事務は富士宮市教育委員会社会教育課文化振興係があたった。
9. 発掘調査に関する資料は全て富士宮市教育委員会が保管している。

目 次

序	
例 言	
第I章 環 境	1
第1節 上石敷遺跡	1
第2節 地理的環境	2
第3節 歴史的環境	5
第II章 土 層	16
第1節 上石敷遺跡の土層	16
第2節 土層と遺構	17
第III章 縄文時代	20
第1節 遺 構	20
第2節 遺 物	28
第IV章 古墳時代	67
第1節 遺 構	67
第2節 遺 物	74
第V章 律令時代	90
第1節 遺 構	90
第2節 遺 物	92
第VI章 歴史時代	97
第1節 遺 構	97
第2節 遺 物	98
第VII章 調査総括	101

插 圖 目 次

第1圖	遺跡位置圖	1
第2圖	周辺地形圖	3
第3圖	富士宮市遺跡分布圖	9
第4圖	発掘調査区域図	11
第5圖	遺構全体図	13
第6圖	土層模式図	17
第7圖	縄文時代全体図	19
第8圖	J-1号竪穴住居跡実測図	20
第9圖	集石土壇跡実測図	23
第10圖	第1号集石跡実測図	24
第11圖	第2号集石跡実測図	25
第12圖	第3号集石跡実測図	26
第13圖	土壇跡実測図	27
第14圖	土器拓影図①(第I・II群土器)	29
第15圖	土器拓影図②(第II群土器)	31
第16圖	土器拓影図③(第II群土器)	32
第17圖	土器拓影図④(第III群土器)	33
第18圖	土器拓影図⑤(第III群土器)	35
第19圖	土器拓影図⑥(第III群土器)	37
第20圖	土器拓影図⑦(第III群土器)	38
第21圖	土器拓影図⑧(第III群土器)	39
第22圖	土器拓影図⑨(第III群土器)	41
第23圖	土器拓影図⑩(第III群土器)	42
第24圖	土器拓影図⑪(第III群土器)	43
第25圖	土器拓影図⑫(第III群土器)	45
第26圖	土器拓影図⑬(第III群土器)	46
第27圖	土器拓影図⑭(第III群土器)	47
第28圖	土器拓影図⑮(第III群土器)	49
第29圖	土器拓影図⑯(第III群土器)	50
第30圖	土器拓影図⑰(第III群土器)	51
第31圖	土器拓影図⑱(第IV・V群土器)	53
第32圖	尖頭器実測図	54

第33回	石鏃実測図①	55
第34回	石鏃実測図②	58
第35回	石斧実測図	59
第36回	石匙実測図	60
第37回	石錘実測図	61
第38回	石皿・磨石実測図	62
第39回	蔽石実測図	63
第40回	石匙・磨製石器実測図	65
第41回	土偶・土錘実測図	65
第42回	K-1号竪穴住居跡実測図	67
第43回	K-2号竪穴住居跡実測図	68
第44回	K-3号竪穴住居跡実測図	68
第45回	古墳時代全体図	69
第46回	K-4号竪穴住居跡実測図	70
第47回	K-5号竪穴住居跡実測図	71
第48回	K-6号竪穴住居跡実測図	72
第49回	K-8号竪穴遺構実測図	73
第50回	M-1溝状遺構実測図	75
第51回	土器実測図①	79
第52回	土器実測図②	81
第53回	土器実測図③	83
第54回	土器実測図④	85
第55回	土器実測図⑤	87
第56回	古墳時代石器実測図	89
第57回	律令時代全体図	90
第58回	R-1号竪穴住居跡実測図	91
第59回	R-2号竪穴住居跡実測図	91
第60回	R-3号竪穴住居跡実測図	92
第61回	土器実測図⑥	93
第62回	鉄器類実測図①	95
第63回	焼土を内包する大形土塊跡実測図	97
第64回	鉄器類実測図②	98
第65回	銭貨類拓影	99

挿 表 目 次

第1表	富士宮市遺跡地名表	8
第2表	石器計測表①	56
第3表	石器計測表②	57
第4表	土器個体説明①	77
第5表	土器個体説明②	78
第6表	土器個体説明③	80
第7表	土器個体説明④	82
第8表	土器個体説明⑤	84
第9表	土器個体説明⑥	86
第10表	土器個体説明⑦	88
第11表	土器個体説明⑧	94
第12表	土器個体説明⑨	95

図 版 目 次

図版第1	A. 航空写真 B. 遺跡全景(古墳・律令時代)
図版第2	A. J-1号竪穴住居跡床面 B. J-1号竪穴住居跡内埋燵炉
図版第3	A. 第1号集石土壇跡検出状況 B. 第1号集石土壇跡掘り方
図版第4	A. 第2号集石土壇跡検出状況 B. 第2号集石土壇跡掘り方
図版第5	A. 第3号集石土壇跡検出状況 B. 第3号集石土壇跡掘り方
図版第6	A. 第4号集石土壇跡検出状況 B. 第4号集石土壇跡掘り方
図版第7	A. 第5号集石土壇跡検出状況 B. 第5号集石土壇跡掘り方

- 図版第8 A. 第6号集石土壙跡検出状況
B. 第6号集石土壙跡掘り方
- 図版第9 A. 第1号集石跡検出状況(南側)
B. 第1号集石跡検出状況(北側)
- 図版第10 A. 第2号集石跡検出状況
B. 第3号集石跡検出状況
- 図版第11 A. 第1号土壙跡完掘状況
B. 第2号土壙跡完掘状況
- 図版第12 A. 第3号土壙跡完掘状況
B. 第4号土壙跡完掘状況
- 図版第13 第Ⅰ群土器(1~6) 第Ⅱ群土器(7~8)
- 図版第14 第Ⅱ群土器(9~17)
- 図版第15 第Ⅱ群土器(18~28)
- 図版第16 第Ⅲ群土器(29~46)
- 図版第17 第Ⅲ群土器(47~73)
- 図版第18 第Ⅲ群土器(74~95)
- 図版第19 第Ⅲ群土器(96~125)
- 図版第20 第Ⅲ群土器(126~149)
- 図版第21 第Ⅲ群土器(150~172)
- 図版第22 第Ⅲ群土器(173~189)
- 図版第23 第Ⅲ群土器(190~207)
- 図版第24 第Ⅲ群土器(208~230)
- 図版第25 第Ⅲ群土器(231~252)
- 図版第26 第Ⅲ群土器(253~274)
- 図版第27 第Ⅳ群土器(275~295)
- 図版第28 第Ⅳ群土器(296~323)
- 図版第29 第Ⅳ群土器(324~343)
- 図版第30 第Ⅴ群土器(344~353). 第Ⅱ群土器(354~359)
- 図版第31 A. 尖頭器
B. 石斧
- 図版第32 石鏃(5~42)
- 図版第33 石匙
- 図版第34 A. 石錘
B. 磨石

- 図版第35** A. 磨石
B. 敲石
- 図版第36** A. 敲石
B. 石錘
C. 磨製石器
- 図版第37** A. 石皿
B. 土偶
C. 土師
- 図版第38** A. K-1号竪穴住居跡床面
B. K-1号竪穴住居跡出土土器
- 図版第39** A. K-1号竪穴住居跡検出状況
B. K-1号竪穴住居跡掘り方
- 図版第40** A. K-2号竪穴住居跡床面
B. K-2号竪穴住居跡掘り方
- 図版第41** A. K-3号竪穴住居跡床面
B. K-3号竪穴住居跡掘り方
- 図版第42** A. K-4号竪穴住居跡検出状況
B. K-4号竪穴住居跡床面
- 図版第43** A. K-4号竪穴住居跡出土土器
B. K-4号竪穴住居跡掘り方
- 図版第44** A. K-5、6号竪穴住居跡. 焼土を内包する大形土塊跡床面
B. K-5、6号竪穴住居跡. 焼土を内包する大形土塊跡掘り方
- 図版第45** A. K-8号竪穴遺構完掘状況
B. M-1溝状遺構完掘状況
- 図版第46** A. M-1溝状遺構出土土器 (遠景)
B. M-1溝状遺構出土土器 (近景)
- 図版第47** 古墳時代土器①
- 図版第48** 古墳時代土器②
- 図版第49** 古墳時代土器③
- 図版第50** A. R-1号竪穴住居跡床面
B. R-1号竪穴住居跡竈
- 図版第51** A. R-2号竪穴住居跡床面
B. R-2号竪穴住居跡出土土器
- 図版第52** A. R-3号竪穴住居跡床面

B. 律令時代土器

図版第53 A. 鉄器類 (上. ヒウチガマ) (下. 刃子)

B. 銭貨類

第1章 環 境

第1節 上石敷遺跡

上石敷遺跡は静岡県富士宮市小泉字石敷737-1番地に所在する。

本遺跡の発見は昭和56年6月、同番地付近の工事現場削平部分より土師器高坏破片が採集された。との内報が野村昭光静岡県文化財保護指導員より富士宮市教育委員会にもたらされたことによる。

遺物の発見箇所は昭和54年度作成の富士宮市遺跡地名表に記載されておらず、周辺一帯は発見のきっかけとなった小泉地区区画整理事業が実施されており、市教育委員会が現地におもむいた時にはすでに大半が完了して、最終工事区を残すだけとなっていた。

市教育委員会では即時に遺物の発見箇所を中心に表面調査を行い、有舌尖頭器、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器、古銭等を採集して、市内でも例をみない複合遺跡であることが判明した。

遺跡の範囲は北西側部分が削平擾乱を受けるものの、大半は良好に存在するであろう予想がたてられた。したがって市教育委員会は本地区を上石敷（カミイシキ）遺跡と命名して、遺跡番号126、整理番号S-6、J-82、H-66、L-3と加筆登録した。

並行して市教育委員会は富士宮市都市開発部区画整理課と新発見遺跡の取り扱いについて協議を繰り返した。しかし、その事業内容、細部にわたる諸条件が相まって、遺跡保存の重要性は十分に理解されながらも、やむを得ず記録保存、すなわち発掘調査を実施することで意見の



第1図 遺跡位置図

一致をみるしかなかった。以後、9月補正予算に上石敷遺跡緊急発掘調査費を計上して、その具体的な準備にはいった。なお、同区画整理事業において、本遺跡南100 m地点に所在する虚空蔵塚(コソゾウスカ)古墳は昭和52年に街路計画を一部変更して保存している。

遺跡の現況は水田である。これが遺跡発見の弊害となったとするには弁解がましいが、事実、その対応が充分であったとは言い難い。幸いにして遺跡は完全破壊は免れたものの、遺跡中央には巾8 mの区画道路が交差して、南北に下がる道路には水路が並設されていた。道路交差部分の北東1区画がすでに造成されており、ここより発見された土器片が遺跡の発見、および発掘調査のきっかけとなった。

上述の水路の旧河道は本来、大きく西側に張り出して蛇行しながら南流していたものである。この改修工事に際して南北の道路東側を補助河道としたため、巾2~3 m程の掘乱溝が調査区域の西側を走っている。表面踏査や旧地形条件を加味すると、遺跡はその旧河道端まで達していたようで、範囲は東西約100 m、南北約120 m、包蔵面積約12,000㎡が推定される。

地形的には土地利用状況が水田、さらに一部造成工事の完了をみるなど、十分に把握されないが、調査区最北端が標高124 m、約100 m程離れた最南端が標高119 mを測り、勾配5%程の緩やかな丘陵であったと思われる。東側は弱い谷地形によって東隣丘陵と区別され、一部に湧水も確認される。西側は旧河道沿いまで大きく張り出して、徐々に標高を減じていく。全体的な地形傾斜は北東から南西方向である。

発掘調査は破壊を免れた約4,000㎡が対象とされたが、調査区東端が弱い谷地形となり遺構、遺物が確認されないことから遺跡の範囲外と判断し、実質の調査面積は遺跡東辺部分約2,500㎡となった。調査は昭和56年10月5日より昭和57年1月28日まで、約4ヶ月間にわたって実施された。

第2節 地理的環境

上石敷遺跡は富士宮市の南東部、国鉄身延線富士宮駅より直線距離にして約1.5 kmの地点に位置する。富士山頂から連なる裾野斜面の末端部であり、除々に南にくだって洞井川の形成する沖積地に没している。標高は120~130 mを測り、巾ひろい緩やかな丘陵である。前方には駿河湾、遠くに伊豆半島を望む。西は約400 mで富士山南西斜面を南流する弓沢川に接して市街地となる。東は同様の丘陵が連続して約1.5 kmで富士市に達する。遺跡周辺は昭和40年代後半まで依然として田園地帯を形成していたが、富士宮バイパス、西富士道路の開通、区画整理事業の進展等に伴って急速に市街化が進んできている。

上石敷遺跡の所在する富士根地区はその自然、および人文環境を富士山に負うところが多い。富士山の成立過程は小御岳、古富士、新富士の3火山から成ることが知られている。

現富士の基盤を成す小御岳火山は洪積世末葉(60~50万年前)に活動を開始し、洪積世末葉



第2図 周辺地形図

頃には2,400 m程の容姿を駿河湾頭に現わしていた。その後、洪積世終末（3～2万年前）になって古富士火山が活動を開始して、その噴出溶岩流は小御岳火山の大部分を覆い、小御岳火山は北側中腹にその火口丘を残すだけとなった。また、古富士火山の噴出した集塊質泥流は富士川岸まで達して、その南西部分に羽扇、星山両丘陵の基盤を形成した。

それ以後、約1万年位は大きな火山活動はなく、断層運動や浸食、堆積運動が繰り返されていた。この時に生じた大宮断層によって、星山丘陵の浸食谷を南下し富士川に注いでいた潤井川は流路を切断されたため、断層に沿って流路を東に転じて富士市鷹岡から駿河湾に流入する結果となった。

沖積世（現世）になり、再び激しい活動が開始された。これが新富士火山で、その噴火活動は古富士火山と異なり多量の溶岩を噴出して、小御岳、古富士両火山を溶岩流と火山砂礫とで幾重にも覆うとともに、周辺の山麓部にも10数mという厚さで堆積した。

有史をむかえても新富士火山の活発な活動は続き、ついに円錐形火山、コニーデの代表的火山を形成するに至った。

現在は1707年（宝永4年）の噴火を最後に活動を休止している。

この富士山の成立過程は古富士集塊質泥流が著しく不透水性である反面、新富士火山溶岩が透水性に富む特性から、富士宮市内各所に湧水を生む結果となる。

これは古富士火山の浸食谷が埋没後も旧河床として残り、この谷に沿って地下水脈が形成されたためである。この旧河床は昭和25年のボーリング調査で湧玉川と豊玉川の存在が確認された。湧玉川は富士根地区を南西に下り富士宮浅間大神境内の湧玉の池まで、豊玉川は北山より外神地区を南下して淀師沢沢付近までを流路にもっている。

富士根地区は古富士火山の噴出した集塊質泥流（古富士火山噴出物層）^{注2}を基盤としている。尾根上に位置したため新富士火山初期の溶岩流が及ばずに半島状となって残ったためである。上部には新富士火山の火山性砂礫層が降下して、なだらかな丘陵地帯を形成している。この火山性砂礫層が前述したように極めて透水性に富むため、小泉・出水・滝ノ上などの地名が示すように湧水地が多く、市内でも有数の富水地帯となっている。

地形的には富士山を中心に同心円状の等高線によって描かれている。詳細な観察をすれば、湧水を伴った多数の小谷が形成され、浸食作用を促進した結果、独立した丘陵、いわゆる舌状台地状の地形が連続して「ノコギリの刃」状となっている。

湧水地と舌状台地状の地形による地理的条件が動、植物の繁殖をもたらしただろうことは箕輪遺跡、出水遺跡、滝ノ上遺跡、天間沢遺跡など、20箇所以上の縄文時代遺跡が、それぞれ標高100～200 mの間に0.5～1 km程の距離を隔てて占地することから容易に知れ、富士宮市における遺跡密集地帯を形成している。^{注3}^{注4}^{注5}

反面、富士根地区より北西側に接する万野原一帯は、前述した湧玉川、豊玉川の両河床の中間にあたるため湧水が不可能な乏水地帯である。近年、上水道等の発達によって発展の一途を

たどっているものの、過去に遺跡の確認はなく、原始、古代より現在に至るまで、その生産活動や集落立地に富士山による大きな制約を受けたであろうことは言うまでもない。

注1 津屋弘達 1964 「富士山についての証言—山の生立ちと地質学的背景—」『科学朝日』 8

注2 塩川隆司 1971 「総説第1章 富士山」『富士宮市史』上巻 富士宮市

注3 野村昭光 1976 「箕輪遺跡出土の玉について」『駿豆考古』第18号

注4 静岡県清水土地改良事務所・富士宮市教育委員会 1981 『滝ノ上遺跡』

注5 富士市教育委員会 1979 『天間沢遺跡第7次（F地区）発掘調査概報』

第3節 歴史的環境

富士宮市に確認される遺跡は現在125箇所である。遺跡分布は南部に集中して、しかもその大部分が富士根地区、屋山丘陵一帯に限られる特色をもつ。これは前節で述べた古富士集塊質泥流の分布と合致して、本市の遺跡分布の特徴となっている。

遺跡内容は縄文時代に属するものが84箇所と他を圧倒する。弥生時代終末～古墳時代初頭遺跡も比較的充実して、この両者で本地域の遺跡分布図を形作っている状況である。したがって、先土器時代、古墳時代初頭以降の遺跡、ならびに、古墳は未発見部分、または時代・時期別の地理的条件の相違による遺跡の伸長があったにせよ極端に少ない。

近年、すなわち昭和40年代にはじまった高度経済成長の波は例外なくこの富士宮市にも押しよせ、この開発に伴って文化財、とりわけ埋蔵文化財（遺跡）に対する影響は数知れないものになってきた。比例するように緊急発掘調査の数が増したことは言うまでもない。

それらをここに拾うと以下のとおりである。

昭和44年（1969）	月の輪平遺跡 ^{注2}	古墳時代初頭	集落跡	放水路建設
昭和45年（1970）	月の輪平遺跡	古墳時代初頭	集落跡	放水路建設
	千居遺跡	縄文時代中期	集落跡	配石跡 学術調査
昭和46年（1971）	月の輪平遺跡 ^{注3}	古墳時代初頭	集落跡	放水路建設
	千居遺跡	縄文時代中期	集落跡	配石跡 学術調査
昭和47年（1972）	月の輪平遺跡	古墳時代初頭	集落跡	放水路建設
	月の輪下遺跡 ^{注4}	古墳時代初頭	集落跡	放水路建設
	南部谷戸遺跡 ^{注5}	古墳時代初頭	集落跡・方形周溝墓	放水路建設
	王藤内の塚 ^{注6}	江戸時代	土壇墓	放水路建設
昭和51年（1976）	滝戸遺跡 ^{注7}	縄文・弥生・古墳時代	配石跡・方形周溝墓	学校建設
昭和52年（1977）	滝戸遺跡 ^{注8}	縄文・弥生・古墳時代	配石跡・方形周溝墓	学校建設
	月の輪平遺跡 ^{注9}	古墳時代初頭	集落跡	宅地造成工事

昭和53年(1978)	代官屋敷遺跡 ^{注10}	縄文時代早・前・中期	集石跡	道路建設
	大室古墳 ^{注11}	律令時代	円墳	保存目的墳丘調査
昭和54年(1979)	若宮遺跡 ^{注12}	縄文時代早期	集落跡	道路建設
	滝戸遺跡 ^{注13}	縄文時代中期	配石跡	学校建設
昭和55年(1980)	代官屋敷遺跡	縄文時代早・前・中期	集石跡・住居跡	道路建設
	若宮遺跡	縄文時代早期	集落跡	道路建設
	滝ノ上遺跡 ^{注14}	縄文時代中・後期	配石跡	道路建設
	月の輪上遺跡 ^{注15}	弥生時代後期	集落跡	宅地造成工事
昭和56年(1981)	若宮遺跡	縄文時代早期	集落跡	道路建設
	月の輪平遺跡 ^{注16}	古墳時代初頭	集落跡	土石採集
	上石敷遺跡 ^{注17}	縄文時代早・前・中期	弥生時代終末～古墳時代初頭	律令時代
			集石跡・集落跡	区画整理事業
昭和57年(1982)	権現遺跡 ^{注18}	古墳時代初頭	集落跡	店舗建設
	滝戸遺跡 ^{注19}	縄文・弥生・古墳時代	配石跡・方形周溝墓	集落跡
			河川改修工事	
	渋沢遺跡	弥生時代中期	土墳墓	校庭拡張工事
昭和58年(1983)	渋沢遺跡	弥生時代中期	土墳墓	校庭拡張工事

(昭和58年12月現在)

上記の発掘調査で遺跡内容は除々に明らかになりつつある。それらを理解しながら本地域の歴史的環境にふれてみたい。

本地域の人間活動の開始は古富士火山第Ⅱ期活動中の後期旧石器時代より認められる。それはもはや人間活動を不可能ならしめるほどでなかったことが推察される。

遺跡は沼久保上遺跡(富士宮市遺跡番号95—以下同じ—)、星山周辺の南部谷戸遺跡(106^{注20})、月の輪平遺跡(107)、隣接の富士郡芝川町小塚A遺跡、富士市天間沢遺跡が認められ、いずれも新富士火山の溶岩流が及ばない地域に限られている。今後の新発見遺跡もこの地域に限られることが予想されて、新たに若宮遺跡(9)、本遺跡に有舌尖頭器が確認された。しかし、遺跡規模は貧弱で、包含層が確認されたのは芝川町小塚遺跡以外ない。

縄文時代をむかえて、早期の遺跡占地は旧石器時代を継承しつつも星山、羽附丘陵、富士根地区に若干の発展をみせる。

従来、本地域でもっとも古い縄文文化は早期中葉に至って出現するとされ、田戸式系土器群が盛行する時期に押型文土器を伴出することが知られていた。表面採集による資料が対象であったが、代官屋敷遺跡(11)、奥山地遺跡(113)、沼久保上遺跡、南部谷戸遺跡、月の輪平遺跡である。これらの資料のうち楕円押型文土器が比較的卓越して、楕円粒も粗大であることから押型文文化の終末期があたえられた。さらに資料の貧弱さも手伝って遺跡は小規模である

把握が同時になされて現在に至っていた。

しかし、近年早期遺跡の発掘調査が活発化して除々に内容が明らかにされるように、本地域でも若宮遺跡によって大きく覆された。

若宮遺跡で得た竪穴住居跡・炉穴跡・集石跡等によって構成される集落跡は完全に早期遺跡の概念を反転させるとともに、表裏縄文土器を得て本地域のみならず、静岡県内においても縄文時代最古の遺跡となった。

早期後葉の条痕文系土器群の時期になると、浅間大社遺跡(76)に新たな進出がみられる。奥山地遺跡、沼久保上遺跡、茅山上層式に属する良好な資料を出土する坊地上遺跡(102)、地名表による小松原A遺跡(99)など星山丘陵一帯に発展的となる。それに代官屋敷遺跡、若宮遺跡が西富士道路建設に伴う事前調査で資料を得て加えられる。そして新発見された本遺跡にも野島式土器の資料を得るなど、富士根地区に発展の前兆をみることが出来る。

前期に至ると星山丘陵一帯の遺跡が影をひそめて富士根地区に発展をみせる。しかし、遺跡数は貧乏である。

木鳥式土器の良好な資料が出土する出水遺跡(37)、隣接して峯石遺跡(38)があげられる。以後、中葉に文化がとどえて諸磯式系文化に至って遺跡の再出現をみる。

諸磯式系土器群には北白川下層式土器等を伴出することから、関東系土器文化圏にありながら関西的な要素をあわせもつことが知れる。遺跡は代官屋敷遺跡、南部谷戸遺跡の早期から再出現する遺跡に加えて、焼畑遺跡(1)、新梨遺跡(6)、寺内遺跡(19)をみる。

中期前葉の文化は勝板式土器に代表され、その繁栄の中心は中部高地の山岳地帯であり、本地域もその周辺地域として理解することができる。遺跡占地は丘陵斜面の小規模遺跡が多く、中部山岳地方の大規模な集落遺跡の形成と極めて対称的である指摘もなされている。

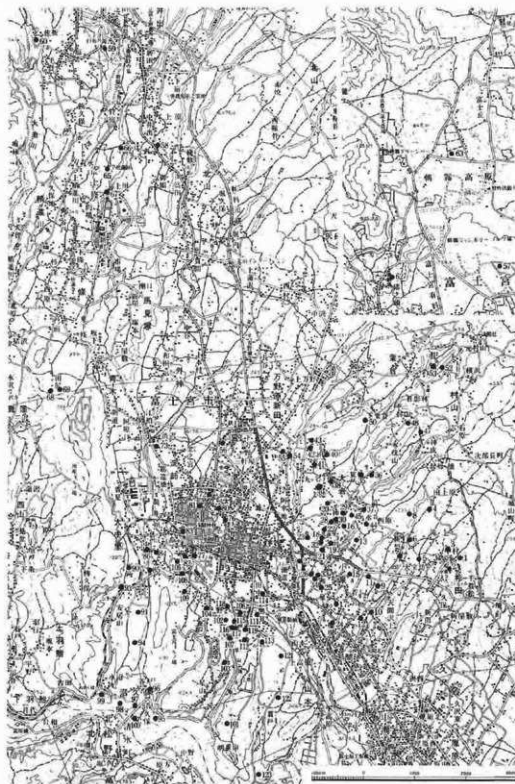
遺跡は歴代遺跡へと発展していく場合もあるが、単独で存在して以後消滅してしまうものが多い。高原愛宕山遺跡(125)、泉遺跡(105)、神賀町遺跡(75)、坊地遺跡である。また、近年の発掘調査の増加により、勝板式期以前の遺跡も明らかになりつつある。それは五領ヶ台式土器を主体とする、駿東郡長泉町柏窪遺跡の構成を示す一群である。とくに本遺跡の調査によってその構成も知れてきて、代官屋敷遺跡の竪穴住居跡も注目される。

本地域に特筆は中葉の加曾利E式期からの爆発的な遺跡増加である。勝板式期に残存した遺跡はここで大きく転換して規模の大きな遺跡を営む。占地条件も小規模な丘陵斜面から広大な台地の平坦面に位置するようになり、本地域の歴代遺跡、すなわち基地的遺跡に発展する。箕輪A遺跡(35)、同B遺跡(36)、滝ノ上遺跡(3)、滝戸遺跡(108)、それに富士市天間沢遺跡^{注22}等である。さらに基地的集落とは別々に新たに形成された小規模遺跡が58箇所発生する。縄文時代遺跡84遺跡中、約70%にあたり、この時期には富士西南麓一帯が遺跡といっても過言でない状況となる。

この分布状況を積松は半径3kmの生活圏を5群想定し、それが、中期社会に至ると旧来の生^{注23}

番号	整理記号	道 路 名	備 考	番号	整理記号	道 路 名	備 考	番号	整理記号	道 路 名	備 考
1	J-30	焼 畑		45	H-9	出 水 西		84	J-55	谷 外	
2	J-31	杉 田 中 村	土儀出土	46	J-2	石 原			H-57		
3	J-29	滝 ノ 上	発掘調査	47	J-4	松原 (谷口)		97	J-56	下 田	
4	J-75	田 上 原			J-6	東 谷 戸			H-58		
5	J-32	丸 塚		48	H-1	東 谷 戸		98	J-57	小 松 原(B)	
6	J-28	新 堀		49	J-5	木 茂 山		99	J-58	小 松 原(A)	
7	J-76	杉 田 西 原		50	J-7	藤 子 端		100	K-19	龍 塚 古 墳	
8	J-27	大 辻		51	K-1	元 村 山	地点不明	101	J-28	明 星 山	
	J-74			52	J-1	社 領 東			J-40		
9	H-66	若 宮	発掘調査	53	J-2	社 領 西		102	H-25	坊 地 上	
	K-5			54	K-15	柳々木1号墳			J-53		
10	J-26	横道 (天間沢)		55	K-16	柳々木2号墳		103	H-64	権 文 神 社	
	H-29			56	K-12	行人塚 (高原)	湧 流		J-43		
11	J-22	代 官 屋 敷	発掘調査	57	H-52	地 穴		104	H-31	野 中 中 村	
	H-16			58	H-51	浅敷 (辻崎)			J-46		
12	J-25	餅 入 越		59	J-65	白 糸 池		105	H-24	泉	
	H-19			60	J-81	西 表 左 所			S-2		
13	J-20	小 泉 向 原		61	J-66	田 貫 湖 草 原		106	J-41	南 部 谷 戸	発掘調査
14	J-80	尾 無 次		62	J-67	鎌之頭巻跡地			H-39		
	J-71			63	J-68	富士 岡			K-20		
15	H-61	旗 田		64	J-69	柳 原			S-1		
16	J-18	寺 後		65	S-4	千 塚(B)	発掘調査 国 庫 定	107	J-29	月 の 輪 平	発掘調査
	J-24				J-63				H-25		
17	H-17	上原 (田下前)		66	J-64	千 塚(A)		108	J-45	滝 戸	発掘調査
	J-72			67	J-62	青 澤 の 渡			H-33		
18	H-62	神 風			J-61			109	J-44	野 中 向 原	3 遺 土 器
	J-19			68	H-49	丸 山 (田尻西)			H-22		
19	H-11	寺 内		69	H-50	田 尻		110	J-42	スギナヲホ	
	J-17			70	J-60	青 水			J-37		
20	H-10	大塚 (袋ノ下)		71	J-59	青 泉		111	H-23	五 反 田	
	J-73				H-25				J-38		
21	H-63	小 泉 中 村		72	H-56	早 平		112	H-24	月 の 輪 上	発掘調査
	J-21			73	Y-4	供 武 庄	25	113	J-36	奥 山 地	
22	H-12	三 ッ 堂		74	H-39	津 脚			H-22		
	J-22			75	J-50	神 賀 町		114	Y-1	田 中	
23	H-13	本 ノ 行 寺			J-51			115	H-29	地 地 下	
	J-16			76	H-43	茂 岡 神 社		116	H-27	坊 地 南	
24	H-16	徳 塚	発掘調査		Y-2			117	H-26	月 の 輪 下	発掘調査
25	H-60	石 敷		77	H-25	沢 衣 町		118	K-7	堀 木 古 墳	
26	H-15	向 田		78	H-54	城 山		119	K-6	月 の 輪 法 印 塚	湧 流
27	H-14	中 武		79	H-44	北 神 田		120	L-1	正 藤 内 の 塚	発掘調査
28	K-2	大 塚	遺存調査	80	H-41	二 ノ 宮			J-35		
	K-3			81	H-42	福 知 神 社		121	H-21	上 高 原	
29	K-4	神 重 1 号 墳 (山ノ神古墳)		82	H-36	西 町			J-78		
30	K-18	神 重 2 号 墳	湧 流	83	H-40	食 部 小 学 校		122	H-20	出 口	
31	K-17	寺 内 山 ノ 神		84	J-70	甲 石		123	Y-2	加 田	
32	K-14	天 神 塚	湧 流		H-55			124	J-53	知 徳 坊	
33	K-13	遠 空 塚 塚		85	J-47	堀 辻			H-51		
34	J-8	真 輪(A)	注 22		H-37			125	J-34	高 原 堂 谷 山	
	H-2			86	J-48	大 中 里 坂 下			S-6		
35	J-9	真 輪(B)			H-28				J-82		
	H-3			87	J-49	大 中 里 坂 上		126	H-66	上 石 敷	
36	J-14	出 水			K-8	中 里	湧 流		L-3		
	H-8			89	K-9	南 原	湧 流				
37	J-14	堀 石			J-52						
	H-57			90	Y-5	別 所		S			史 土 器 時 代
38	J-15	丸 ッ 谷 戸			H-45			Y			縄 文 時 代
	H-6			91	J-77	上 の 塚		Y			弥 生 時 代
39	J-10	坂 野			H-65			H			土 器 形 (古墳時 代)
	H-4			92	K-10	別 所 1 号 墳	原 変 1	K			古 墳
40	J-13	崎 田			K-11	別 所 2 号 墳		L			史 土 器 時 代
	H-5			93	K-11	別 所 2 号 墳					
41	J-11	定 田 (丸大前)			L-2	津 原 支 天 塚					
	H-58				S-3						
42	J-11	柳 ッ 谷 戸			J-54	宮 久 保 坂 上 (大 塚 山)	注 20				
	H-7				H-45						
43	H-7	出 水 東									

第1表 富士宮市遺跡地名表



第3図 富士市遺跡分布図

活圏を半径1.5 km、面積7 km²の小遺跡圏が分割、発展していく過程をみだし、そうした傾向が中期社会の歴代有力遺跡を中心に、分村という形態で移っていく軌跡であり、社会が発展していくと群そのものが大きく移住して、過去の生活圏をうちこわしていくという縄文文化発展の普遍性につながっているとしている。

内容の明らかな遺跡にその状況をもとめると滝戸遺跡(108)と千居遺跡(66)がうかがふ。滝戸遺跡は内容の不明な箕輪遺跡をのぞけば、富士、富士宮を含めた岳南地域において富士市天間沢遺跡と並び称される歴代有力遺跡である。その存在は古くより知られ、昭和51・52・54・57年と4次の発掘調査がなされ、縄文時代早期～晩期、さらに弥生、古墳時代に続く配石遺構、集落跡、方形溝溝墓などからなる歴代遺跡であることが確認されている。

千居遺跡は昭和45・46年に発掘調査がなされ、縄文時代中期後葉の20棟前後からなると想定される集落跡と、集落廃棄直後に配された帯状、および環状配石群の存在が確認される。果して千居遺跡の基地的集落はいかに、という問題は残るとしても、分村的集落、言いかえれば単独遺跡が営まれ、調査者が推察するように富士山の噴火等による自然現象の変化で集落が廃棄され、直後にたふんに富士山を意識した配石がなされたとするならば、そこに中期社会の発展と退潮の現象をみだせるとともに、本地域における諸遺跡と富士山とのかわり考えざるを得ない。なお、千居遺跡は昭和50年6月に国指定史跡となっている。

以後、いずれの遺跡も掘之内Ⅱ式期には急激に衰えてしまい、わずかな歴代遺跡を残すだけとなる。この停滞現象について、海岸部の魚撈文化の発展が内陸部の文化の発展をさまたげたと考えられているが原因をあきらかにするまでには至っていない。

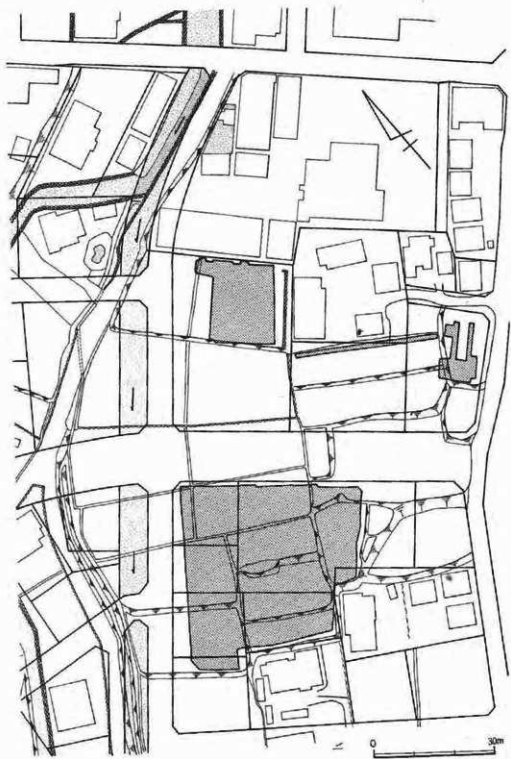
晩期の遺跡も辰野遺跡(40)、大中里遺跡(87)、滝戸遺跡に微量の資料が認められるにすぎず、また前葉に限られることから、本地域の文化は弥生時代をむかえるまで中断される。

本地域の弥生時代は中期、丸子式土器、石包丁等を出土した渋沢遺跡(73)より開始される。

渋沢遺跡は西側に潤井川、東側に湧水地をのぞむ台地上に占拠する。前面にひろがる湿地帯での農耕が想定されるが、石鎌等の狩猟具も出土することから狩猟・採集の必要性があったと考えられる。昭和157・58年に小規模の発掘調査が行われ、数基からなる土壌墓、大型打製石斧(石鎌)、甕等を得ている。細片資料であるが別所遺跡(90)も占拠状況はやはり潤井川をのぞむ台地上であり、極く初期の農耕生産力では生活を維持できず、狩猟・採集に依存せざるを得なかったことが推測される。

両遺跡以降になると、ふたたびその内容は不明瞭になることから、渋沢遺跡等で育った農耕技術がしだいに向上して、面積もひろく生産性のたかい富士市浮島沼付近に移動していったことが考えられている。

後期前半をむかえるとふたたび本地域に遺跡がみられるようになり、泉遺跡(105)があげられる。後半になると遺跡は活発化して、屋山丘陵東辺をとりかこむ潤井川自然堤防上、あるいは富士山側からの扇状地末端部に羽衣町遺跡(77)、田中遺跡(114)等の遺跡の進出がみ



第4图 发掘调查区域图

られる。従来、こうした傾向は農耕生産力の向上が遺跡を台地上、あるいは先端部から沖積地内部へ下降させ、かつ発展させたとして理解されているが、本地域においては高遺跡とも継続、発展することなく廃絶してしまう。

そこには本地域の沖積地内遺跡の発展をさまたげたならぬかの特徴的な要因を考えねばならぬが、まさに、近年資料が増加している後期末葉遺跡をあげれば、滝戸遺跡、月の輪上遺跡(112)の集落跡の存在の確認、これに旧知の初田遺跡(123)、野中向原遺跡(109)等の遺跡があげられる。

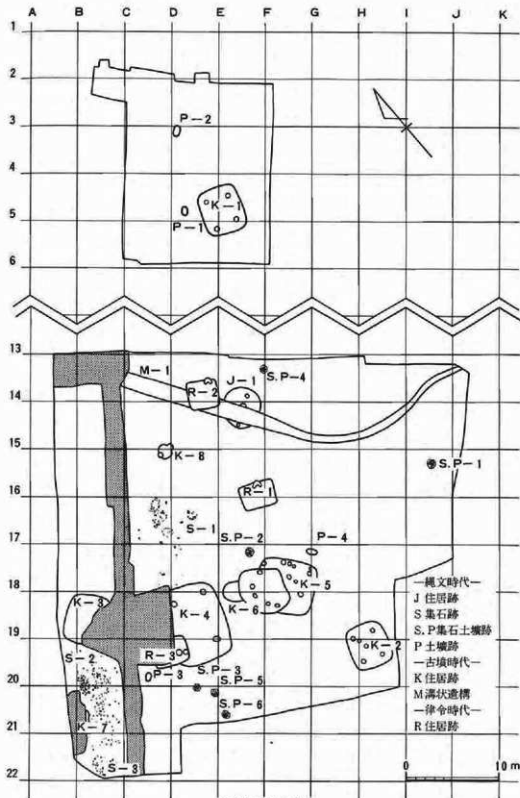
その占地は初田遺跡をのぞけば、いずれも星山丘陵東辺の台地中央部、ないしは先端部といった沖積地より奥まった地であり、末葉に至っても沖積地進出の糸口さえつかむことのできなかった占地状況を示している。逆にいえば台地占地が一般的であったとするほうが適切であるかもしれない。

この占地傾向を考えたとき、本来の弥生集落の生業が湿地帯内農耕であれば、潤井川湿地帯の存在をのみがす訳にはいかない。潤井川は西岸を羽榭・星山丘陵に、東岸を富士山扇伏地末端地形によってせりだされているため、南北に細長い構造をとらざるを得ない。しかも大宮断層上を流路としているため一種の溺れ谷的性格をもち、現在でも洪水がくりかえされている状況である。この状況を当時設定できるなら、遺跡の発展は考えがたく、台地占地にはするのもし、そうした状況からの逃避現象であるかもしれない。

しかし、弥生時代における高地性集落の発展を考えあわせたととき、一概に自然、ならびに地形条件の不利を設定するだけでは説得力にかけ、その他諸要因が相まってなした現象であるはずである。今後の遺跡分布の課題である。しかし、本地域の弥生時代遺跡に湿地帯内での発展が認められないのも事実である。

上述の過程を経て古墳時代初頭に至る。その文化は前述の縄文時代中期の爆発的な盛隆に匹敵するほどであり、弥生時代遺跡の発展をみない富士根地区でも湧水地を中心に縄文時代遺跡は古墳時代初頭遺跡と重複するといっても過言でない状況となる。まして潤井川湿地帯をのぞく星山丘陵東辺ではさらに濃密となり、表面採集による調査では遺物が連続して正確な遺跡数さえつかめない。あえて遺跡をあげれば、坊地上遺跡(102)、野中中村遺跡(104)、南部谷戸遺跡(106)、月の輪平遺跡(107)、滝戸遺跡、野中向原遺跡、五反田遺跡(111)、月の輪上遺跡、坊地下遺跡(115)、坊地南遺跡(116)、月の輪下遺跡(117)の諸遺跡である。一部には前述した弥生時代終末より継続する遺跡も存在する。

古墳時代初頭遺跡も潤井川湿地帯内に確認はない。爆発的な文化の発展を弥生時代終末より台地上、あるいは先端部に占地した遺跡群がなした技と考えるならば、遺跡内部にはすでに内陸生産手段が培われていたのであろうか。水田耕作可能域より奥まる富士根地区の遺跡増加を理解するにはやはり、そこに弥生時代終末の萌芽的な遺跡の存在を想定せねばならない。遺跡分布調査時に弥生式土器と認め得る資料もあるらしい。現に昭和56・57年には本遺跡、権現道



第5圖 遺構全体図

跡(24)を確認して、それを裏付けている。

盛隆をきわめた古墳時代初頭遺跡はその後急激に衰退する。遺跡も新発見された本遺跡の真間期壑穴住居跡2棟、他は市立貴船小学校校庭遺跡(83)にわずかな土器片が確認されるだけで不明な点が多い。この時期の集落数が古墳数に比例するならば、隣接の愛鷹山麓地域に比べて勝るとも劣らない初頭の遺跡が、古墳数を比べると10分の1にも満たない状況にある。遺跡占地的変化を考え合せても、あきらかに本地域の遺跡の減少を示す現象であろう。

本地域の古墳はいずれも後期に属する。星山丘陵東辺に南部谷戸古墳群(106)、塚本古墳(118)、月の輪法印塚古墳(119)、安居山に別所古墳群(92・93)、対岸の富士根地区に若宮古墳群(9)、三ッ室古墳群(28~31)、虚空蔵塚古墳(34)の小規模な古墳群が形成され、現在まで14基が確認される。占地は古墳時代初頭遺跡より沖積地にちかい古墳群が多いことから、後期集落が古墳群より低位にあったならば、安定しはじめた潤井川兩岸の微高地が想定される。しかし、その部分は現在の市街地にあたり遺跡の発見が困難な状況にあるとも言える。が、いずれにしても古墳数を考えると、それは他地域に比べて貧弱な遺跡分布であったろう。

注1 富士宮市教育委員会 1979 『富士宮市遺跡地名表』 村富士宮市遺跡分布図

整理№33天神塚古墳誤認によって欠番。昭和56年6月に小泉字石敷737-1番地他に上石敷遺跡が新発見されて、計125遺跡となる。

注2 月の輪遺跡発掘調査団 1972 『星山放水路関係遺跡発掘調査概報』

富士宮市教育委員会 1981 『月の輪遺跡群』 富士宮市文化財調査報告書第1集

注3 小野真一編 1975 『千居』 加藤学園考古学研究所

注4 注2と同じ

注5 注2と同じ

注6 注2と同じ

注7 富士宮市教育委員会 1977 『滝戸遺跡発掘調査(第Ⅰ次)概報』

注8 富士宮市教育委員会 1978 『滝戸遺跡発掘調査(第Ⅱ次)概報』

注9 注2と同じ

注10 日本道路公団名古屋建設局・静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会 1982 『代官屋敷遺跡』 西富士道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)

注11 富士宮市教育委員会 1979 『大室古墳墳丘実測調査報告』

注12 日本道路公団名古屋建設局・静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会 1983 『若宮遺跡』 西富士道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)

注13 富士宮市教育委員会 1980 『滝戸遺跡発掘調査(第Ⅲ次)概報』

注14 静岡県清水土地改良事務所・富士宮市教育委員会 1981 『流の上遺跡』 富士宮市文化財調査

報告書第3集

- 注15 富士宮市教育委員会 1981 『月の輪遺跡群Ⅱ一月の輪上遺跡（B地区）一』 富士宮市文化財調査報告書第2集
- 注16 富士宮市教育委員会 1982 『月の輪遺跡群Ⅲ一月の輪平遺跡第6次調査・月の輪上遺跡（C地区）一』 富士宮市文化財調査報告書第4集
- 注17 富士宮市教育委員会 1982 『上石敷遺跡発掘調査概報』
- 注18 富士宮市教育委員会 1983 『権現遺跡発掘調査概報』
- 注19 富士宮市教育委員会 1983 『滝戸遺跡発掘調査（第IV次）概報』
- 注20 野村昭光 1969 「富士宮市大場山出土の縄文土器」 『駿豆考古』第8号
- 注21 小野真一他 1972 「駿河小塚」一静岡県における先土器文化の研究一芝川町教育委員会
- 注22 野村昭光 1976 「箕輪遺跡出土の玉について」 『駿豆考古』第18号
- 注23 植松章八 1971 「第1章 千厩遺跡や月の輪平遺跡一ふるさと富士宮のあけぼのー」 『富士宮市史』上巻 富士宮市
- 注24 静岡県 1930 『静岡県史』第1巻
- 注25 小野真一・菅津海祥・塩川正男 1962 「富士宮市流沢遺跡出土の弥生土器（丸子式の新資料）」 『駿豆考古』第6号
- 注26 注23に同じ

第Ⅱ章 土 層

第1節 上石敷遺跡の土層

本遺跡の地質基盤は古富士集塊質泥流である。その上部に新富士火山の噴出した火山性降下物が堆積し、遺構・遺物はそのなかに埋没している。本遺跡の土地利用状況は水田であることもあり、緩やかな丘陵が段をもって整形されて、表土層より残存する部分は非常に稀である。さらに丘陵頂部と東西方向の緩斜面ではおのずから堆積巾も違い、また詳細な土層堆積状況も各部分によって差異がでるが、先にC-14グリッドで作成した模式図によって基本的な層序関係を確認したい。

① 表土層

スコリアを含む黒色有機質土層で、水田耕作による鉄分沈澱層（田マサ）をもつ部分もある。中世～近世陶器片、古銭、土師器・須恵器片などが混在する。中世～近世にかけての円形土壇（墳墓）が構築されている。

② 大沢ラビリ層

スコリア粒子が非常に密で、乾燥すると白っぽく変色しコンクリート状となって堅固となる。いわゆる富士マサである。奈良時代末～平安時代初頭、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構が表土層下部からの層に掘り込まれており、遺構確認面となる。なお、本遺跡に確認はないが、弥生時代中期遺跡はこの層の上部に検出される。

③ 黒褐色土層

黒色の強い土層帯で別名「黒ボタ」と称されている。上部より黒褐色、茶褐色、暗褐色に分層も可能であったが総称した。上半部は第2層の影響を受け、小粒のスコリア粒子が若干含まれ、下半部にしたい量は減る。本来、この層は縄文時代後期～晩期の包含層であるとされるが、本遺跡には遺構・遺物とも確認されず、縄文時代中期土器片が浮いた状況で若干数検出される。

④ 栗色土層

上層より褐色が強くなり、スコリア粒子も減る。弱い粘性をもつ。本地域の縄文時代の鍵層であり、栗色土層として共通呼称されている。しかし、地形条件等によって連続した堆積が認められず、鎖状の若干暗い層を混入するところもあり、代官屋敷遺跡・若宮遺跡等では褐色土層としている。縄文時代前期～中期にかけての遺物が包含され、散在的な集石跡が検出される。

⑤ 富士黒土層

大粒のスコリア粒子が含まれるため、第3層より明るく感ずるが、第4・第6層間に黒色バンド帯を形成する。下部に第6層との漸移帯が存在し、スコリア粒子をより多く含むためなお明るく感ずる。縄文時代早期～前期の包含層である。若宮遺跡ではこの層が包含層となって、

遺構は下部の漸移帯で確認された。代官屋敷遺跡では褐色土層（本遺跡の栗色土層にあたる）の下部から富士黒土層にかけて楕円押型文土器、縹糸文土器が検出された。本遺跡でも富士黒土層上部より縹糸文土器が検出され、栗色土層との間には縄文時代早期後葉の条痕文系土器の集中出土をみる。遺構のいくつかは本来、この層より構築されているであろうが、集石跡が土壌状（集石土壌跡）を呈する。さらには水田耕作によって富士黒土層以上を削平されるなどして、下部の第6層に確認するものが多かった。

⑥ 橙色土層

大粒のスコリア粒を多量に含むため赤色にちかい。スコリア粒の混入度合は部分的に差異があって、斜面に少なく平坦面、とくに窪み部分に量、堆積も多く厚い。その部分は第2層に似て堅固で乾燥すると白っぽく変色するが、混入される土層がローム系統の黄褐色土であるため極立って白さが増すことはない。先土器時代の包含層であろうが遺構・遺物の出土はなかった。

⑦ 黄褐色粘質土層

スコリア粒が極端に減り皆無にちかい。非常に黄色味を帯びて粘性に富み、本土層断面内では異質である。

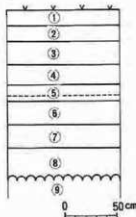
⑧ 暗黄褐色砂質土層

第7層より色調が暗くなり、スコリア粒も皆無にちかい。粘性はまったくなく、むしろ小砂塵を含んで砂質である。

⑨ 古富士泥流上層状地堆積物上部層

本遺跡の基盤である古富士泥流が浸食、堆積した、いわゆる層状地の上部層である。傘大～人頭大の礫から成って、河原状を呈している。

以上の土層堆積から成る。堆積中に若干の差異をもつものの富士根地区（代官屋敷遺跡・若宮遺跡等）に共通して、潤井川の対岸地域とも大過ない。



第6図 土層模式図

第2節 土層と遺構

本地域の遺構・遺物の包含層、各層の年代については市立第3中学校校庭に所在する滝戸遺跡の発掘調査（増島淳 1978年）によって指標されている。ここに記すると以下のとおりである。

第Ⅱ層 大沢ラビリ層

富士火山西南麓に広く分布し、その堆積時期はB. P (1950年を0年とする) 約2,700年前であり、弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の遺構は第Ⅱ層を切って構築、遺物は第Ⅰ層表土層下部を中心に包含される。

第Ⅲ層 黒褐色土層

極暗褐色土層と下層の栗色土層との漸移帯層に分層されているが、本土層分類では上半部と下半部と理解してよいであろう。堆積時期は極暗褐色土層が混入するカワゴ平バミス（天城火山群のカワゴ平火口由来の安山岩質軽石）からB. P 2,880 ± 120 年前に、漸移帯層は散在する赤色スコリア粒が千居遺跡や田貫湖周辺に標式的にみられる千居ラビリ（赤田貫）に該当するとして、千居遺跡の発掘調査結果より、およそB. P 3,500 年前後が考えられている。この層には縄文時代中期後葉～後期前葉の遺物がみられ、遺構は漸移帯層中を主体に存在する。

第Ⅳ層 栗色土層

栗色土層とその下部の漸移帯層を含んでいる。この層は鬼界ヶ島カルデラ起源と思われる茶色の火山ガラスが混入していることからB. P 6,000 年位前であり、栗色土層下部に縄文時代中期前葉の遺物が包含される。

第Ⅴ層 富士黒土層

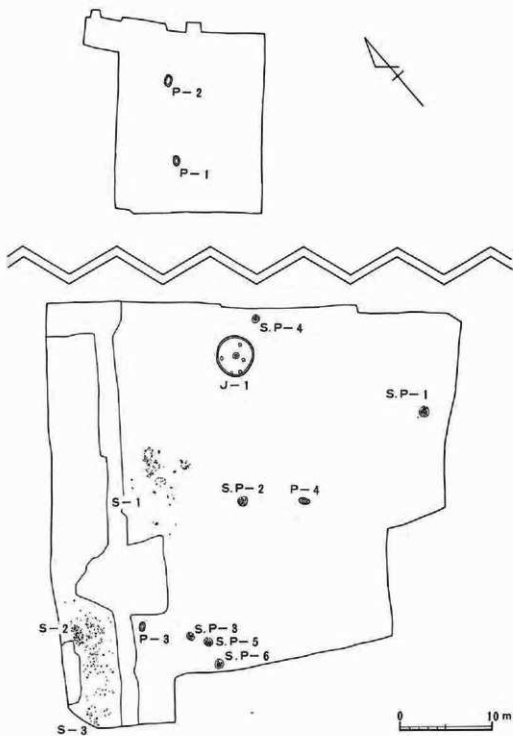
富士山東麓ではその堆積時期がB. P 6,000 ～8,000 年位前とされている。縄文時代早期中葉～前期の遺物が包含される。

その後の代官屋敷遺跡や若宮遺跡等、相次ぐ縄文時代早期遺跡の発掘調査によって、表裏縄文土器、撚糸文土器、押型文土器等、早期前葉の遺物が確認されるに至っている。

第Ⅵ層 褐色土層

本遺跡土層分類の橙色土層にあたる。フツウ輝石を多量に含む点から休場層（沼津市休場遺跡で細石器の包含層となったことから命名されている。）の最上部にあたり、堆積時期は洪積世最末期～沖積世初頭（B. P 10,000年位前）と考えられる。旧石器時代包含層とされる。

本遺跡の状況もそれらに追隨するが、各土層自体の移動も考慮しなければならないであろう。自然堆積される土層は皆無に等しいかも知れない。



第7図 縄文時代全体図

第三章 縄文時代

第1節 遺構

本調査によって得た縄文時代の遺構は14基である。その内訳は以下のとおりである。

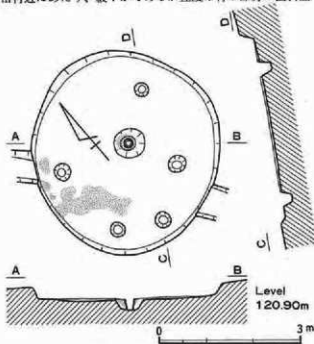
1. 竪穴住居跡 1基
2. 集石土壇跡 6基
3. 集石跡 3基
4. 土壇跡 4基

これらの遺構は大略、縄文時代早期後葉と中期初頭に分けられる。

1. 竪穴住居跡

J-1号竪穴住居跡(第8図、図版第2)

位置 E-13・14グリッドにまたがって検出される。平面プランの中央南寄りを古墳時代初期のM-1号溝状遺構に重複されて、壁面を若干欠いている。北西壁には接するように律令時代のR-2号竪穴住居跡が存在するなど、時代を超えた遺構密集地である。縄文時代の遺構は東側へ2~3m程して第4号集石土壇跡をみるが、時期的にはズレており、南西側へ8~10m程して検出される第1号集石跡が関連をもとう。調査区の北側がひろく工事の完了もみるため、本竪穴住居跡が単独で存在したか、あるいは集落を構成していたかは判断されないが、代官屋敷遺跡における五領ヶ台式期の竪穴住居跡は単独で存在していた。標高は120.5~121.0m付近にあたり、緩やかであるが丘陵の背の部分の西斜面を利用して構築される。



第8図 J-1号竪穴住居跡実測図

構造 形状は略円形を呈し、規模は435×410cm、床面積約18㎡を測る。長軸方位はN-45°-Eを示す。壁高は北壁で30cm、南壁で15cm程を測る。これは南壁側が水田耕作によって削除されたためである。床面は中央が若干窪み加減の掘り方に、褐色ブロック混入土によって平坦に保たれている。柱穴は5坑が確認され、それぞれ径30~35cm、深さ30cm程を平均して測る。炉は床面の中央部に位置し、口縁部、及び底部を欠いた深鉢型土器が使用される。いわゆる埋裏

炉が施されている。それは径65cm、深さ25cm程の掘り方を有し、底面を墳底に接して中央に設置され、埋土内には焼土が混在している。床面の西側一帯には厚さ5～10cm程の焼土が散在している。

遺物は埋壙炉に使用された深鉢型土器(第25図-214)、土畿、用途不明の磨製石器等のみ。時期は中期初頭、五領ヶ台式期の範疇に置かれる。

2. 集石土壇跡

第1号集石土壇跡(第9図、図版第3)

位置 I-15グリッド中央北寄りに検出される。標高は120.0 m付近にあり、南側調査区の南東端に位置する。それより地形は5 m程して急激に下って湿地帯に没している。近隣に遺構の存在はなく、西側へ15～20 m程離れて第2号集石土壇跡、第4号土壇跡等に接するだけである。

構造(集石) 95個の角礫より構成される。範囲は110×100 cm程を測り、土壇域の内側に沿ってなる。構成礫は10～25 cm程の角礫で、墳底より20 cm程のなかに2～3層がみられ、中央部と西壁側に隙間をもつが、他はほぼ充満される。下層に大形礫が目立つ。礫には人為的な割礫行為は認められない。また、火熱を受けた痕跡も明確に看取することはできなかった。土壇) 形状は略円形を呈して、規模は115×95 cm、深さ10 cm程を測る。断面は「碗」状である。長軸方位はN-77°-Eを示す。底面・壁面に火熱された痕跡はなく、また埋土にも焼土等の混入をみないでいる。

本集石土壇跡が検出された一帯は水田耕作によって上部の遺物包含層を大きく欠くため、時期的な把握は不明瞭となるが、形態は縄文時代早期の一般的な集石土壇跡に類似しよう。

第2号集石土壇跡(第9図、図版第4)

位置 E-17グリッド北寄りに検出される。標高は119.90 m付近にあり、南側調査区の中央、緩やかな丘陵の背の部分に位置する。南側へ1～2 m程して古墳時代初頭のK-5・6号堅穴住居跡や焼土を内包する大形土壇が重複して存在するが、縄文時代の遺構では南東側に6 m程して第4号土壇跡、北側へ8 m程して第1号集石跡をみる。

構造(集石) 40個の角礫より構成される。範囲は90×70 cm程を測り、土壇域を越えることなく、内側に沿っている。構成礫は5～15 cm程で第1号集石土壇跡構成礫より一回り小さい。また、上部の遺物包含層とともに土壇上半部、さらに内包礫も削取されたらしく、非常に隙間をもってなる。底面には30×30 cm、厚さ4 cm程の偏平角礫が安置されている。上部の準大の角礫に火熱を受けた痕跡を明確に判断することはできなかったが、偏平礫は確実に火熱を受けて、赤色化・タールの付着が認められた。土壇) 形状は略円形を呈し、規模は90×80 cm、深さ10 cm程を測る。断面は「碗」状である。長軸方位はN-76°-Eを示す。底面・壁面に火熱された痕跡はないが、隙間、埋土には若干の焼土粒・炭化物の混入をみる。

なお、本集石土壇跡も水田耕作等によって上半部を削取され、明確な形状・構造、さらに構築時期等を、把握できないでいる。しかし、その集石形態、つまり底面に偏平礫を安置して、焼土・炭化物等の混入等、火に関する行為を指摘できるなど、若宮遺跡の集石土壇跡に類似する。

第3号集石土壇跡（第9図、図版第5）

位置 D-19・20グリッドの境線中央に検出される。標高は119.50m付近にあり、南側調査区の南西寄り、地形が南西方向に徐々に下ろうとする地点である。南東側へ2m程して第5号集石土壇跡、さらに3m程して第6号集石土壇跡、逆に北西側に5m程して第3号土壇跡が存在する。しかし、それらとは時期的なズレも認められ、比較的疎隔されて位置する。

構造 集石) 8個の角礫より構成される小規模な集石土壇跡である。範囲は40×40cm程を測り、土壇域に沿ってなる。構成礫は28×13cm、厚さ5cm程の偏平割礫と、長さ30cm強で、巾が数cm程を測る四角柱状の割礫によって「 Γ 」状の区画された内を、5~10cm程を測る拳大の火山性赤色礫6個が充填している。土壇) 形状は円形を呈し、規模は53×50cm、深さ数cm程を測る。断面は「 Γ 」状である。長軸方位は一応N-46°-Eを示す。底面・壁面に火熱された痕跡はなく、隙間、埋土内にも焼土粒・炭化物は認められない。

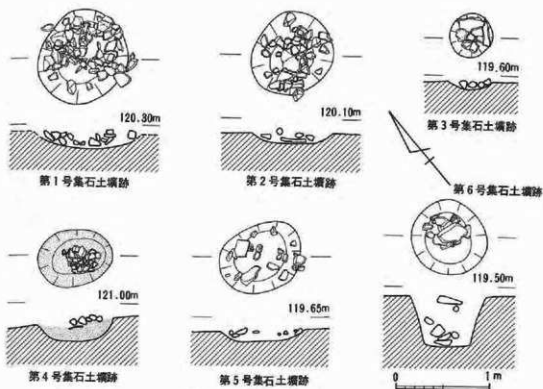
本集石土壇跡も水田耕作等によって上部を削平されるため、伴出遺物がなく構築時期等不明な部分が多い。検出層が富士黒土層上部であることや、偏平礫、火山性赤色礫等を用いてあたかも積んだような集石形態は代官屋敷遺跡第3・4号集石跡にみられることから、早期の所産である可能性がたかい。

第4号集石土壇跡（第9図、図版第6）

位置 E-13グリッド東寄りに検出される。標高は120.80m付近にあり、南側調査区の最北端、緩やかに下る丘陵の背の部分の西斜面に位置する。南西側へ3~5m程してJ-1号堅穴住居跡、古墳時代M-1号溝状遺構、律令時代R-2号堅穴住居跡等が重複して存在する。いずれも時期的にはズレることから、大きく疎隔されるが、北側をひろく工事の完了をみるために定かでない。

構造 集石) 20個の角礫より構成される。範囲は40×30cm程を測り、土壇中央部にまとまって集石される。構成礫は5~10cm程を測り、他集石土壇跡に比して最も小さい。集石の下部には縄文時代早期野島式土器（第14図-13）の大型破片が安置される。礫は全てに火熱を受けた痕跡が認められ、数点の礫や土器片にタールの付着もみる。土壇) 形状は長円形を呈し、規模は80×60cm、深さ25cmを測る。断面は「U」状の上半部を削取される。長軸方位はN-55°-Wを示す。底面・壁面に火熱された痕跡はないが、埋土には多量の炭化物・焼土が混入する。しかし、それは攪拌された状態であり、通例の炉穴跡の堆積を示していない。なお、集石形態も完全に異なっている。

第5号集石土壇跡（第9図、図版第7）



第9図 集石土壇跡実測図

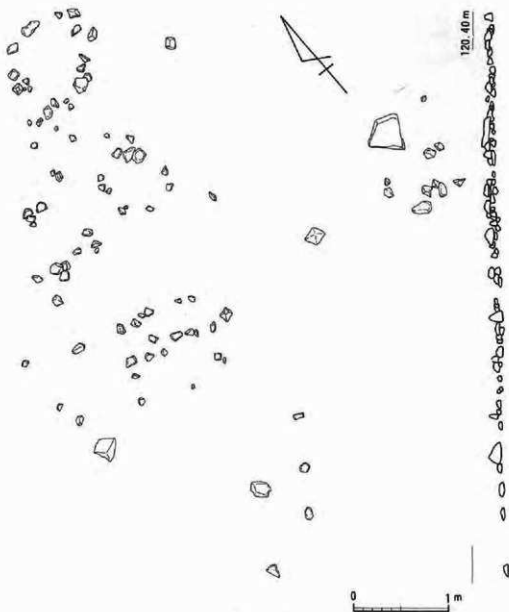
位置 D-20グリッド東端、E-20ポイントに隣接して検出される。標高は119.50m付近にあり、南側調査区の南端で地形が南西方向に除々に下ろうとする地点である。北西側に2m程して第3号集石土壇跡が存在するが、早期の所産である可能性がたかく、南側へ3m程した第6号集石土壇跡が時的にもちかい。

構造 集石) 21個の角礫より構成される。範囲は80×60cm程を測り、土壇域に沿ってなるが、最も散在的な集石である。構成礫は20cm程の角礫2個と、10cm内外を測る拳大の礫からなる。3分の1程が火山性の赤色礫であるが人為的行為ではなさそうである。土壇) 形状は長円形を呈し、規模は95×75cm、深さ15cm程を測る。断面は「皿」状で比較的浅い。埋土内には若干の炭化物が混入するが、火に関する行為は認め難い。礫間より縄文時代中期の土器片が確認され、その所産であろう。形態も中期～後期前半の配石遺構内に点在する「土壇」に類似する。

第6号集石土壇跡(第9図、図版第8)

位置 E-20グリッド南西寄りに検出される。標高は119.30m付近にあり、調査区の最南端に位置する。地形はそれより南西方向へ除々に下っていく。南側は調査区外となり不明となるが、北側に3m程して第5号集石土壇跡が存在している。

構造 集石) 19個の角礫より構成される。検出面上部より数個の角礫が集石されていたことから、集石土壇跡の範疇に扱われたが、性格は異なる。構成礫は15～20cmの大形角礫が目立



第10図 第1号集石跡実測図

ら、それに拳大の礫を伴っている。集石状況も50×40cm程の範囲に上部に7個、中間部分になく、底面より重なるように12個が認められる。したがって連続的な集石形態を示すものではなく、また構成礫も通例の集石土壌跡のものとは差異がある。火熱された痕跡もない。土壌)

形状は略円形を呈し、規模は85×75cm、深さ55cmを測る。断面は完全な「U」状である。長軸方位はN-6°-Eを示し、ほぼ南北にとる。埋土内には若干の炭化物が混入するが、底面・壁面に火熱された痕跡はない。形状から縄文時代の一般的な土壌に何らかの意図をもって礫が伴った状況と言えよう。境内より縄文時代中期土器片が検出される。

3. 集石跡

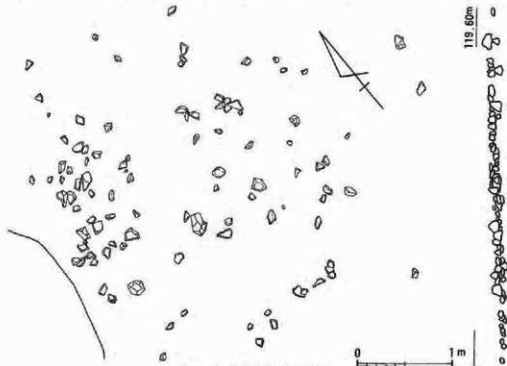
第1号集石跡(第10図, 図版第9)

位置 C・D-16・17グリッドにまたがって検出される。標高120.00~120.20m付近にあり、南側調査区の中央西寄り地形は南西側に除々に下っていく。北側から南側にかけてそれぞれ5m程離れて、古墳時代K-8号竪穴遺構、律令時代R-1号竪穴住居跡、縄文時代第2号集石土壌跡、古墳時代K-4・5・6号竪穴住居跡がとり囲んでいる。時期的に同遺構は北西側へ15m程してJ-1号竪穴住居跡、南西側へ20m以上してS-2号集石跡をみて、比較的疎隔されている。

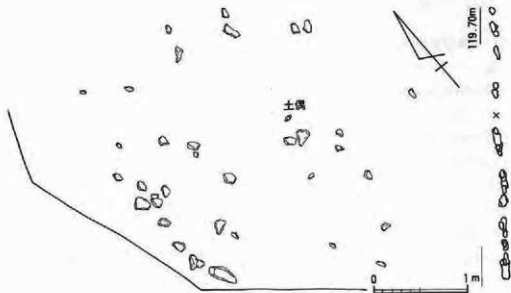
構造 126個の角礫より構成される。範囲は600×500cm程を測り、南北に長くもつ。北側に密、南側に疎となるが全体的には散在的である。総括的に1集石跡と扱ったが、150cm程の円形に組まれた5~6単位の集合も考えられる。集石内部に土壌は確認されない。構成礫は40cm程の巨礫も数個確認されるが、全般的には5~10cm程の拳大の礫が多い。約3分の2程が火山性の赤色礫で占められ、人為的な割礫、火熱礫は含まれていない。集石内には石皿破片がみられた。集石レベルは地形に沿ってなり、一部に2段に積まれる箇所もある。確認面が栗色土層内で、上部や集石内部より検出される土器片も縄文時代中期であるから、その所産であろう。

第2号集石跡(第11図, 図版第10)

位置 B-19・20グリッドにまたがって検出される。標高119.30m~119.50m付近にあり、



第11図 第2号集石跡実測図



第12図 第3号集石跡実測図

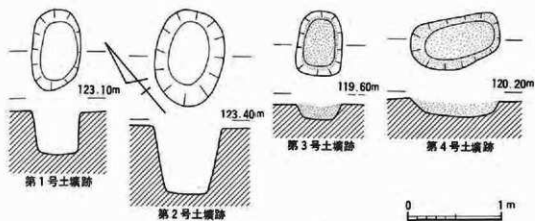
南側調査区の南西隅で、標高が一段とひくくなる地点である。北東側と南西側を大きく攪乱されている。北東側へ5m程して古墳時代K-3号竪穴住居跡、南西側へ2m程してK-7号竪穴住居跡が存在する。縄文時代遺構は南側へ連続するように第3号集石跡、南東側へ5m程して第3号土塊跡、さらにむこうに第3・5・6号集石土塊跡をみる。

構造 134個の角礫より構成される。範囲は800×400m程を測り、やはり南北に長くもつが、とくにB-20ポイント付近に集中して、全体的にはもっとも密である。集石内部には土塊は確認されない。構成礫は5~10cm程の拳大の礫を主体として、比較的統一されている。火山性の赤色礫は3分の1程含まれるが、礫自体に人為的な行為を看取することはできない。集石レベルは地形に沿ってなり、密な箇所は2~3段に積まれている。構築層は栗色土層内で、上部や集石内部より縄文時代中期土器片の集中出土をみる。また、下層の富士黒土層にかけて早期の遺物が確認される。

第3号集石跡(第12図、図版第10)

位置 B-21グリッド全域に検出される。標高119.40m~119.50m付近にあたり、南側調査区の最南西端に位置する。南西方向へ下る地形が集中してもっともひくくなる地点である。北側へ第2号集石跡に連続している。東西両側を攪乱溝がはしるが、影響はないようである。

構造 36個の角礫より構成され、もっとも散在的である。範囲は300×350cm程を測るが、南側に延長されていることは充分に知れる。調査区域に密の部分が認められ、北側にむかうにしたがい疎となって、第2号集石跡に接する。構成礫は30cm程を測る柱状の角礫が1個存在するが、他は5~10cm程の拳大の礫を主体としている。約3分の1程の火山性赤色礫が含まれるが、礫自体に人為的な行為は看取されない。集石レベルは地形に沿ってなり、密な部分は2



第13図 土坑跡実測図

段に積まれる箇所もある。構築層は栗色土層内で、上部や集石内部より縄文時代中期土器片をみる。さらに土偶の胸部破片(第41図-1)も確認される。

4. 土坑跡

第1号土坑跡(第13図, 図版第11)

位置 D-4グリッド南西隅に検出される。標高123.00m付近にあり、北側調査区の中央南寄り、調査区自体は略平坦であるが、南側調査区より一段たかい地形となる。東側に隣接して古墳時代K-1号竪穴住居跡をみる。縄文時代遺構は北側へ9m程して第2号土坑跡が存在する。

構造 形状は長円形を呈し、規模は90×55cm、深さ45cmを測る。長軸方位はN-44°-Eを示す。断面は「U」状であり、壁面は直立、底面は平坦と角張る。遺物の出土はないが、周辺より縄文時代中期の土器片をみることから、その所産であろう。

第2号土坑跡(第13図, 図版第11)

位置 D-3グリッドの北端、D-2グリッドとの境線上に検出される。標高123.30m付近にあり、北側調査区の中央北寄りに位置する。本遺跡に検出される遺構中、もっとも北側で、たかい標高を示す。南側へ8～9m程して、第1号土坑跡、古墳時代K-1号竪穴住居跡をみる。

構造 形状は長円形を呈し、規模は100×70cm、深さ75cmを測り、本遺跡の土坑跡において最大級である。長軸方位はN-49°-Eを示す。断面は若干外開きの「U」状である。底面は平坦である。形状、断面形とも第1号土坑跡に類似する。やはり、伴出遺物はないが縄文時代中期の所産であろう。

第3号土坑跡(第13図, 図版第12)

位置 C-19グリッド中央南寄りに検出される。標高119.50m付近にあり、南側調査区南寄り、除々に地形が下っていく地点である。北・西隣には攪乱がはしっている。北東側に隣

換して律令時代R-3号竪穴住居跡、古墳時代K-4号竪穴住居跡が重複して存在する。縄文時代遺構は西側へ5m程して第2号集石跡、東側へ5m程して第3号集石土壇跡、さらに第5・6号集石土壇跡と続いている。

構造 形状は長円形を呈し、規模は70×45cm、深さ18cmを測る。竪上半部は大きく削平されている。長軸方位はN-45°-Eを示す。断面は外開きの「U」状で、底面は平坦である。埋土には焼土が攪拌された状況で検出され、それは炉穴跡の堆積ではなくして、人為的な行為が感じられる。伴出遺物がなく時期的に不明瞭であるが、埋土内の焼土の状況は第4号集石土壇跡に似る。

第4号土壇跡（第13図、図版第12）

位置 F・G-17グリッドの境界線上の北寄りに検出される。標高120.10m付近にあたり、南側調査区のはほぼ中央である。南西側に隣接して古墳時代K-5・6号竪穴住居跡が存在する。縄文時代遺構は北西側に7m程して第2号集石土壇跡をみる。

構造 形状は長円形を呈し、規模は95×55cm、深さ17cm程を測る。竪上半部は大きく削平されている。長軸方位はN-63°-Wを示し、前3者と直角程に振れる。断面は底面が湾曲して「皿」状である。規模が若干大きくなるが形状・断面形とも第3号土壇跡に類似する。埋土もやはり焼土が攪拌された状況で検出される。伴出遺物がなく時期的に不明瞭で同時期を想定するしかない。

第2節 遺物

本調査によって得た縄文時代の遺物は土器および、石器、土製品である。

1. 土器

本調査によって得た土器は以下のとおりである。

第Ⅰ群土器 撚糸文土器

第Ⅱ群土器 野島式土器

第Ⅲ群土器 五領ヶ台式土器

第Ⅳ群土器 廣島式・北裏CⅠ式類似土器

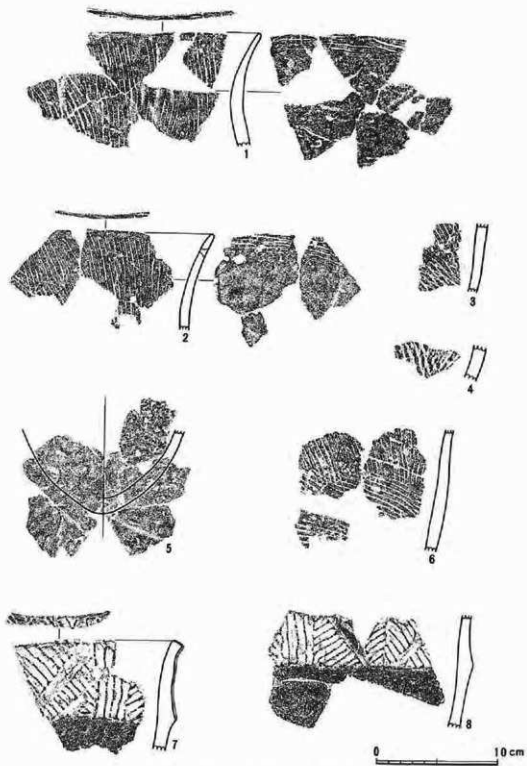
第Ⅴ群土器 曾利Ⅰ式土器

に比定され、主体は縄文時代早期後葉、中期初頭におかれる。

第Ⅰ群土器（第14図1～6・図版第13）

撚糸文の施文されるものを本群とする。4の小破片を除き同一個体である。

口縁部は外反し、胴部は弱い膨らみを有し、底部は尖底となる。1段L燃りの撚糸文が口縁から胴部にかけて縦位または斜位に施文され、胴部で交叉する部分が見られる。口縁部内面および



第14圖 土器拓影圖①(第I・II群土器)

口唇部に同一文様が横位に施文される。胴下半部以下は無文となる。器厚6～10mm。胎土には多量の石英・長石粒と繊維が含有される。焼成良好。色調は黄褐色から茶褐色を呈する。推定口径15～18cm。

4は太め1段R摺りの燃糸文が施文される。胎土に微細な石英・長石・金雲母粒と繊維が含有される。

第Ⅱ群土器（第14図7～第16図28・第31図354～359、図版第14～15・30）

縄文時代早期後葉の土器を本群とする。

第1類土器

野鳥式土器を一括する。文様より4分類される。

a種（7・8） 細隆起線文により文様が構成されるものを一括する。1個体出土する。

口縁部は弱くびれながら外反し、小さい波状口縁を呈し4個の波頂部を有する。頸部に段を有し、以下胴部は直行し無文部となる。推定口径24cm前後。

細隆起線文は段上部に集中して施文される。波頂部より細隆起線文を垂下させ、円周を4分割し、区画中心線より右半分が右下がり、左半分が左下がりの細隆起線文が充填される。それに直行するよう波頂部から対角線状に巾10mmにわたり文様をすり消し、凹線状の文様効果を描出している。細隆起線文は口唇部まで連続して施文される。

胎土には小礫・灰白色砂粒と繊維が含有され、色調は黄褐色から赤褐色を呈する。器厚8～12mm。

b種（9～12） 細隆起線文と細い沈線文により文様が構成されるものを一括する。

口縁部は直立し小さい波状口縁を呈する。波頂部は4つが推定される。頸部に段を有し、段上部の文様帯は巾5cm前後と狭い。段下部は弱く外反し無文部となる。

波頂部より細隆起線文を垂下させ円周を分割し、区画中心に縦位の沈線文を施文し、その間に対角線状の斜位の沈線文が施文される。口唇部には丸い棒状の施文工具の側面を押圧した刻目文が施文される。

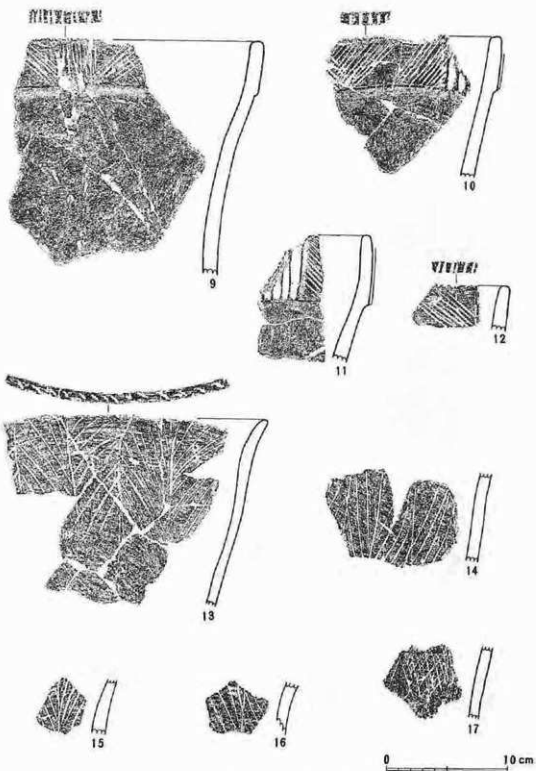
胎土には灰白色砂粒・径10mmの小礫と繊維が含有され、色調は黄褐色から暗褐色を呈する。器厚8～12mm。外面に炭化物が付着する。

c種（13～17） 細線文により文様が構成されるものを一括する。

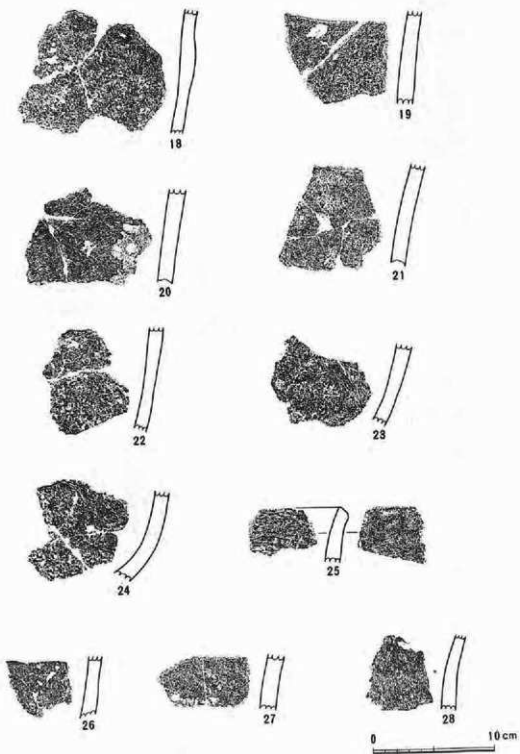
13は口縁部大形破片で弱く外反し平口縁を呈する。等間隔に垂下する細線と、その間に施文される斜位の沈線文により、大柄で不規則な綾杉文状の文様が描かれる。口唇部には丸い棒状工具の側面を押圧した刻目文が斜位に施文される。内外面に明瞭な擦痕が見られる。

胎土には石英・長石の砂粒と繊維が多量に含有され、色調は茶褐色から暗褐色を呈する。器厚8～10mm。14～16は13の胴部破片である。

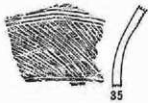
17は格子目文状に沈線文が施文される。胎土・焼成は13に類似する。



第15圖 土器拓影圖② (第Ⅱ群土器)



第16图 土器拓影图③(第Ⅱ群土器)



第17回 土器拓影圖④ (第Ⅲ群土器)

d種(18~28) 無文土器片を一括する。26の口縁部破片を除き、すべて胴部破片で、内面に擦痕が見られる。

18は7・8の胴部破片である。19~21・27は9の胴部破片で外面に炭化物が付着する。25は底部近くの破片で尖底が推定される。

26は弱く外反する口縁部で、内外面に擦痕が見られる。胎土に大粒の石英・長石と微細な金雲母と繊維が含有され、色調は黄褐色を呈する。

第2類土器(354~356)

沈線文と貝殻腹縁文の施文されるもの。器厚9mm。胎土には微細な長石・石英・金雲母粒と微量の繊維が含有される。色調はにぶい橙褐色を呈する。

第3類土器(357~359)

絡条体圧痕文の施文されるもの。口縁部は弱く外反し、胴部は脹らみを有する。器厚7~9mm。胎土に長石・石英粒を含有し、色調は黄褐色を呈する。

第Ⅲ群土器(第17図29~第27図274、図版第16~26)

縄文時代中期初頭の五類ヶ台式土器を本群とする。

第1類土器(29~81)

半截竹管の内側を用いて描出する沈線を密集させた集合沈線文により器面を区画して文様が構成されるものを一括する。

胎土に長石・石英・金雲母・黒雲母等が含有され、色調は黄褐色から茶褐色を呈する。器厚6~8mm。胴部は直立または弱く外反する。口縁部は外側に開き、先端部で内側に「く」の字状に屈曲するものと、胴部よりやや開きぎみに直立するものが見られる。平口縁を呈する。

a種 器面全面を集合沈線文で埋めるもの(29~44)

集合沈線文を横位に巡らして器面を区画し、区画内に斜位または縦位の集合沈線文を充填するものを主体とする。32・33の口唇部には半截竹管先端を連続して刺突した連続爪形文が施される。40の底部は区画内に縦位の連続山形文が充填される。

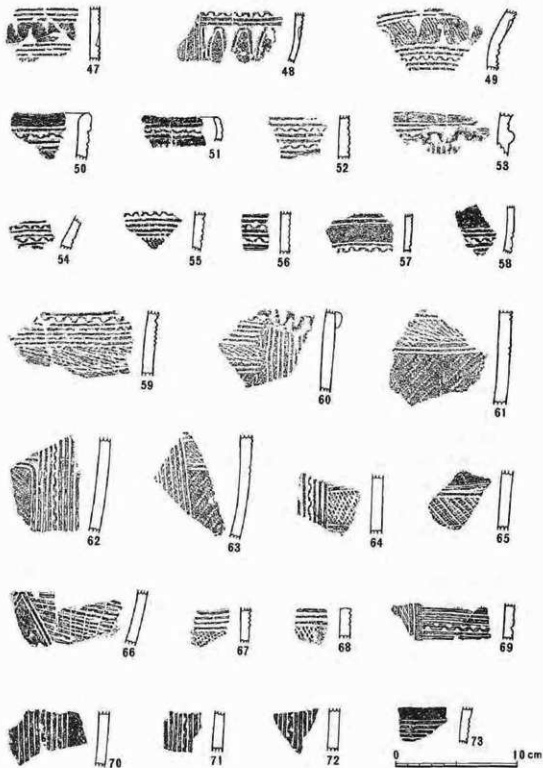
b種 印刻文が施されるもの(45~49)

45・46は横位の集合沈線文と縦位の鏡切沈線文を直交させた格子目文を全面に施文し、円弧文を描き外側を印刻する。47は区画内に三角印刻文が交互に施される。

48・49は集合沈線文に交互刺突文が伴う。48は区画内に縦長の連弧文を施し、弧内に浅い沈線を用いて格子目文を施文し、弧外を印刻する。49はLRの斜縄文を地文とし、区画内には三角印刻文が交互に施される。

c種 集合沈線文に交互刺突文が伴うもの(50~73)

集合沈線文を横位または縦位に施文して器面を区画する。区画内は無文とするもの。地文の細文を残すもの。斜位の沈線文を充填するもの。格子目文を充填するもの等が見られる。



第18图 土器拓影图⑤ (第Ⅱ群土器)

53・60 は頸部に巡らす集合沈線文上に隆帯を添付し、隆帯より垂下する集合沈線文が施される。

d種 直立する口縁部を呈するもの(74~77・80・81)

74~77はL Rの斜縄文を地文とする。口唇部より幅3cmを残して横位の集合沈線文を施し、74は隆帯を添付し、垂下する集合沈線文が施文される。

80・81はL Rの斜縄文を地文とする。集合沈線文および波状の隆帯文により器面を区画し、区画内に縦位または渦巻状の集合沈線文が施文される。

第2類土器(82~88)

半截竹管先端を連続して刺突した連続爪形文を施文するもの(82~88)

a種 隆帯を添付して連続爪形文を施文するもの(82~88)

82~84・87は同一個体と思われる。外反する口縁部には耳状の突起を有し、突起外面に三角印刻文を施す。83は屈曲する頸部破片である。84は交互刺突文・格子目文が施される。87は縦位の連続爪形文を施し、区画内に格子目文が充填する。

85・86は直立する口縁部で、連続爪形文にそって集合沈線文を施される。小形把手状の隆帯を添付する。

b種 89・90は「く」の字状に内側に屈曲する口縁部で、屈曲部に連続爪形文と交互刺突文が施文される。

第3類土器(91~99)

刺突文が集合沈線文以外の文様と併用されるもの。

92は頸部文様帯に半截竹管内面を用いた幅広い沈線文を施し、交互刺突文が施文する。口縁部には縄文が施文され、胴部は無文となる。

93~95は縄文を地文とする。93は2本の太い沈線文の間に交互刺突文が施される。94は隆帯に沿って交互刺突文が施文される。

96はR Lの斜縄文を地文とし、太い沈線文に刺突文が施される。97は外反する口唇部で、隆帯に沿って刺突文が施文される。

98は斜縄文を地文とする。縦位の隆帯文と沈線文を施文し、丸棒側面を押圧する刺突文を沈線文間に施す。

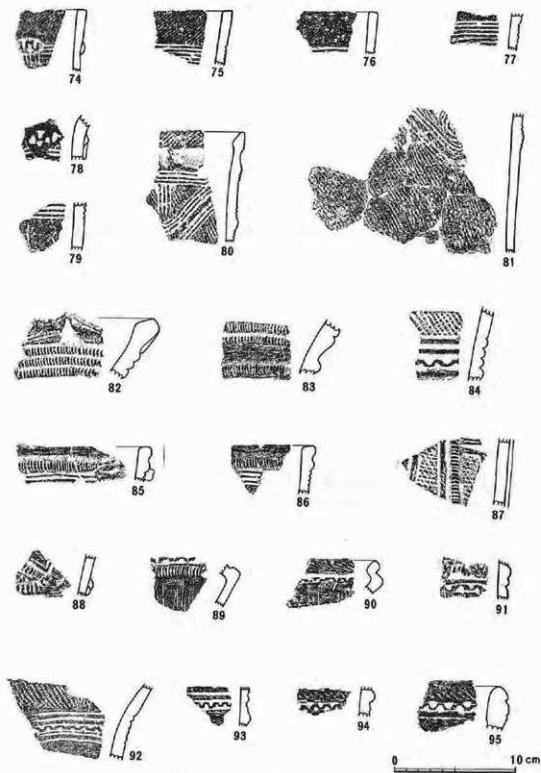
99はR Lの斜縄文を地文とする。幅広い平行沈線文を横位に巡らし、刺突と三角印刻文が施文される。

第4類土器(100~116)

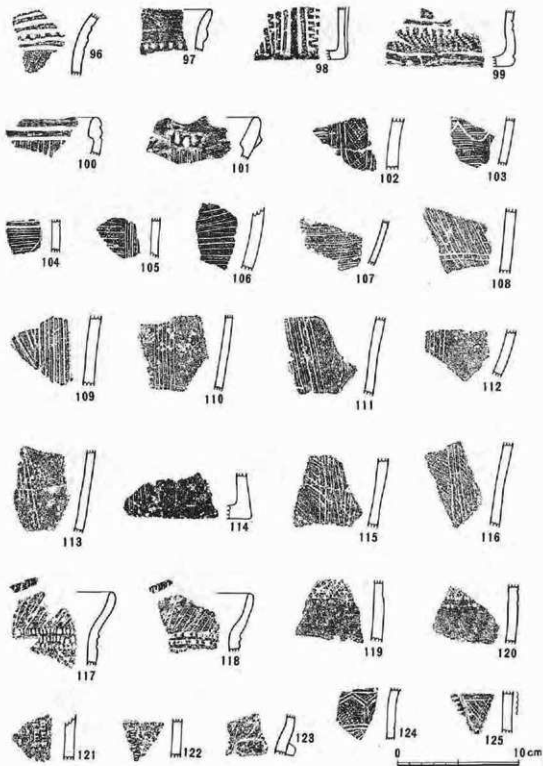
平行沈線文が施文されるもの。

横位の平行沈線文を施文するもの(103~107)。縦位の平行沈線文を施文するもの(105・108・109)。縦位の帯状に平行沈線文を施文するもの(110~116)が見られる。

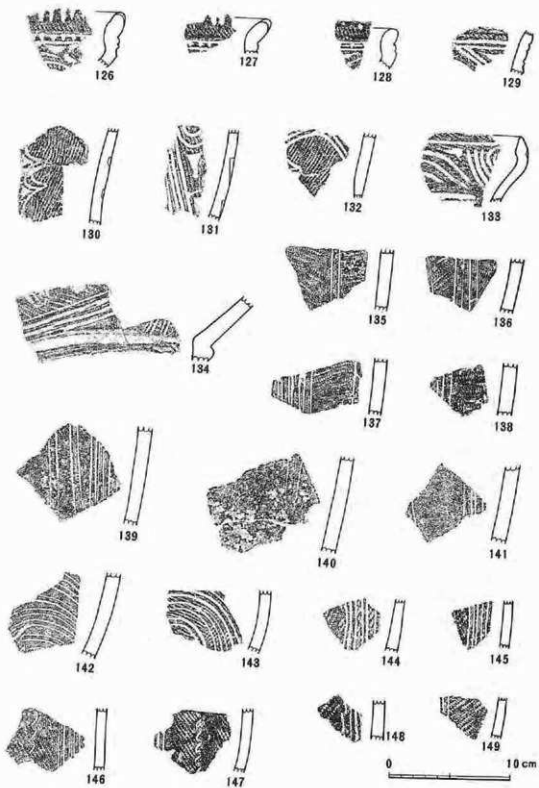
100・101は同一個体で、口唇部に小突起を有する。幅広い平行沈線文と隆帯文を施文し、



第19圖 土器拓影圖⑥ (第Ⅲ群土器)



第20图 土器拓影图⑦(第三群土器)



第21圖 土器拓影圖⑧ (第三群土器)

以下縦位の平行沈線文を施す。

114 は張り出し底を呈し、115・116 はLRの斜縄文を地文とする。

第5類土器 (117～123)

同一個体である。口縁部は開きながら弱く内湾し、波状を呈する。口縁部および口唇部に細い沈線文が施文される。篋状工具先端を用いた連続刺突文を頸部に巡らし、区画内に格子目文を充填して文様帯を形成する。頸部に横位の小形把手状の隆帯が添付される。胎土に石英・長石・金雲母が多量に含有される。

第6類土器 (124)

頸部の区画内に沈線文によるY字状文が施文されるものが1点出土する。RLの斜縄文を地文とする。

第7類土器 (126～133)

斜縄文を地文とし、沈線文により文様を描出して、文様内に印刻文を施すもの。

126～128 は「S」字状に屈曲する口縁部で波状を呈し、波頂部に刻み目文が施される。屈曲部の沈線文に刺突文を施し、沈線文間に三角印刻文を印刻する。

130 は文様内が正三角形に印刻され、131 は縦長の三角印刻文が施文される。

133 はキャリパー状口縁を呈するもので、太い沈線により曲線文を施し、小さな三角印刻文を施す。

第8類土器 (134～145)

平行沈線文が施文されるもので、第4類土器に比べ、文様が大柄で器厚が10～12mmと厚く、器形が大形化する。

大きく外反する口縁部には斜位または曲線の平行沈線文が施文され、胴部は縦位と渦巻状の平行沈線文が施文される。RLの斜縄文を地文とする。

第9類土器 (150～161)

明瞭な斜縄文を地文とし、沈線により文様を描くもの。

口縁部は内湾しながら弱く開く。弱い波状口縁または小突起を有する。沈線文は口唇部直下と頸部に横位に巡らし、口縁部は波状または渦巻状に施文し、沈線上に刺突文を施す。胴部は結節縄文が施文される。

152 は隆帯が添付され、155 は円弧文と刺突文が施文される。

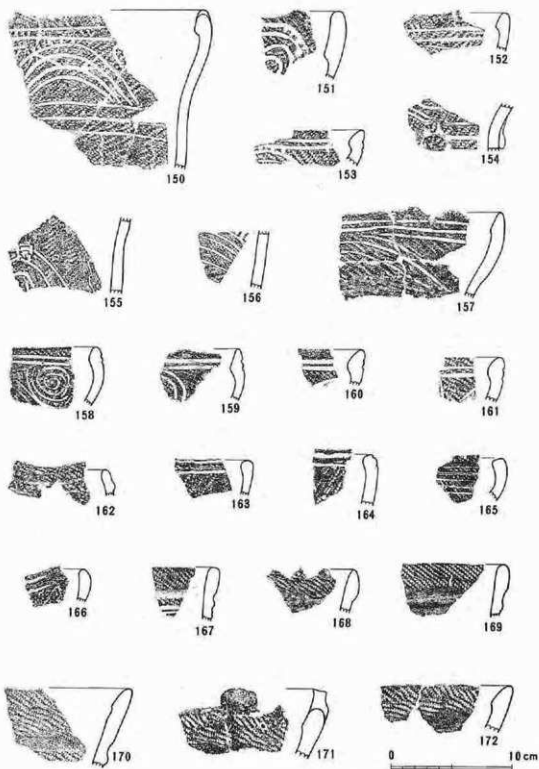
第10類土器 (162～172)

その他の斜縄文を有する口縁部破片を一括する。

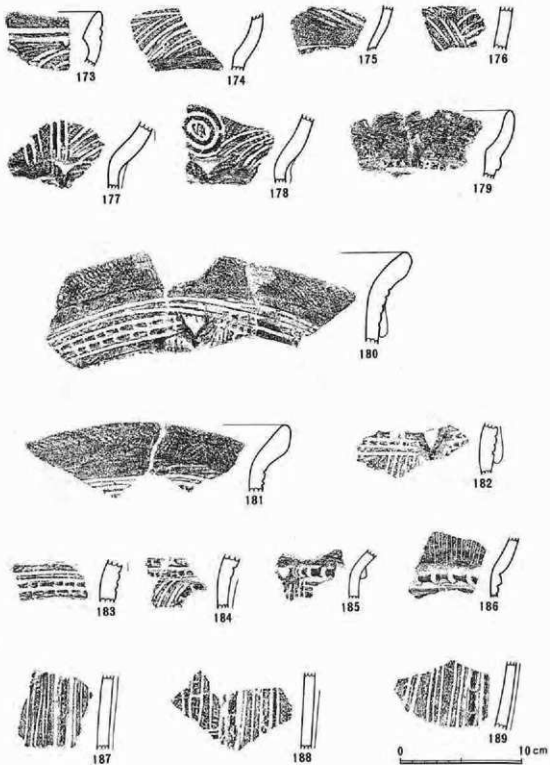
162 は隆帯を巡らし縄文が施文される。163～166 は幅広の沈線文が施文される。

168 は鋸歯状の口唇部を呈する。170～172 はRLの斜縄文が施文され、171 には突起が見られる。

第11類土器 (173～225)



第22图 土器拓影图⑨(第Ⅲ群土器)



第23圖 土器拓影圖⑩ (第三群土器)



190



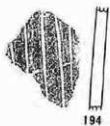
191



192



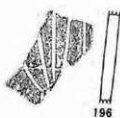
193



194



195



196



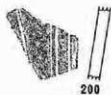
197



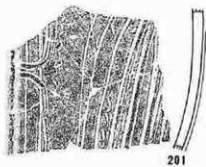
198



199



200



201



202



203



204



205



206



207



第24图 土器拓形图①(第三群土器)

粘土紐を添付した隆帯文が施文されるもの。

a種 頸部にY字状隆帯文を有するもの(173～178・180～207)

173～178 は開きながら内湾する口縁部を呈し、RLの斜縄文を地文として沈線により重円弧文等が施文される。

180～182 は肥厚外反する口縁部を呈し、RLの斜縄文が施文される。頸部に沈線文を巡らし、沈線文間に半截竹管先端を連続して押し引いた文様が施文される。Y字状隆帯文は4単位が推定される。

胴部は弱い反りを有する。結節縄文を地文とし、Y字状文より垂下する隆帯文と、沈線文が施文される。

185・186・190・191 は隆帯上に爪形文が施文され、口縁部は縦位の平行沈線文が施文される。185 は変形のY字状隆帯文が施文され、垂下する平行沈線文と横位の平行沈線文が施文される。

b種 179 は波状または突起を有する無文口縁を呈し、頸部に1帯の隆帯文を添付して刺突文が施文される。

c種 横位の隆帯文が施文されるもの(208～211)

隆帯文上にはRLの斜縄文が施文され、208・209 は平行沈線文が施文される。

d種 垂下する隆帯文が施文されるもの(214～225)

214 はJ-1号堅穴住居跡埋埋炉として使用されたものである。弱く外反する。垂下する4単位の隆帯文を施し、RLの縄文を斜位または縦位に施文する。平行沈線文が隆帯文の両側と頸部に施文される。

212・215・216 は55の胴部破片でLRの斜縄文が施文され、頸部に刺突文が施される。

第12類土器(146～149・226～251)

縄文の施文されるもの。

a種 RLの斜縄文が施文されるもの(226～230)

b種 結節縄文の施文されるもの(146～149・231～251)

S字状の結節縄文を伴うRLの斜縄文が施文される。結節は原体端に見られるもので、「条自身で結節を作って、摺を止めてあること」とするものである。

注1

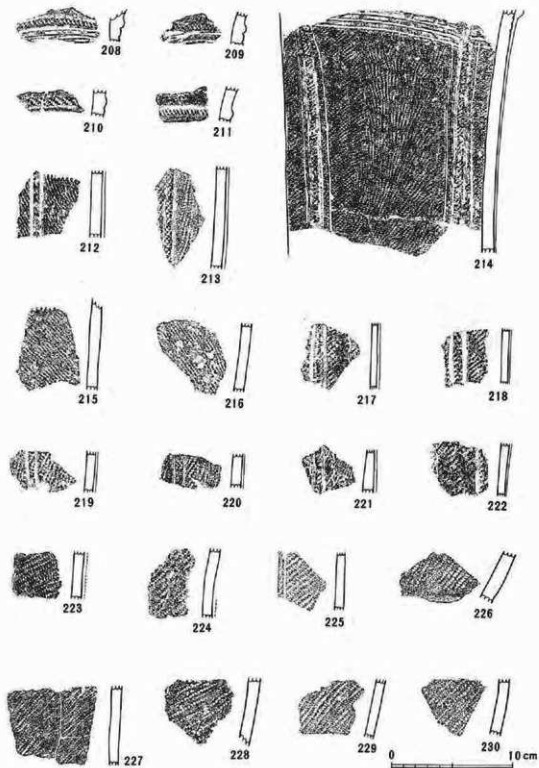
第13類土器(252～265)

底部破片を一括する。張り出し底を呈するものが主体をしめ、結節縄文が施文される。

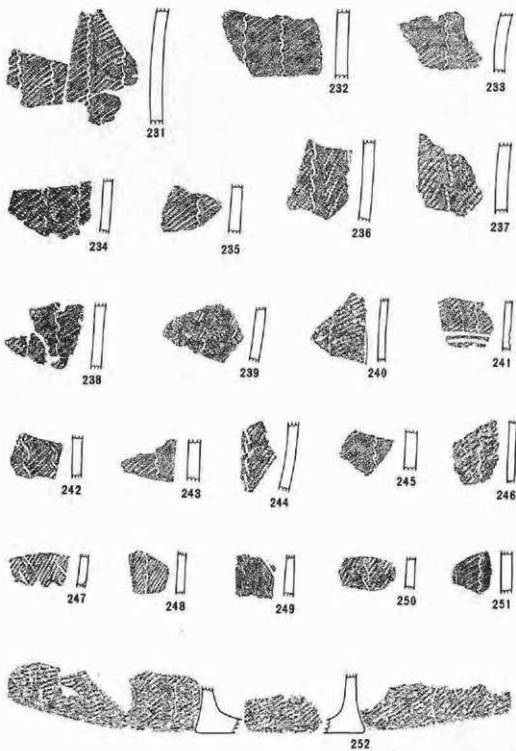
253 は隆帯文が施文される。260・262 は弱く外反するもので結節縄文と平行沈線文が施文される。263 は沈線文が施文される。264・265 は無文土器である。

第14類土器(266～274)

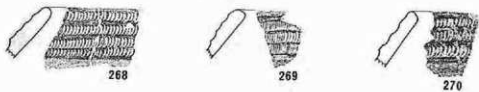
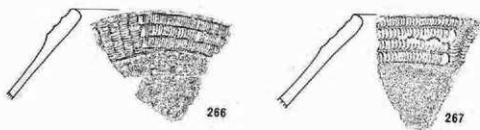
浅鉢形土器で、内面に口縁に沿って連続爪形文が施文される。連続爪形文は横位・縦位・円弧状に施文される。274 は補修孔が見られる。



第25圖 土器拓影圖⑫(第三群土器)



第26圖 土器拓影圖⑬ (第Ⅲ群土器)



0 10 cm

第27图 土器拓影图④ (第三群土器)

第Ⅳ群土器 (第28図275 ~第30図343, 図版第27~29)

縄文時代中期初頭の西日本系土器の鹿島式・北裏CⅠ式土器等に比定されるものを本群とする。

第1類土器 (275 ~277)

縄文を地文として連続爪形文が施文されるもの。

口縁部は頸部で大きく屈曲して、緩やかに内湾しながら大きく開く。波状口縁を呈する。胴部は脹らみを有する。

文様は節が細長く条の太いRLの斜縄文を外全面と内面口唇部直下に施文する。口唇部には粘土紐を添付して平坦に整形し、「く」の字状の連続爪形文が両面より施文される。口縁部と胴部には低い隆帯を添付して「く」の字状の連続爪形文が施文される。頸部の屈曲部には大形の連続爪形文が施文される。

器厚は3~6mmと薄く、胎土には大粒の石英・長石と砂粒が含有され、色調は淡黄褐色から灰褐色を呈する。

第2類土器

連続爪形文を主文様とするもの。

a種 連続爪形文が単独で施文されるもの (278 ~298・308 ~311)

大きな波状口縁を呈するものを主体とし、波頂部に突起を有するものが見られる。連続爪形文は隆帯を添付して施文するものと、直接施文するものが見られる。

器厚は5~6mm。胎土に長石・石英・砂粒を含有し、色調は淡褐色から茶褐色を呈する。

278・279は同一個体で、278は酒杯状突起を有する。279・280は波頂部より垂下する隆帯文を施す。281は波頂部に4つの小突起を有する。283は連続爪形文を施した2帯の隆帯が垂下される。

284~287は口唇部に直接連続爪形文が施文され、287は刺突文を伴う。

288は内外面に弧状に連続刺突文が施される。289~293は内外面に粘土紐を添付して整形される。

294~298は横位の連続爪形文の施文される胴部破片である。308~311は縦位の連続爪形文の施文される胴部破片である。

b種 連続爪形文と他種文様が組み合わされるもの (299 ~306・312)

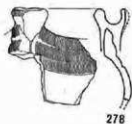
299は弱く外反する口縁部で、口唇部直下の縄文施文部と小形の三角印刻文される。300は竹管先端を刺突した円形刺突文が施文される。

301~304は同一個体で、口唇部で外反し、平口縁を呈する。胴部は脹らみを有する。口唇部に2帯の連続爪形文を巡らし、胴部には曲線の連続爪形文を施文し、区画内にRLの斜縄文と小形の三角印刻文が施文される。304は内面に炭化物が付着する。

305は縄文施文部に刺突文と沈線文が施文される。307は隆帯上に刺突文が施文される。



275



278



276



277



280



279



281



282



283



284



285



286



287



288



289



290



291



292



293



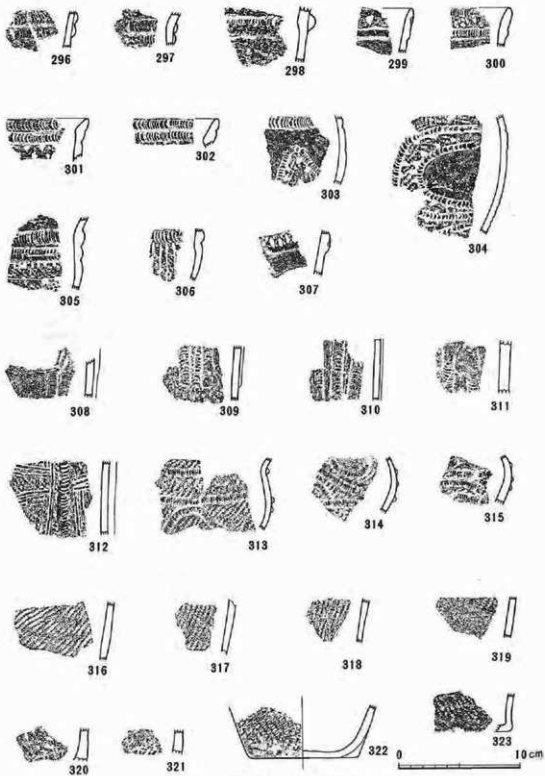
294



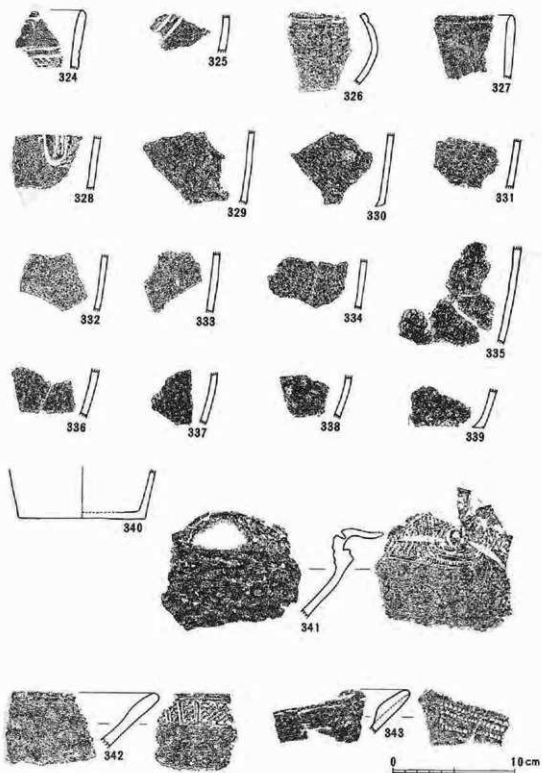
295



第28图 土器拓影图⑬ (第Ⅳ群土器)



第29圖 土器拓影圖16 (第IV群土器)



第30图 土器拓影图① (第IV群土器)

312 は縦位の連続爪形文に並行する平行沈線文と直交する平行沈線文が施文され、区画内には縄文または沈線文が施文される。

第3類土器

L Rの斜縄文を地文とし、連続爪形文を施した幅の狭い隆帯を添付するもの(313～319) 胴部は丸みを持ち、隆帯が横位または波状に添付される。

第4類土器

幅広の半截竹管内面を用いた平行沈線文を横位に施文するもの(324・325)

第5類土器

無文部を多く残す破片を一括する(326～339)

器面は丁寧なナデ調整が施される。器厚4～6mm。色調は灰褐色から黒褐色を呈する。

326 は内湾する胴部破片で連続爪形文が施文される。329 は直立する口縁部である。

328 は半截竹管を用いて「U」字状の文様が施文される。329・330・339 は底部近くの破片である。

第6類土器

底部破片を一括する(320～323・340)

320・321 は底部側面に連続爪形文と縦位の沈線文が施される。

322 は節が細長いR Lの斜縄文と隆帯文が施されるもので、底面を5ヶ所等間隔に抉り取る特殊な形をなす。

323 は弱い張り出し底を呈し、R Lの斜縄文が施文される。340 は開きぎみの底部で、無文土器である。

第7類土器

浅鉢形土器で、341・342 は内面に口縁に沿ってL Rの斜縄文を施し、円形刺突文を連続して施文する。波状口縁を呈し、波頂部内面の突出部に渦巻状の連続爪形文が施文される。

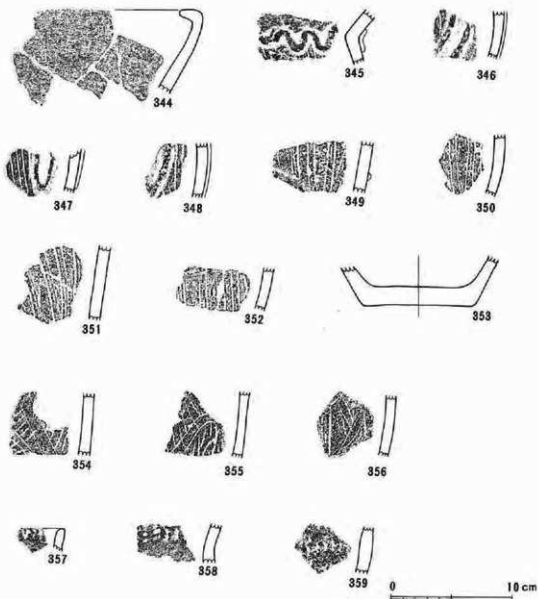
343 は別個体の波頂部で、連続刺突文を施す。

第V群土器(第31図344～353, 図版第30)

曾利I式土器に対比されるものを本群とする。344～353 は同一個体で1個体分が出土している。

器形はキャリパー形深鉢を呈する。口縁部は無文で、頸部以下は半截竹管による沈線文を縦位に施文して地文とする。隆帯文が頸部に1帯波状に添付され、胴部には渦巻状に添付される。色調は黄褐色を呈する。

注1 山内清男 1979 「日本先史土器の縄紋」 P18



第31图 土器拓影图⑬ (第IV群、第V群土器)

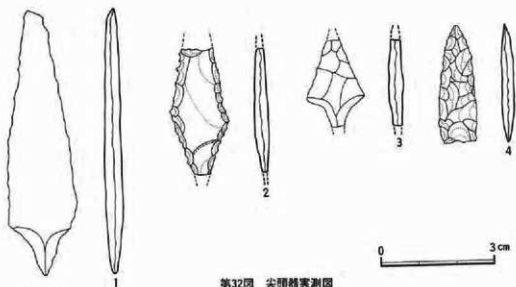
2. 石器

本調査によって得た石器は、尖頭器4点・石鏃38点・石斧7点・石匙12点・石錘3点・石皿1点・磨石(凹み、箆きを併用)9点・敲石14点・石錐1点・磨製石器1点の、総数90点である。

さらに黒曜石剥片約850 g、頁岩・硬砂岩等剥片、および砕片約4,470 gを得ている。

尖頭器 (第32图, 图版第31)

本調査によって得た尖頭器は4点である。このうち2点が完形品で、他は先端部・舌部の一



第32図 尖頭器実測図

部を欠損する。

これらは基部の形態によって2類される。

Ⅰ類 有舌尖頭器である(1~3)。

これは形状、とくに舌部の状況によって、さらに細分が可能である。

1は長身の身部に舌部を有するもので、いわゆる一般的な有舌尖頭器である。石材は頁岩で、風化が激しく詳細な調整は不明である。直線的な側辺をもって長二等辺三角形形状を呈する。舌部は13mmを測り、身部に対して5分の1程を占める。それは基部両端の逆刺にむかって弱く外反してなり、返しは明確でない。

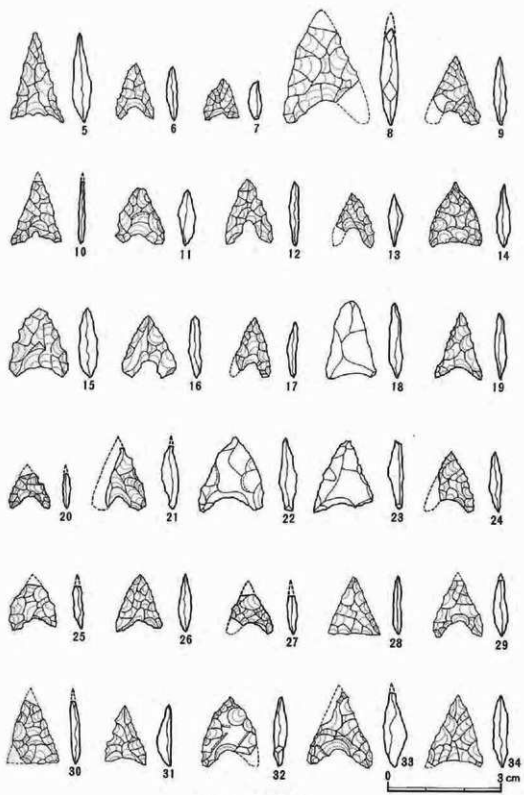
2は先端部・舌部を欠損するため明確さを欠くが、チャート製の板状剥片を両面より押圧剥離による縁部調整を施して、形態は扁平・菱形形状を呈するであろう。同様の資料を若宮遺跡にみる。身部の短小化・逆刺の退化、ならびに舌状部の伸長化とみなして、有舌尖頭器最終末期に位置するか。

3は短身の身部に舌状部を付してなる。身部は明瞭な逆刺をもって略正三角形形状を呈し、長さ12mm(推定)程の舌部が付され、それは器長の2~3分の1程となる。したがって舌状部は1にちかいく値であり、また基部巾もそれ程変わりなく、身部だけが短小化して、完全に鏃形となっている。これも有舌尖頭器最終末期に類例をみる。

Ⅱ類 柳葉形尖頭器である(4)。

黒曜石製で丁寧な押圧剥離によって両面調整される。身部は柳葉形となって、基部は直線的に切断される。その形状から柳葉形尖基鏃に類する可能性もある。

石 鏃 (第33, 34図, 図版第32)



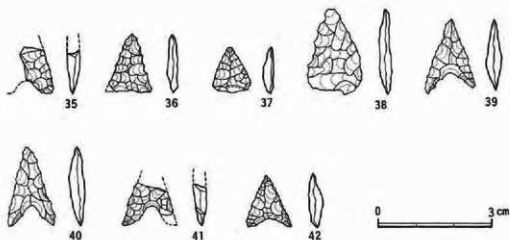
第33图 石铍实测图①

石部名	採回番号		法 量 (mm·g)				材 質	出土地区	類別	遺存状況	備 考
	採回	番号	最大長	最大巾	最大厚	重量					
尖頭器	3 2	1	09.20	17.70	4.70	5.90	頁 岩	表 採	I	完 形	有否尖頭部
		2	(33.00)	14.90	3.90	[1.90]	ナット	D - 19	I	先端部欠	有否尖頭部
		3	(22.90)	15.40	4.20	(0.80)	硬砂岩	E - 4	I	先端部欠	有否頭部
		4	30.30	10.50	3.50	1.00	頁 岩	E - 15	II	完 形	
石	3 3	5	22.60	13.30	5.10	0.90	黒曜石	A - 1	II-a	完 形	
		6	11.70	9.50	2.90	0.25	黒曜石	A - 18	II-b	完 形	
		7	9.40	9.10	3.60	0.20	黒曜石	A - 18	II-a	完 形	
		8	(22.90)	(17.80)	5.00	[1.70]	黒曜石	A - 18	II-b	先端片逆刺欠	破 形 類
		9	15.00	(10.50)	3.20	(0.40)	黒曜石	B - 19	II-b	片逆刺欠	
		10	(14.70)	13.50	1.90	(0.25)	黒曜石	B - 19	II-a	先端部欠	
		11	12.50	12.90	4.80	0.50	黒曜石	B - 19	II-a	完 形	
		12	13.20	12.00	2.70	0.30	黒曜石	B - 20	II-b	完 形	
		13	10.20	(9.40)	4.00	(0.30)	黒曜石	B - 21	II-b	片逆刺欠	
		14	16.00	13.80	3.60	0.65	黒曜石	B - 21	II-a	完 形	
		15	15.50	15.60	4.90	1.10	黒曜石	C - 13	II-a	完 形	
		16	12.00	14.10	3.00	0.40	黒曜石	C - 14	II-b	完 形	破 形 類
		17	12.20	(8.30)	3.00	(0.30)	黒曜石	C - 15	II-b	片逆刺欠	
		18	19.40	13.50	3.80	0.95	頁 岩	C - 16	II-a	完 形	
		19	14.70	12.60	3.00	0.35	黒曜石	C - 16	II-a	完 形	
		20	(7.20)	11.00	2.30	(0.20)	黒曜石	C - 17	II-b	先端部欠	
	3 4	21	(13.10)	(10.50)	4.60	(0.45)	黒曜石	C - 21	II-b	片逆刺欠	
		22	16.30	16.80	4.70	1.00	頁 岩	D - 5	II-a	完 形	
		23	17.00	14.80	3.90	0.80	頁 岩	D - 14	II-a	完 形	
		24	12.70	(8.90)	3.20	(0.35)	黒曜石	D - 16	II-a	片逆刺欠	
		25	(10.20)	12.40	2.80	(0.40)	黒曜石	D - 16	II-a	先端部欠	
		26	12.00	11.80	3.50	0.40	黒曜石	D - 16	II-a	完 形	
		27	(7.40)	(10.50)	2.80	(0.30)	黒曜石	D - 17	II-a	先端片逆刺欠	
		28	15.20	14.00	2.20	0.35	黒曜石	E - 3	I-b	完 形	
		29	(11.80)	12.80	3.80	(0.50)	黒曜石	E - 13	II-b	先端部欠	
		30	(15.90)	(11.00)	2.80	(0.45)	黒曜石	E - 13	I-b	先端片逆刺欠	
		31	13.90	16.70	4.20	0.40	黒曜石	E - 13	II-a	完 形	
		32	14.20	(14.10)	3.60	(0.65)	頁 岩	E - 15	II-b	片逆刺欠	
		33	(15.20)	17.00	5.90	[1.00]	黒曜石	E - 17	II-b	先端片逆刺欠	
		34	17.20	(14.30)	3.50	(0.80)	黒曜石	F - 5	II-a	片逆刺欠	
		35	(11.60)	(6.90)	(3.50)	(0.25)	黒曜石	F - 14	II-b	片逆刺欠	
		36	15.00	(10.70)	2.90	(0.30)	黒曜石	G - 6	I-b	片逆刺欠	
37	11.70	9.80	3.00	0.25	黒曜石	H - 16	I-a	完 形			
38	21.50	14.10	3.30	0.90	黒曜石	I - 15	I-a	完 形			
39	14.30	13.20	4.90	0.55	ナット	I - 17	II-b	完 形			
40	16.40	12.00	4.10	0.60	黒曜石	6号住居	II-b	完 形			
41	(10.40)	(12.40)	(3.80)	(0.25)	黒曜石	6号住居	II-b	先端片逆刺欠			
42	11.90	11.80	3.60	0.35	黒曜石	不 明	II-a	完 形			
石斧	3 5	4 3	123.50	42.70	19.70	110.00	砂 岩	C - 13	I	完 形	
		4 4	113.10	63.20	17.10	156.00	砂 岩	C - 17	I	完 形	
		4 5	114.80	47.40	24.30	150.00	砂 岩	C - 20	I	完 形	標 合

第2表 石器計測表①

石種名	採回番号	法				量 (mm・g)		材質	出土地区	類別	遺存状況	備考	
		採回地	最大長	最大巾	最大厚	重量	重量						
石 斧	35	46	120.20	34.50	21.20	98.00		砂岩	C-20	I	完	形	接合
		47	(98.60)	(51.20)	15.80	(100.00)		砂岩	D-14	I	刃部欠		
		48	161.10	56.40	17.50	168.00		砂岩	D-17	II	完	形	
		49	103.90	46.10	15.00	91.00		砂岩	表土内	II	完	形	
石 鏃	36	50	54.30	(39.40)	9.90	(21.80)		硬砂岩	A-18	I	つまみ部欠		
		51	58.60	44.00	9.20	19.00		硬砂岩	B-19	I	完	形	
		52	49.60	44.90	11.10	23.60		頁岩	B-19	I	完	形	
		53	62.00	52.90	11.10	26.30		硬砂岩	B-20	I	完	形	
		54	35.90	35.30	6.20	7.90		頁岩	B-21	I	完	形	
		55	68.30	46.80	8.80	18.20		頁岩	C-15	I	完	形	
		56	61.30	52.20	11.30	26.20		硬砂岩	D-14	I	完	形	
		57	42.50	32.40	7.20	8.10		頁岩	D-16	I	完	形	
		58	82.60	41.60	11.60	36.70		頁岩	E-5	II	完	形	
		59	62.40	40.80	13.90	26.90		硬砂岩	H-17	I	完	形	
60	51.80	37.60	6.40	10.60		頁岩	表土裡	I	完	形			
61	51.40	39.70	5.40	7.00		硬砂岩	3号住居	I	完	形			
石 鏃	37	62	58.20	43.90	16.80	68.70		砂岩	D-16	—	完	形	
		63	52.90	43.70	11.10	42.60		砂岩	—	—	完	形	
		64	51.00	43.50	17.70	47.00		安山岩	5号住居	—	完	形	
石 鏃	38	65	(162.80)	(125.10)	(101.80)	(1510.00)		玄武岩	I 基石	—	1/5	存	
石 鏃	38	66	(111.90)	(58.00)	(43.70)	(381.00)		安山岩	B-20	I	1/2	存	田部表裏3・浅 田部表裏2・浅
		67	(109.60)	(51.10)	(32.40)	(250.00)		燧岩	B-20	II	1/2	存	
		68	(88.80)	(40.60)	(27.50)	(212.00)		安山岩	C-17	II	1/3	存	
		69	126.40	99.90	49.90	914.00		砂岩	C-17	II	完	形	
		70	104.10	80.50	48.60	(598.00)		砂岩	C-19	II	略完	形	
		71	(88.70)	(52.30)	(51.70)	(290.00)		玄武岩	D-20	II	1/2	存	
		72	(80.60)	(54.70)	(39.40)	(215.00)		燧岩	E-13	II	1/2	存	
		73	(105.10)	(84.10)	(36.60)	(469.00)		砂岩	C地区	II	略完	形	
74	(105.20)	(67.00)	(71.80)	(670.00)		砂岩	攪乱	I	1/2	存			
石 鏃	39	75	(163.50)	(82.10)	(36.10)	(348.00)		砂岩	A-16	I	1/2	存	
		76	(79.10)	(60.40)	(30.20)	(218.00)		安山岩	B-17	I	2/3	存	
		77	(38.20)	(30.90)	(28.30)	(68.00)		砂岩	B-20	II	2/3	存	
		78	116.80	47.80	29.20	240.00		砂岩	C-17	II	完	形	
		79	(110.40)	46.80	29.90	(220.00)		安山岩	C-20	II	略完	形	
		80	(97.80)	(51.20)	(34.80)	(255.00)		砂岩	C-21	II	2/3	存	
		81	(69.60)	(75.60)	(43.00)	(265.00)		砂岩	E-13	I	1/2	存	
		82	97.40	75.20	42.80	400.00		燧岩	E-13	I	完	形	
		83	(109.20)	46.50	29.80	(185.00)		砂岩	E-17	II	略完	形	
		84	(80.30)	29.70	23.00	(88.00)		砂岩	F-15	II	4/5	存	
85	(168.80)	88.50	53.20	(1568.00)		砂岩	F-15	II	4/5	存			
86	(101.10)	42.20	32.00	(205.00)		安山岩	B地区	II	略完	形			
87	76.50	41.10	24.80	110.00		砂岩	C地区	II	2/3	存			
88	87.40	49.30	23.50	125.00		砂岩	C地区	II	1/2	存			
石 鏃	40	89	(38.50)	33.00	8.60	(7.80)		硬砂岩	D-16	—	—	部欠	
燧石	40	90	(34.60)	(18.30)	(4.90)	(8.00)		緑泥片岩	E-14	—	—	—	

第3表 石器計測表(2)



第34図 石鏃実測図②

本調査によって得た石鏃は38点である。全て打製で、うち20点が完形品で、残り18点は先端部、逆刺を欠損している。有茎鏃は皆無である。

これらは基部の形態によって2類される。

I類 平基式石鏃である(28・30・36~38)。

平基式石鏃は5点が確認される。全石鏃中に占める割合は約13%である。これは形状、基部の状況でさらに細分される。

a種(37・38)

基部が若干円基気味に張り出す。したがって、逆刺が不明瞭で側辺も弱い弧状を呈するため、全体的に丸味を帯びる。器厚をもって鈍重でシャープさに欠ける。2点とも黒曜石製、造作も比較的丁寧である。大形~小形の変動巾が大きい。

b種(28・30・36)

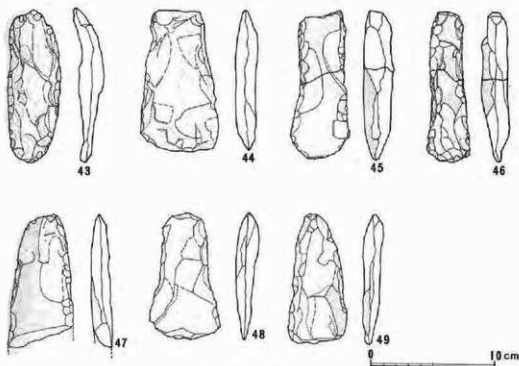
基部・側辺とも直線状となる。したがって、逆刺・先端部は鋭角となって、正三角形状を呈する。調整は本資料中ももっとも丁寧になされる。器厚が薄く、造作も精巧さを増すため、非常に鋭利である。法量的には中形で統一感がある。

II類 凹基式石鏃である(5~27・29・31~35・39~42)。

凹基式石鏃は33点が確認される。全石鏃中に占める割合は約87%である。これは形状、基部の状況、とくに挟入の深浅・広狭によって細分が可能である。「へ」字状の挟入の例はない。ここでは挟入の深浅で大略2類しておきたい。

a種(5・7・10・11・14・15・18・19・22~27・31・34・42)

基部の挟入が3.00mm前後まで、器長の6~7分の1以内を占めるものである。側辺は直線、弧状の両例があり、弧状例は器厚をもって鈍重となり、造作も粗雑な面が多い。それには頁岩製が圧倒している。挟入が浅く、側辺が直線例は形状が整い、多くは黒曜石製で、造作も丁寧でシャープである。極端な大形品をみることはなく、最小例(7)を除けば中形品を主体とし



第35図 石斧実測図

ている。

b種 (6・8・9・12・13・16・17・20・21・29・32・33・35・39~41)

基部の挿入を深くもって、器長の3~4分の1程を占めるものである。なお、器長の2分の1以上を占めるであろう円脚鎌・長脚鎌は認められず、また、器長が器巾の略2倍程を呈する長身鎌もない。

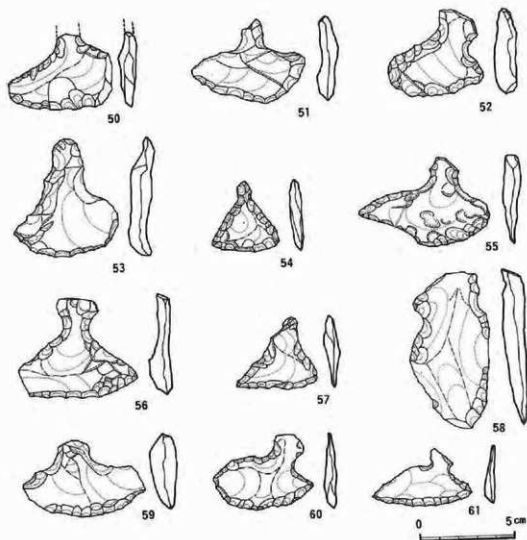
本種は1点の頁岩製(32)を除いて、全て黒曜石製である。側辺は直線的で、造作も非常に丁寧、かつ精巧で鋭利となる。形状は逆刺が外方にむかって「人」字状となる例(41)もあるが、直線例が圧倒している。さらに基部が「Ω」状に挿入される鎌形鎌が2例(9・16)認められる。これは代官屋敷遺跡にも早期後葉土器分布域に認められて、早期全般に存在するらしい。法量は8が極端に大形であるが、中形を主体においている。

石 斧 (第35図, 図版第31)

本調査によって得た石斧は7点である。全て打製で、完形品は6点である。このうち2点(45・46)は同一グリット内で接合されたものである。1点は刃部を欠損している。いずれも片刃例で、若干の形状差をもって通例の短冊形・攪形に分類される。

I類 短冊形石斧である(43~47)。

短冊形でありながら、片刃のためか頭部より刃部が若干巾ひろく、44を除いて長身・細身である。それらは円刃を呈する。45~47が片面に自然面を残すが、いずれも造作は入念で、45が

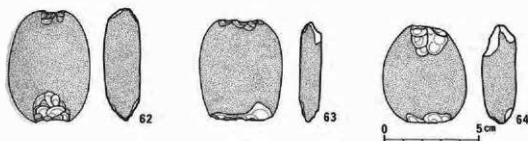


第36図 石匙実測図

自然面と第1剥離面を直接、若干の敲打をもって刃部とする以外は丁寧に刃部が作出される。したがって頭部が若干粗雑な感も受け、一様に厚い。刃部は使用による磨滅、鈍化する例が多い。側辺中央は若干くびれて、そこには着装によったであろう「円滑化した磨滅」も観察される。とくに45・46に顕著に残る。

Ⅱ類 擗形石斧である(48・49)。

刃部巾と頭部巾が前者と比して明確となりつつあって分類される。いずれも片刃例のため前者と大過ないと言えるが、刃部の作出がより意図されている。刃部は円刃であり、早期に特徴とされる直刃斧、あるいはトランシェ様石器と称されるものとは形態を異にしよう。49に若干の自然面を残すが、造作は入念である。両者とも側辺が丁寧に敲打され、48はとくにくびれて、着装によったであろう「円滑化した磨滅」が認められる。頭部が刃部より厚く作出され、その



第37図 石鏟実測図

作出はⅠ類より丁寧で、刃部は使用によって磨滅、鈍化が激しい。

石材は両類とも全て砂岩製である。また、線状痕等を看取することはできない。

石 匙 (第36図, 図版第33)

本調査によって得た石匙は12点である。この出土量は通例の石器構成のなかで他を圧倒して特徴である。粗製の大型品は皆無で、いずれも精巧である。1点(50)がつまみ部先端を若干欠損する以外は全て完形品である。石材は頁岩、硬砂岩に限られている。

これらは形状によって2類される。

Ⅰ類 横形石匙である(50~57・59~61)。

横形石匙が12点中、11点と圧倒している。分量は中〜小形に属し、刃部形状は円刃・直刃の2種類をみる。直刃例は54・57の小形品に限られている。造作は50mm内外の三角形を呈する第2次剥片の頂部両辺が窪められてつまみ部を作出する。これは裏裏両面より丁寧に敲打されるが、刃部は剥片の縁部を片面から整えて作出されるため若干粗い。断面は敲打痕が認められない側へ湾曲している。直刃を呈する小形品はそれより丁寧で精巧となる。三角形を意図するためか、側辺にも細かな敲打がなされて直線状に作出されている。

Ⅱ類 縦形石匙である(58)。

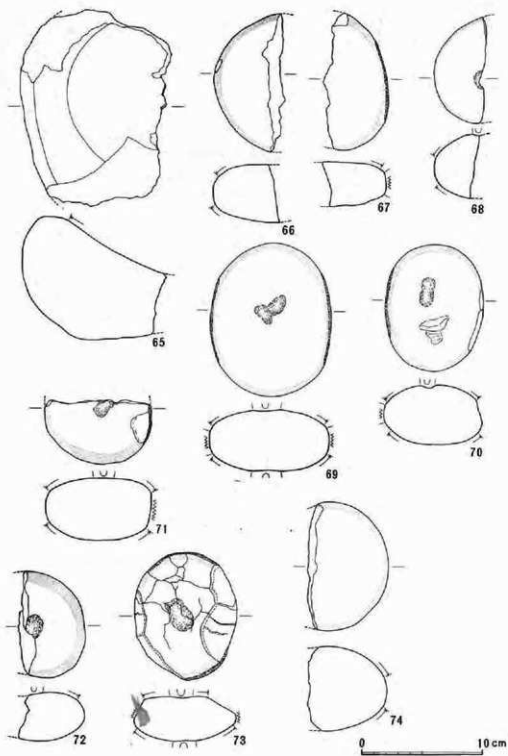
縦形石匙は1点のみ認められる。分量は中形で、Ⅰ類より大振りとなる。造作は粗く、長形の剥片端部を両面より敲打してつまみ部を作出し、刃部は剥片縁部をそのまま利用して、端部は片面より軽い敲打によって整えている。

石 鏟 (第37図, 図版第34)

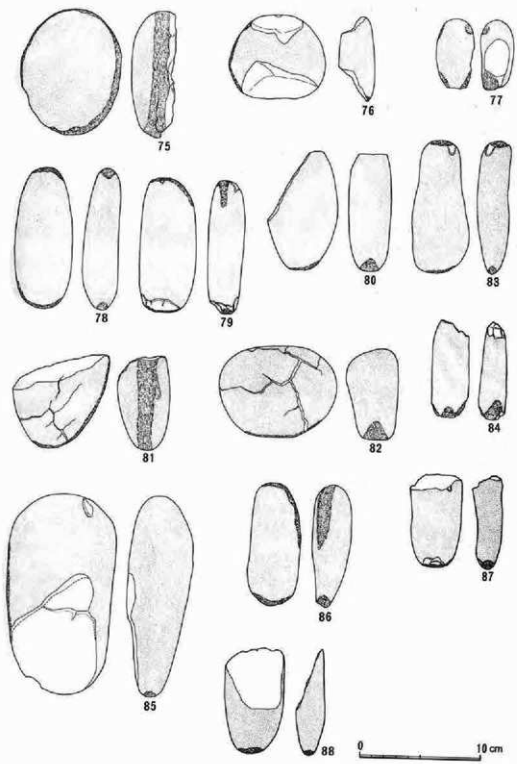
本調査によって得た石鏟は3点(62~64)である。いずれも打製である。素材は50mm強を測る小判形の砂岩、安山岩が用いられて、その長軸両端を敲打して紐掛溝を作出している。なお、土鏟が1点出土している。

石 皿 (第38図, 図版第37)

本調査によって得た石皿は1点(65)である。多孔質の玄武岩製で、片面のみが使用され、



第38圖 石皿・磨石実測圖



第39图 敲石实例图

磨耗も激しく、使用面と石材原面には明確な稜をもっている。大半を欠損して全体形状は不明であるが、規格性は看取されず、自然礫をそのまま転用したものであろう。市内滝戸遺跡でも指摘されたが、第1号集石跡内部に破片として組み込まれて出土する。

磨石（第38図、図版第34・35）

本調査によって得た磨石は9点である。磨石が複数の機能を果たすことは知れて、本遺跡も例外なく併用される。したがって「磨石・敲石・凹石」等を含んでいる。完形・略完形品は3点で、他は約2～3分の1を欠損して、それが尋常のようでもある。石材は砂岩・安山岩・礫岩・玄武岩と比較的巾ひろい選材がされている。

これらは使用面の状況によって3類される。

I類 いわゆる一般的な磨石である（66・74）。

2点とも2分の1を欠損する。側面には自然面を残して、平・断面形とも素材原形を崩さず、円形～楕円形を呈する。極端な長円形状とはならないようである。両面とも使用されている。敲打痕は看取されないが、欠損状況から瞬時の過激な敲打が予想される。

II類 敲石に併用される磨石である（67）。

1点が確認され、2分の1を欠損する。側面に敲打痕を有して敲石に併用されたものである。I類同様に比較的一般的な存在であるが本遺跡には極少である。敲打痕は大きく剥離痕を残す例もあるが、通常は弱い敲打による凸凹となっている。素材を一周する例は稀で、長・短軸の規制はなく、対面で敲打される場合が多い。本例は使用面は片面で、欠損状況からI類同様の敲打も予想される。

III類 凹石に併用される磨石である（68～73）。

6点中、3点が2～3分の1を欠損する。側面には1点（72）を除いて、敲打痕が認められ、3機能の併用が尋常であろう予想がされる。敲打痕はII類と同様であり、大きく剥離痕を残す例もある。凹部は2点（69・73）が表裏に認められる以外、片面例である。凹部は円錐形になめらかに窪む、いわゆる凹石様凹部と異なり、浅く不規則な状況のみ。それは凹部による使用ではなくして、対象物との敲打の結果として捉えられる。磨耗使用面は1点（72）を除いて、両面使用である。その72は使用面側に凹部を有している。

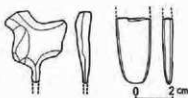
敲石（第39図、図版第35・36）

本調査によって得た敲石は14点である。この出土量は通例の石器構成のなかで他を圧倒して特徴である。敲石は磨石に併用される例が圧倒して「磨痕・凹み・敲打痕を持つ石」等、特定の名称をつけない傾向にある。しかし、本項にあげる例は明らかに磨耗痕をもたないもので、磨石と対比して敲石を踏襲している。9点が欠損品でその機能が窺い知れる。

これらは使用面の状況から2類される。

I類 柔らかく細い、継続的な敲打がされるものである(75・76・81・82)。

円形、もしくは長円形の自然礫を素材として、側辺が敲打される。75が全周を敲打されるが、通例では長軸単片の場合が多い。それは機能的には磨石II類の敲打と同様であるが、素材が球形を呈していないことに因がある。



第40図 石匙・磨製石器実測図

う。石材は砂岩・安山岩・礫岩と巾ひろい選材がされるがいずれも軟質礫である。

II類 強く荒い、瞬間的な敲打がされるものである(77~80・83~88)。

10点が認められて資料は多い。比較的器厚をもった略長円形、つまり円柱状にちかい自然礫を素材として、長軸端部を敲打される。上述の分類表現が適切か否か、いわゆる「石槌」的な機能が想定されよう。77は非常に小形で、対象物に直接働きかけるのではなくして間接的な、つまり「箭・鑿」的な使用も予想される。石材は砂岩・安山岩に限られるが、いずれも粒度が緻密で硬質となり、形状とともに完全に敲打を主要機能とした選材がなされている。

石 錐 (第40図, 図版第36)

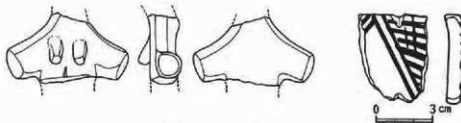
本調査によって得た石錐は1点(89)である。硬砂岩の第2次不定形剥片を素材として、尖鋭となる頂部両端より調整加工して錐部を作出している。錐部は表裏より調整されて、断面は菱形となっている。なお頭部の意識的作出もなく、素材原面が露出して、造作は粗雑である。錐部先端部が欠損されて全形は把握されない。

磨製石器 (第40図, 図版第36)

用途不明の磨製石器がJ-1号竈穴住居跡より1点出土する(90)。緑泥片岩を丁寧に研磨して器巾20mm弱、器厚5mm程の舌状(板状)に作出されている。残存長35mm程で全体形状は把握されないが、倍以上の器長をもつであろう。

3. 土製品

本調査によって得た土製品は、土偶1体、土錐1点である。



第41図 土偶・土錐実測図

土 偶 (第41図、図版第37)

第3号集石跡内に組み込まれて出土する。通例の如く、破片の状態で頭部と下半身を欠損している。胎土は精選されて、焼成も良好で赤褐色を呈する。丁寧なヘラ磨きによって胸部から両手が造作されている。両手巾は64mm、胸部厚13mm、首部より腹部上部まで35mm程で残存する。胸部には巾6~7mm、長さ13~15mm程、高さ5~6mmで乳房が貼付されている。残存する腹部上端の中央には巾2mm程の沈線(溝)が縦に切り込まれている。

土 鍾 (第41図、図版第37)

D-17ドリッド、第1号集石跡内より土鍾1点が出土する。それは第Ⅲ群第Ⅰ類土器No. 66の破片より作出されたもので、長さ45.3mm、巾35.1mm、厚さ8.9mm、重さ17.3gの四辺形破片の長軸に切り目を入れ、紐掛溝としている。破片周縁に意図的な研磨はない。

第IV章 古墳時代

第1節 遺構

本調査によって得た古墳時代初頭の遺構は竪穴住居跡8基（うち1基は竪穴状遺構）、溝状遺構1基である。

なお、竪穴住居跡に記述される床面構造A・B・C類は月の輪遺跡群Iに準ずるもので、

A類一床面プランの外縁部に巾70～80cm程の周濠状掘り込みをもって中央部を方台状にたかく残す。

B類一床面プランの外縁部を平坦に残しておき、その内側より周濠状掘り込みをもって中央部を方台状にたかく残す。

C類一床面プラン全域を舟底状、ないしは平坦な掘り込みをもつ。

と理解されたい。これは通水性保持のための貼床の一種である予想がされている。

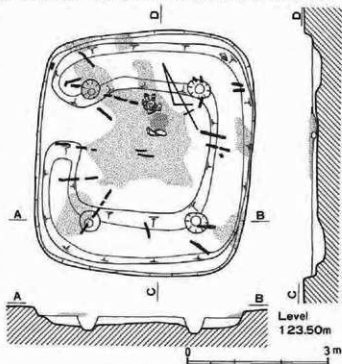
1. 竪穴住居跡

K-1号竪穴住居跡（第42図、図版第38・39）

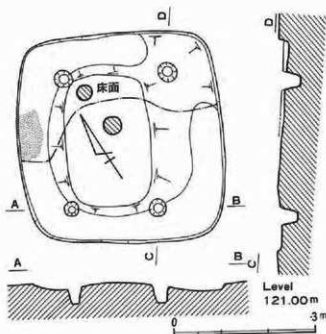
位置 D・E-4・5グリッドにまたがって検出される。E-5ポイントを床面南西隅にみる。標高123.40m付近にあり、北側調査区の中央南寄り、調査区自体は略平坦であるが、

南側調査区より一段たかい地形となる。本遺跡に検出される竪穴住居跡中、もっとも北側でたかい標高にある。西壁に隣接して縄文時代第1号土壇跡、北側へ7m程して第2号土壇跡が存在する。古墳時代遺構に現調査区内では疎隔されている。

構造 形状は隅丸長方形を呈し、規模は520×460cm、床面積約24㎡を測る。長軸方位はN-30°-Eを示す。壁高は北壁で20cm、南壁で5cm程を測り、上部を畑作等によって削取されていた。床面構造はB



第42図 K-1号竪穴住居跡実測図



第43図 K-2号竪穴住居跡実測図

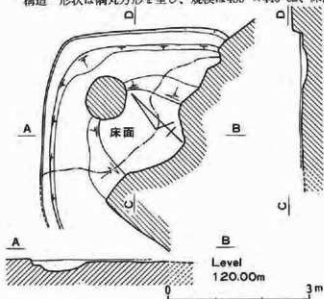
型を基本として西側が土橋の構造をもち、東側はA型となる。炉は中央北寄りに炉石2個を使用し、若干の掘り方をもっている。柱穴は4坑検出され、径40cm内外、深さ40cm程を平均してもっている。床面全域に厚い焼土と炭化材・カヤ等の堆積があり、完全な被火災住居跡である。遺物は炉に接して台付甕1個体、さらに壺・壺・高坏破片等を全域にみる。

K-2号竪穴住居跡(第43図、図版第40)

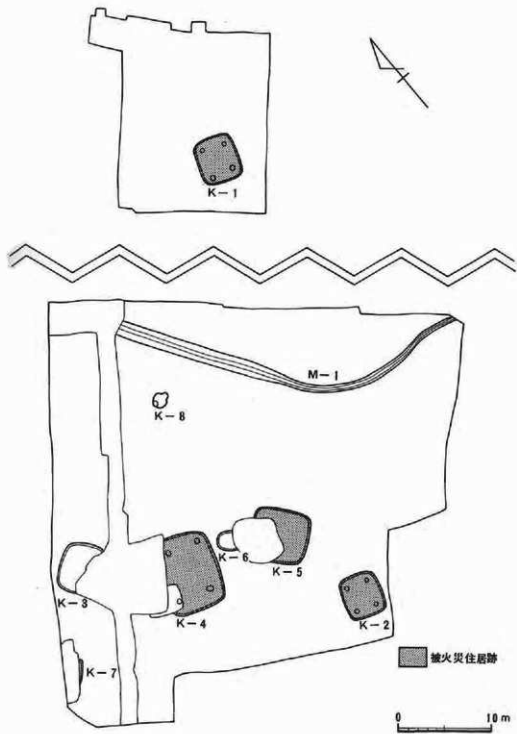
位置 G・H-18・19グリッド

にまたがって検出される。H-19ポイントを床面中央北西寄りにみる。標高120.90m~120.50m付近にあり、南側調査区の南東隅で中央を南北にはする緩い背の東側斜面に位置する。地形はそれより東側へ除々に下ろうが、調査区境いより屋敷地となって1m程の段となっている。その時に多量の土器の出土があったらしい。北西側に5m程してK-5号竪穴住居跡、さらにK-6・4号竪穴住居跡が続く。

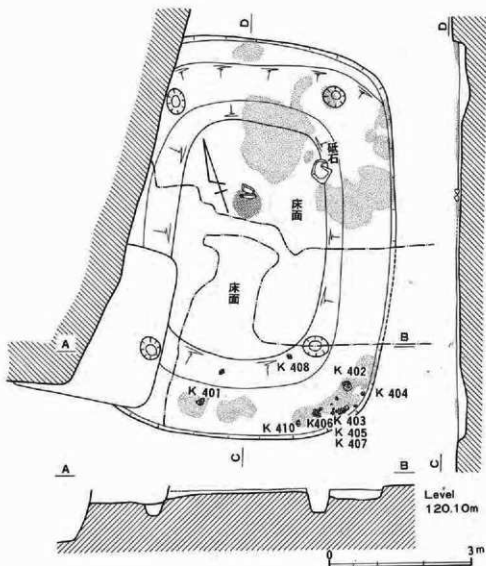
構造 形状は隅丸方形を呈し、規模は450×440cm、床面積約20㎡を測る。長軸方位はN-28°-Eを示す。壁高は北壁で20cm、南壁で5cm程を測り、上部の大半は水田耕作によって削平される。床面も北半部3分の1程が残存するだけである。床面構造はA型で、北東隅が若干浅くなる。炉はその部分を削取されるため定かでない。柱穴は4坑検出され、径30~40cm、深さ25~30cmを測る。床面中央に極端に深い小坑をみるが、これは本住居跡のものではない。残存する床面の西壁付近に100×50cm程の範囲で焼土をみる。覆土中に



第44図 K-3号竪穴住居跡実測図



第45図 古墳時代全体図



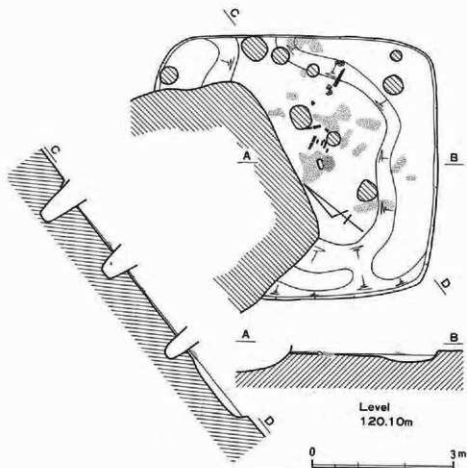
第46図 K-4号竪穴住居跡実測図

も焼土粒が確認され、被災住居跡である可能性がたかい。遺物は壺・壺等の破片が少量である。

K-3号竪穴住居跡(第44図、図版第41)

位置 A・B-18グリッドにまたがって検出される。標高119.90m付近にあたり、南側調査区の西端中央部で、地形が南西方向へ下ろうとする途中である。床面の南側部分3分の2程を擾乱によって削取されている。東側に9m程してK-4号竪穴住居跡、律令時代R-3号竪穴住居跡が重複して存在する。さらにK-5・6号竪穴住居跡が続く。南側に5m程で縄文時代第2号集石跡、8m程してK-7号竪穴住居跡をみる。

構造 形状は隅丸長方形が予想される。規模は450×400cm、床面積約18㎡が推定され、長軸方位はN-53°-Eを示す。壁高は北壁で20cm、南壁は水田耕作によって流出する。床面も



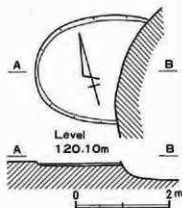
第47図 K-5号竪穴住居跡実測図

北西隅の4分の1程が残存するだけである。床面構造はB型である。炉はその部分を攪乱されて定かでない。柱穴は確認されない。遺物は甕・壺等の破片が少量である。

K-4号竪穴住居跡(第46図, 図版第42・43)

位置 D・E-17~19グリッドにまたがり広域に検出される。D-18ポイントを北壁西寄りに、E-19ポイントを床面南東隅にみる。標高119.80m~120.00m付近にあり、南側調査区の中央西寄りで中央をはしる緩い背の部分に位置して、地形はそれより南西にひくくなる。南西隅に律令時代R-3号竪穴住居跡が重複する。東壁に隣接してK-6号竪穴住居跡、さらに重複してK-5号竪穴住居跡をみる。

構造 形状は隅丸長方形を呈し、規模は840×640cm、床面積約53㎡を測る、大型住居跡である。長軸方位はN-23°-Eを示す。壁高は北壁で20cm強、南壁で10cm程である。これは掘り方までの数値で、検出面ですでに床面が露出している状況であった。西壁の3分の2と、床面の一部が攪乱されている。床面構造は北側がB型の他はA型である。炉は床面中央北寄りに炉石2個を使用して検出される。灰土の堆積はそれ程ではない。柱穴は4坑検出され、径40~50



第48図 K-6号竪穴住居跡実測図

いる。南側へ5m程してK-2号竪穴住居跡、やはり西側へ5m程してK-4号竪穴住居跡をみて、それらと弧状をなしている。北壁に接して縄文時代第2号集石土壇跡、第4号土壇跡が存在する。

構造 形状は隅丸長方形を呈し、規模は620（推定）×565cm、床面積約35㎡を測り、比較的大形である。長軸方位はN-35°-Wを示す。壁高は10～15cmで、床面は検出面にはほぼ同じである。床面には後世の小坑が数多くみられるが、本竪穴住居跡の柱穴は確認されなかった。床面構造は北・南壁沿いに土橋の構造をみて、A型が乱れてなる。炉は床面中央東寄りに炉石1個を使用して検出される。焼土の堆積はそれ程でない。床面全域には厚さ3～5cm程の焼土が散在し、一部に炭化材も認められて、完全な被火災住居跡である。遺物は甕・壺等の破片が少量である。

K-6号竪穴住居跡（第48図、図版第44）

位置 E-17・18グリッドにまたがり、床面の東側3分の1程を焼土を内包する大形土壇跡に重複されて検出される。標高120.00m付近にあたり、南側調査区の中央で、もっとも平坦な地域に位置する。東側は大形土壇跡よりK-5号竪穴住居跡が続く。西側は隣接してK-4号竪穴住居跡が存在し、遺構が密集している。

構造 形状は長円形を呈する。規模は長軸が不明で、短軸は230cmである。長軸を330cmと推定しても、床面積7㎡程でしかなく、月の輪遺跡群Iに設定された小竪穴遺構に準ずるであろう。長軸方位はN-72°-Wを示す。壁高は5～10cm程である。床面構造は浅いC型である。炉・柱穴は確認されない。遺物は皆無である。

K-7号竪穴住居跡（第49図）

位置 B-20グリッドに検出される。標高119.50m付近にあたり、南側調査区の最南西端に位置する。南西方向へ下る地形が集中してもっともひくくなる地点である。東側に縄文時代第2・3号集石跡が認められ、北～東側へ10m程してK-3・4号竪穴住居跡が続く。弧状に配

cm、深さ35～55cmと他の柱穴に比して太い。床面全域に焼土の堆積があり、完全な被火災住居跡である。遺物は南壁東隅に集中して、甕・壺・小型壺等7～8個体が検出される。また、床面中央北東寄りに大形の磁石が設置されている。

K-5号竪穴住居跡（第47図、図版第44）

位置 F-17・18グリッドにまたがって検出される。G-18ポイントを東壁中央にみる。標高120.00m付近にあたり、南側調査区の中央で、もっとも平坦な地域に位置する。遺構も比較的密集して、床面の西側3分の1を焼土を内包する大形土壇跡、さらにK-6号竪穴住居跡に重複されて

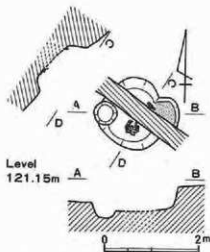
置される住居跡群の西端といえよう。

構造 攪乱によって大きく削取され、東壁を2m程の長さで残すだけである。覆土に焼土粒が若干含まれることから、被災住居跡が予想される。

K-8号竪穴跡(第49図、図版第45)

位置 C-14・15グリッドの境線上、D-15ポイント西側に検出される。標高は121.10m付近に当たり、南側調査区の中央北寄りで、地形は徐々に南西方向に下る。北東側に5m程してM-1溝状遺構が北西～南東方向にはしっている。南側に5m程すると縄文時代第1号集石跡をみるが、古墳時代遺構には15～20m程と遠く疎隔されている。

構造 形状は中央部を攪乱溝がはしるため不明の部分も多いが、「速磨」形が予想される。規模は180×150cmを測る。長軸方位はN-1°-Wとはほぼ東西にとる。壁高は北西壁側がたかく50cm程を測る。南壁は水田耕作で削平され、20cm程を測るにすぎない。床面は湾曲してなり、西壁に接して径40cm、深さ20cmを測る小坑をみる。「速磨」形の頭部には厚い焼土の堆積と若干の炭化物が堆積し、縄文時代の炉穴跡を思う。底面に接して壺1個体が破片の状況で検出される。規模に若干の差をもつが、月の輪平遺跡の第89号竪穴に類似遺構か。その有り方は特殊である。



第49図 K-8号竪穴跡実測図

2. 溝状遺構

M-1溝状遺構(第50図、図版第45・46)

位置 C-13グリッドからJ-13グリッドにかけて延長約40mが検出される。水田耕作によって東側部分に削除される部分がある。標高121.10m付近に当たり、南側調査区の北寄りの微高地の堀を取り巻くようにはしっている。北端は攪乱によって削取され、南端は調査区外へ延長されている。D-13グリッド辺で律令時代R-2号竪穴住居跡に重複されて壁面、および遺物を削取され、E-14グリッド辺では縄文時代J-1号竪穴住居跡を重複して壁面を削取している。古墳時代遺構はD-14ポイントより4m程南へ下ってK-8号竪穴が存在するが、いわゆる一般住居跡によって構成される居住空間には大きく疎隔され、もっとも近くてK-5号竪穴住居跡まで南側へ13m程する。

構造 形状は溝底が平坦となった断面形「V」字状を呈し、規模は良好な検出箇所得上場巾150～170cm、下場巾40～50cm、深さ65cm程を測る。壁は南壁が45度程で直線的に上がり、北壁も同様であるが、一様に途中に「角」をもって、さらにそれが踊り場の平坦面に発達している部分もある。平面はC-13グリッド～F-14グリッド間は直線的にN-34°-Wで下る。G

—14グリッドで湾曲して方位を変え、N-82°—Wで略東へ向ってJ-13グリッドに達する。底面はC-13グリッドがたかく、除々に下ってJ-13グリッド辺では比高34cmをもって低い。埋土は黒色スコリア土が主体となり、目立った砂質土の混入はない。遺物は土器が全てで、その全てが底面より30~40cm程浮いた状況で検出される。それは土器溜り状に多量で、その数は20個体程に及ぶ。状況に疎密の差はあるが、1m程の間隔をもって、廃棄、もしくは配置されたようにも看取される。なお、検出された土器は全て欠損品である。

第2節 遺物

本調査によって得た古墳時代初頭の遺物は土器、および石器類である。

1. 土器

本調査によって得た土器は壺・甕・高坏・小型土器である。再三、述べるように水田耕作によって遺構上部を削平される部分が多く、土器がまとまって出土したのはK-4号堅穴住居跡、M-1溝状遺構等でしかない。これらからは甕が多く出土し、壺とともに主体をなし、高坏、小型土器が次ぐ。完形品はK-402・K-410の2点しかない。

なお、土器分類は月の輪遺跡群を参照している。

壺類 壺に完形品はない。全て単純口縁で、壺Eと広頸壺Eが認められる。広頸壺E(M104)は1個体で、他は口縁部欠損資料においても壺Eの可能性がたかい。

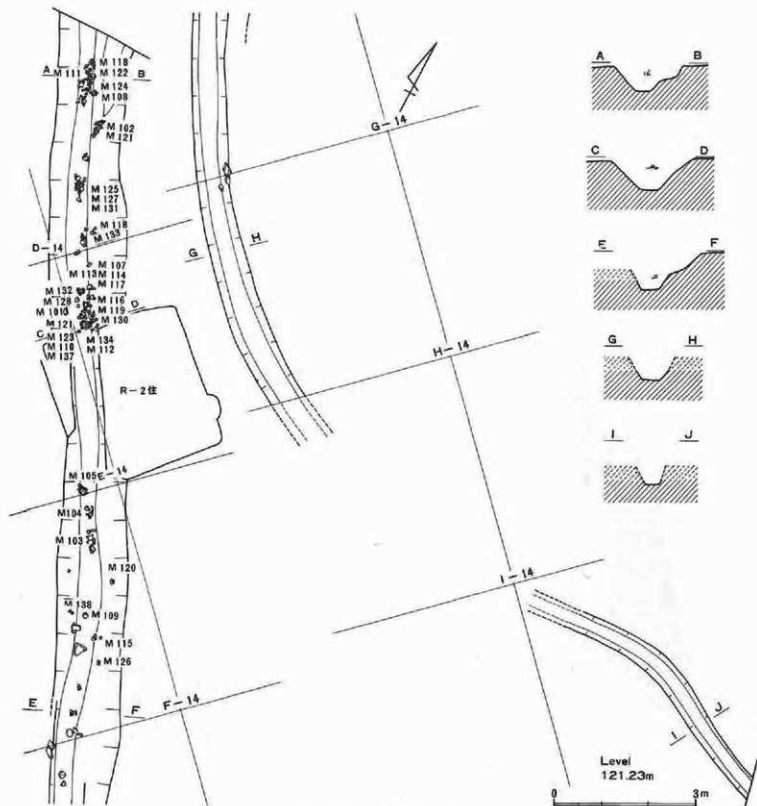
壺Eは頸部の状況からさらにa・b・c類される。a類(ノ頸)—M101・M103・M105、b類(短頸)—K802、c類(ノ頸)—K801である。M103は二段口縁が意図され、大塚式土器の特徴を備える。

全体形状は把握されないが、胴部はやや肩のはった下展れ形が多く、肩のはらない無花果形は少ない。また、底部から胴部境いに稜線が認められるなど、古い要素が窺える。

文様帯は口縁部内面(M101)と頸部~肩部外面(M108)にあり、縄文が施されている。M108は羽状で、3個×4単位の円形浮文をみる。M102は円形浮文のみ、頸部~肩部外面に2個×4単位と口縁部内面にみる。K801は口縁部に小孔が4個×?単位穿孔されている。頸部外面に櫛状工具を連続押捺されたM106は後期後半の資料であろう。他は無文が圧倒し、赤彩資料もない。

胎土には砂粒が多く含まれ、粗質である場合が多く、焼成も良くない。なお、焼肌れをおこして、歪んでいる資料が目立つ。

甕類 全形が窺える資料は平底甕D(K404)だけである。それ以外は底部を欠損して、台付甕、平底甕の判断は困難である場合が多い。しかし、略同数の台部の出土から、大半が台付甕と考えても大過なからう。全て単純口縁で、口縁端部の外側を削って面取りした——甕B



第50回 M-1 清状遺構実測図

(M118) と一 變Dがみられる。一 變Bは1例のみ大廓式(古)か、その直前の様相を呈している。

變Dは口縁部の刻み目の有無によって、D1類(有)、D2類(無)にされる。D1類(M19・M120)は2例で、大廓式(古)が予想される。他は全てD2類である。

胴部の形状は最大径を上位～中位におき、胴のはった扁球形～球形例が一般で、胴のはらな例卵形、最大径を胴部におく倒無花果形例が目立たない。

胎土は砂粒が非常に多く含まれ、焼成は不良で、粗質の土器が圧倒する。

高坏 比較的、数量が認められるが、同一個体で坏部から脚部までそろった資料は皆無である。したがって、本来、五領式併行期に特徴的な小型高坏を含むであろうが、細部の形状が不明であるため統一している。

相対的な視点にたてば、口縁部が直線的に外上方に大きく開き、坏部が深い形態は大廓式(古)に特徴であり、K407は内湾しながら開く欠山式的な脚である。K103・K601も確実に古い様相にある。

胎土は精選されて雑物を混じえない。焼成も良好であるが、軟質さを感じる。K103を除いて、丁寧なヘラミガキによって成形される。K103はハケによって調整され、胎土には砂粒を多く含み、變に類似している。

他に小型土器を伴って、本遺跡出土土器は古墳時代初頭、本地域の編年によれば大廓式に属そう。しかも、その内容はとくに古い様相を呈している。なお、図示されないが、S字状口縁の口縁屈曲部外面に櫛描点文をもった、月の輪遺跡變A1類に分類される口縁部細片を確認している。

土器番号	器種	口径 器高 器径	特 徴	調 整 ・ 文 様	備 考
K 101	變 D。	18.4 (12.3)	胎土 細かな砂粒を多量に含む 焼成 やや不良 色調 (器表)淡黄褐色～淡黒褐色 (器裏)淡黄褐色	外面 タテ、右下リナナメ、ヨコハケメ (11本/1cm、6本/1cm) 内面 ヨコハケメ (11～12本/1cm)	口縁部～胴部1/5存
K 102	變 D。	14.6 (14.6)	胎土 砂粒を含む 焼成 普通 色調 (器表)茶褐色、褐色、黒褐色 (器裏)茶褐色、褐色、黒褐色	外面 タテ、ナナメハケメ (右下リ) (11本/1cm、5本/1cm) 内面 ヨコ、ナナメハケメ (右下リ) (11本/1cm)	口縁部1/2存 胴部略定存
K 103	高 坏	(7.3) 8.7	胎土 砂粒を含む 焼成 普通 色調 淡黄褐色	外面 ヨコナテ～タテハケメ (10本/1cm) 内面 ヨコハケメ (8～9本/1cm)	脚部一部欠
K 104	小型土器	9.6 7.7 3.4	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普通 色調 橙褐色	外面 左下リ、右下リナナメハケメ、ヨコナテ (8～9本/1cm) 内面 ヨコナテ	口縁部～底部1/4存

土器番号	器種器形	口径 器高 底径	特 徴	調 整 ・ 文 様	備 考
K 401	壺	7.4 (2.6)	胎土 砂粒をかなり多く含む 焼成 普通 色調 (器表)淡茶褐色 (器壁)暗褐色	外面 ココナデ 内面 ココハケメにヘラミガキか?	底部実存
K 402	平底 壺 D ₂	14.1 19.1 5.8	胎土 砂粒をかなり多く含む 焼成 やや不貞 色調 暗褐色	外面 右下り、左下り、ナナメ、タテハケメ (6本/1cm) 内面 ココハケメ (8本/1cm)	実 存
K 403	壺 D ₂	28.4 (19.9)	胎土 砂粒を含む 焼成 普通 色調 (器表)淡茶褐色 (器壁)淡褐色、淡黒褐色	外面 口縁下右下り、ナナメハケメ、胴下部 ココハケメ、右下りナナメハケメ (6~7本/1cm) 内面 ココハケメ (7本/1cm)	口縁部1/8存、胴部 1/5存
K 404	壺 D ₂	19.8 (6.3)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普通 色調 (器表)淡黄褐色 (器壁)暗黄褐色	外面 タテハケメ (7~8本/1cm) 左下り ナナメハケメ 内面 ココハケメ (14本/1cm)	口縁部-胴部1/6存
K 405	台付 壺	(5.7) 13.4	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普通 色調 (器表)暗茶褐色 (器壁)暗茶褐色	外面 タテハケメ (5~6本/1cm) 内面 ココハケメ (5~6本/1cm)	胴部1/3存
K 406	高 環	22.8 (7.0)	胎土 夾雑物をあまり混じえない 焼成 良好 色調 (器表)淡褐色~淡茶褐色 ~淡黒褐色 (器壁)淡褐色~淡黒褐色	外面 タテヘラミガキ 内面 ココ、タテ、ナナメヘラミガキ	環部1/3存 K407と同一體か
K 407	高 環	(5.3) 11.0	胎土 雑物をあまり混じえない 焼成 良好 色調 暗褐色~黒褐色	外面 タテ、ナナメヘラミガキ 内面 ココナデ	胴部1/2強存 K406と同一體か
K 408	高 環	13.4 (7.3)	胎土 細かな砂粒をかなり混じえ る 焼成 普通 色調 (器表)褐色 (器壁)茶褐色	外面 タテヘラミガキ→ココナデ 内面 タテヘラミガキ	環部-胴上部1/2強 存
K 409	高 環	12.3 (6.3)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普通 色調 茶褐色	外面 ナデ 内面 ナデ→ヘラミガキ	環部1/6存
K 410	小型土器	7.0 7.4 3.2	胎土 石英、長石を多量に含む 焼成 普通 色調 暗黄褐色~淡黒褐色	外面 タテハケメ、左下りナナメハケメ (8本/1cm) 内面 ココハケメ、口唇部ココナデ	実 存

第5表 土器個体説明②



K 101



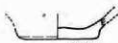
K 102



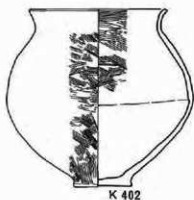
K 103



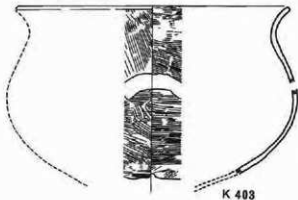
K 104



K 401



K 402



K 403



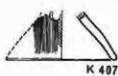
K 404



K 406



K 405



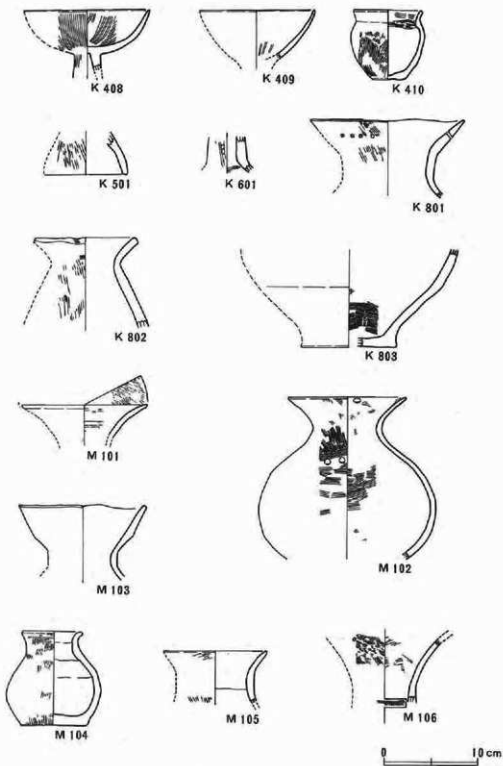
K 407



第51图 土器実測图①

土器番号	器形	口径 器高	特 徴	調 整 文 様	備 考
K 501	台付 壺	8.8 (4.7)	胎土 細かな砂粒を多く含む 焼成 普通 色調 (器表)暗茶褐色 (器壁)暗茶褐色	外面 タテハケメ (4本/1cm) 内面 ココナデ	脚底部1/3存
K 601	高 杯	(3.9)	胎土 細かな砂粒を含む、かなり 精選されている 焼成 良好 色調 (器表)褐色～黒褐色 (器壁)茶褐色	外面 タテハケメ 内面 ココハケメ	脚部1/2存
K 801	壺 E c	16.5 (8.5)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 やや良好 色調 (器表)暗黄褐色～橙褐色 (器壁)暗黄褐色	外面 タテハケメ、右下リハケメ (6本/1 cm) 内面 ココナデ 口縁部4孔	口縁部～頸部1/2存
K 902	壺 E b	10.2 (9.8)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普通～口縁不良 色調 (器表)黄褐色 (器壁)黄褐色～暗青灰色	外面 タテハケメ (5本/1cm) 内面 ココナデ	口縁部～胴上部 1/3強存
K 803	壺	(10.6) 10.2	胎土 細かな砂粒を多少含む 焼成 良好 色調 (器表)橙褐色 (器壁)淡黄褐色	外面 ココナデ 内面 ココハケメ (13本/1cm)	胴下部～底部1/3存
M 101	壺 E a	13.4 (3.8)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普通 色調 橙褐色	外面 ココナデか? 内面 ココハケメ→LR斜縄文	口縁部1/7存
M 100	壺 E a	12.3 (17.4)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普通 色調 (器表)淡黄褐色 (器壁)淡黄灰褐色	外面 タテハケメ (10～11本/1cm)、ココハ ケメ (8本/1cm) 円形浮文2個対× 4柱 内面 ココハケメ (7本/1cm) 口唇部円形 浮文	口縁部～胴下半1/2 存
M 103	壺 E a	13.4 (8.1)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 不良 色調 暗黄褐色～淡黄褐色	外面 ココナデ 内面 ココナデ	口縁部～頸部略完存
M 104	広頸壺 E	6.2 10.2 6.9	胎土 砂粒を多く含む 焼成 普通 色調 橙褐色	外面 タテハケメ (7本/1cm) 内面 ココナデ	略完存
M 105	壺 E a	11.0 (5.7)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 良好 色調 (器表)黄褐色 (器壁)黄褐色～淡青灰色	外面 タテハケメ→ココナデ 内面 ナデ	口縁部～頸部1/3存

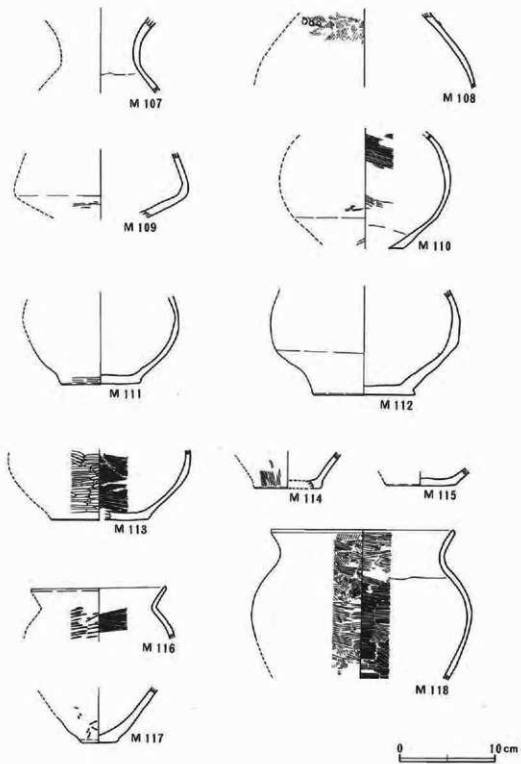
第6表 土器個体説明表 ③



第52图 土器実測图②

土器 番号	器種 器形	口径 器高 器径	特 徴	調 整 文 様	備 考
M 106	壺——	(8.0)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 良 好 色調 黄褐色	外面 右、左ナメハケメ (10~11本/1cm) 穿孔あり 内面 ヨコハケメ (7本/1cm)	胴部1/4存
M 107	壺——	(8.3)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 不 良 色調 (器表)暗黄褐色~黄灰褐色 (器壁)淡青灰色~淡灰色	外面 ヨコナデ、タナナデ 内面 タナナデか?	胴部1/3存
M 108	壺——	(8.4)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普 通 色調 (器表)橙褐色 (器壁)黄灰褐色	外面 二段に斜縄文、(上)RL、(下)R、内形浮 文3個 内面 ?	胴部上部1/3存
M 109	壺——	(7.0)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 やや良好 色調 (器表)橙褐色 (器壁)淡青灰色	外面 上部ヨコナデ、下部ヨコハケメヨコナ デ (5~6本/1cm) 内面 ヨコナデ	胴部中位1/4存
M 110	壺——	(12.3)	胎土 砂粒多し 焼成 やや良好 色調 (器表)黄褐色 (器壁)淡黄灰色~淡黒褐色	外面 ヨコハケメ→ヨコナデ 内面 ヨコハケメ (8本/1cm、5~6本/1 cmの2種)	胴部中位1/3存
M 111	壺——	(9.3) 8.3	胎土 砂粒をかなり多く含む 焼成 普 通 色調 (器表)橙褐色 (器壁)淡黄灰褐色	外面 ヨコナデ 内面 細かいハケメ	胴部下半~底部完存
M 112	壺——	(11.3) 10.8	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普 通 色調 (器表)淡黄褐色 (器壁)淡黄灰色	外面 ナデ 内面 ヨコナデ、ハケメ?	胴部下半~底部完存
M 113	壺——	(7.4) 10.4	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 良 好 色調 (器表)暗黄褐色 (器壁)暗茶褐色	外面 ヨコハケミガキ 内面 ヨコハケメ (10本/1cm)	胴下部~底部1/5存
M 114	壺——	(3.8) 7.0	胎土 石英、長石、雲母等多量に 含む 焼成 やや不良 色調 (器表)暗黄褐色~黒褐色 (器壁)黒褐色	外面 ケテハケメ (5~7本/1cm) 内面 ヨコナデ、一部ヨコハケメ	底部1/3存 スス付着
M 115	壺——	(1.9) 7.6	胎土 砂粒を含む 焼成 やや良好 色調 (器表)橙褐色 (器壁)淡青灰色	外面 ヨコナデ 内面 ヨコハケメ	底部完存

第7表 土器個体説明④



第33图 土器实测图③

土器番号	器種器形	口径高さ	特徴	調査文種	備考
M 116	平底 甕 D ₁	14.2 (5.6)	胎土 細かな砂粒を多く含む 焼成 普通 色調 (器表)暗褐色→淡黒褐色 (器底)暗褐色	外面 ヘラケズリ 内面 細かなヨコハケメ、ヨコナデ	口縁部→胴上半1/4存 M117と同一個体か
M 117	平底 甕 D ₁	— (5.9) 3.8	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普通 色調 (器表)暗褐色 (器底)淡褐色	外面 ヘラケズリ痕あり 内面 ヨコナデか?	底部完存 M116と同一個体か
M 118	甕 B	19.4 (16.0)	胎土 細かな砂粒含む 焼成 普通→やや不良 色調 (器表)暗褐色→黒褐色 (器底)暗茶褐色	外面 口縁タテ以下ヨコ、右下リナメハケ メ (5-7本/1cm) 内面 ヨコハケメ (11本/1cm、7本/1cm)	口縁部→胴部1/4存 スス付着
M 119	甕 D ₁	20.0 (7.5)	胎土 砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 (器表)淡褐色→淡黄褐色 (器底)淡褐色	外面 口縁部削み目 ヨコハケメ、右下リナ メハケメ (10本/1cm) 内面 ヨコハケメ、ヨコナデ	口縁→胴部約1/3存
M 120	甕 D ₁	15.4 (5.6)	胎土 細かな砂粒を含む。かなり 精選されている 良好 色調 (器表)黄褐色 (器底)暗黄褐色	外面 口唇部、ハケで押え→削み目、口縁部 左下リナメハケメ (8-9本/1cm)、 胴部ヨコハケメ (6本/1cm) 内面 口唇部ヨコハケメ (8-9本/10cm) 胴部ヨコナデ	口縁部→胴上部1/6 存
M 121	甕 D ₁	19.9 (18.9)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普通 色調 (器表)茶褐色→黒褐色→淡 茶褐色 (器底)明茶褐色	外面 右下リナメハケ 内面	口縁部略完存、胴部 2/3存 一部スス付着
M 122	甕 D ₁	24.0 (17.4)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普通 色調 (器表)茶褐色→黒褐色→淡 茶褐色 (器底)茶褐色	外面 ナメハケ右下リ (下部) 左下リナ メハケ (6本/1cm) 内面 ヨコハケメ (5-7本/1cm→8本/ 1cm)	口縁部略完存、胴部 1/2存 スス付着
M 123	甕 D ₁	16.2 (20.8)	胎土 砂粒を含む 焼成 普通→やや良好 色調 暗茶褐色→黒褐色	外面 タテ、ナメ (右下リ、左下リ) ハケ メ (8本/1cm) 内面 ヨコ、ナメ (右下リ、左下リ) ハケ メ (7本/1cm)	口縁部1/4存、胴部 1/3存 スス付着
M 124	台付 甕	— (5.8)	胎土 砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 (器表)淡褐色 (器底)淡褐色	外面 ヨコハケメ (6本/1cm)、タテハケメ (10本/1cm) 内面 ヨコハケメ (6本/1cm、16-17本/ 1cm)	胴部下半1/2存
M 125	台付 甕	— (2.9)	胎土 砂粒をかなり多く含む 焼成 やや不良 色調 (器表)淡褐色 (器底)暗褐色(脚)茶褐色	外面 タテハケメ 内面 ヨコハケメ (6本/1cm)	接合部存

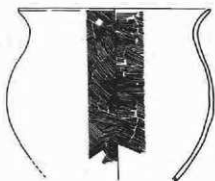
第8表 土器個体説明⑤



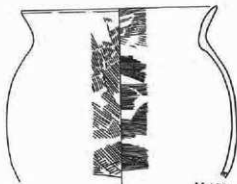
M 119



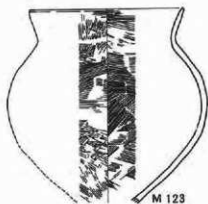
M 120



M 121



M 122



M 123



M 124



M 125



M 126



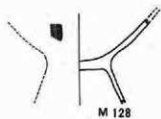
M 127



第54图 土器实测图④

土器番号	器種器形	口径高さ	特徴	調整文様	備考
M 126	台付 甕	(5.5)	胎土 砂粒かなり多い 焼成 やや不良 色調 (器表)暗褐色 (器壁)暗褐色	外面 ヨコナデ 内面 右下リナメハケメ	接合部1/3存
M 127	台付 甕	(12.0) 11.9	胎土 細かな砂粒を多く含む 焼成 普通 色調 (器表)暗褐色 (器壁)暗褐色	外面 タテハケメ→ヨコハケメ (6~7本/ 1cm, 9本/1cm) 内面 ヨコハケメ (9~10本/1cm) 脚部 (7本/1cm)	脚部完存 胴下部1/4存
M 128	台付 甕	(9.4)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 (器表)淡茶褐色 (器壁)淡茶褐色	外面 タテハケメ (10本/1cm) 鼠あれ 内面 ヨコハケメ (細かなハケメ)	胴下部-接合部-脚部-一部存
M 129	台付 甕	(4.1)	胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 普通 色調 (器表)淡褐色 (器壁)淡褐色	外面 タテハケメ (5本/1cm, 17本/1cm) 内面 ヨコハケメ (9本/1cm)	胴上部1/6存
M 130	台付 甕	(6.8) 8.6	胎土 石英、長石をかなり多量に含む 焼成 普通 色調 (器表)茶褐色 (器壁)茶褐色	外面 タテハケメ (6本/1cm) 内面 ヨコハケメ、右下リナメハケメ (かなり細かい)	完存
M 131	台付 甕	(9.2) 12.6	胎土 細かな砂粒を多量に含む 焼成 普通 色調 (器表)淡茶褐色 (器壁)茶褐色	外面 台部端部(右下リ) ナメハケメ→タテハケメ (5本/1cm) 内面 左下リナメハケメ、底部ハケメ (5本/1cm)	完存
M 132	台付 甕	(6.7) 9.8	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 やや良好 色調 (器表)暗茶褐色 (器壁)暗茶褐色	外面 タテハケメ (9本/1cm) →タテハケメ、ヨコハケメ (18本/1cm) 内面 右下リナメハケメ (15~16本/1cm)	接合部-脚部1/2存
M 133	台付 甕	(7.5) 9.8	胎土 砂粒かなり多く含む 焼成 普通-やや良好 色調 (器表)暗茶褐色 (器壁)暗茶褐色	外面 右下リ、左下リナメハケメ (6本/ 1cm) (上部) ヨコナデ 内面 底部ヨコハケメ (10本/1cm) 脚部ヨ コハケメ (7本/1cm)	2/3存
M 134	台付 甕	(4.7) 10.4	胎土 砂粒かなり多く含む 焼成 やや不良 色調 (器表)淡褐色 (器壁)淡褐色	外面 ヨコナデか? 内面 ヨコハケメ (6~7本/1cm)	脚部3/4存
M 135	高 環	18.8 (6.5)	胎土 細かな砂粒を若干混じえる 焼成 普通 色調 暗茶褐色	外面 口唇部ヨコハケメ→ヨコナデ 内面 ヨコナデ	環部1/6存

第9表 土器個体説明⑧



M 128



M 129



M 130



M 131



M 132



M 133



M 134



M 135



M 136



M 137



M 138



0001



0002



第55图 土器実測図⑤

土器番号	器形	口径 高さ 底径	特徴	調整・文様	備考
M 136	高 環	(4.4)	胎土 2~3%のものを含めて多量に砂粒を混じえる 焼成 やや不良 色調 茶褐色~暗茶褐色	外面 タナヘラミガキか? 肌あれ 内面	胴部1/3存
M 137	小型土器	8.1 4.4 3.4	胎土 金雲母、長石等を含む 焼成 やや良好 色調 (胎表)淡茶褐色 (胎底)淡青灰褐色	外面 ヘラケズリ 内面 肌あれ	1/2存
M 138	小型土器	7.8 (6.6)	胎土 砂粒を含む、石英・長石を含む 焼成 良好 色調 茶褐色	外面 タナヘラメ→タナヘラミガキ→ヨコヘラミガキ 内面 口縁ヘラミガキ→ヨコハケメ、右下リナナメハケメ (6~7本/1cm)	口縁部~胴部1/3?存
0001	高 環	(3.3)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 やや良好 色調 茶褐色~黒褐色	外面 ヘラケズリ→タナヘラミガキ 内面 ミガキ 胴ヨコハケメ	接合部存
0002	小型土器	7.0 6.2 3.8	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 (胎表)淡褐色~淡黒褐色 (胎底)橙赤褐色	外面 ナデ 内面 細かなヨコハケメ (19~20本/1cm) →口縁ヘラミガキ	口縁部~胴部1/4存

第10表 土器個体説明⑦

2. 石器

本調査によって得た石器は、磨製石器1点・砥石2点である。

磨製石器 (第56図)

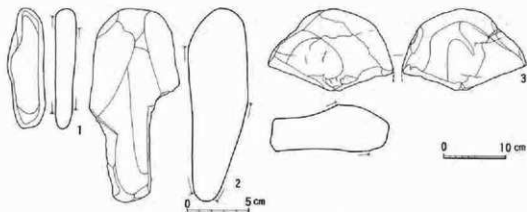
古墳時代K-1号竪穴住居跡内より出土する用途不明石器である。器長96.1mm・器巾28.9mm・器厚17.4mm、器重82gを測る長細い砂岩を使用して、表裏に磨面をもっている。表面は平坦、裏面は自然面にそった凸凹を呈している。したがって、「磨る・磨られる」対象物は柔軟な、皮のようなものが予想される。平坦磨面には矢羽状に幾条もの磨減線が観察される。

類似石器は月の輪遺跡群南部谷戸遺跡、月の輪平遺跡、同上遺跡等の竪穴住居跡内より出土している。従前では縄文時代石器に認める例が一般であったが、この状況から古墳時代の石器の可能性がたかい。

砥石 (第56図)

本調査によって得た砥石は2点である。

2は古墳時代K-5号竪穴住居跡より出土する。石材は砂岩で側面を欠く。器長155.5mm、器巾(74.0mm)、器厚48.5mm、器重(532g)を測る。側片から予想すると比較的円形にちかい形状が窺える。砥面は比較的微細で、表裏に認められる。表面の使用度は激しい。砥面は中央を低く湾曲しており、研ぐ対象物は砥石巾より短いものが予想される。



第56図 古墳時代石器実測図

3は古墳時代K-4号竪穴住居跡の床面より出土する。大型でそれは床面上に据えられた状況も窺えられる。石材は砂岩で中央より2分の1程を欠く。器長(202 mm)、器巾(134 mm)、器厚75.5mm、器重(2,285 g)を測る。形状は円形が予想され、砥面は表裏に認められる。両面とも中央を低くもった湾曲をして、表面の度合はなお、つよい。したがって、研ぐ対象物は砥石より短かく、円刃的なものであろう。砥石は月の輪平遺跡に多くの資料をみる。

第V章 律令時代

第1節 遺構

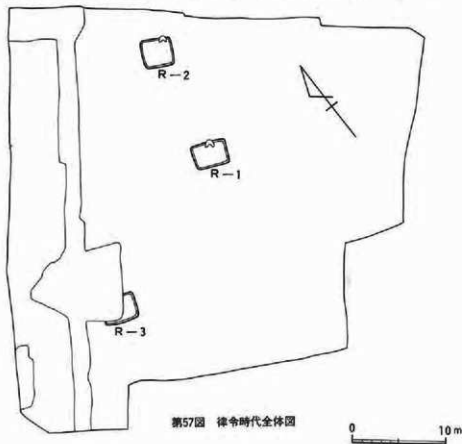
本調査によって得た律令時代の遺構は竪穴住居跡3基である。いずれも奈良時代末～平安時代の初頭に属し、関東編年では真間期にあたる。

1. 竪穴住居跡

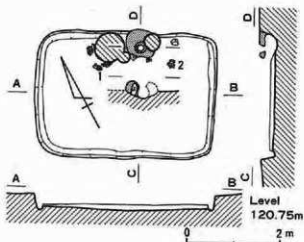
R-1号竪穴住居跡(第58図, 図版第50)

位置 E・F-15・16グリッドにまたがって検出される。F-16ポイントを床面中央南東寄りにみる。標高120.60m付近にあたり、南側調査区の中央北寄り、南北にはゆるい緩い背の部分で止切れて、除々に平坦となる部分である。古墳時代K-5号竪穴住居跡、M-1溝状遺構の中間にあたり、それぞれに5m程で逢する。R-2号竪穴住居跡が北側へ10m程、R-3号竪穴住居跡が南西側へ15m程離れて存在する。

構造 形状は長方形を呈し、規模は380×260cm、床面積約9㎡を測る。長軸方位はN-61°



—Wを示す。壁高は20cm程である。床面構造は数cm程の貼り床がなされて、壁際には巾10cm、深さ5cm程の周溝がほぼ一周している。床面の北隅を歴史時代土壌墓、小坑によって攪乱される。柱穴や貯蔵穴等の内部施設は確認されない。竈は北壁中央に位置するが、左袖部を小坑によって欠き、上部も水田耕作によって欠くが、規模は70×60cm、高さ30cmを測り、径20cm程の掛口と、焚口が確認される。煙道は不明である。右袖部には芯石が使用されている。遺物は竈周辺に甕等の破片が散在するが、攪乱坑によって多くを失っている。

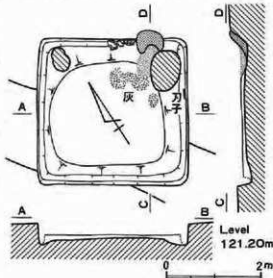


第58図 R-1号竈穴住居跡実測図

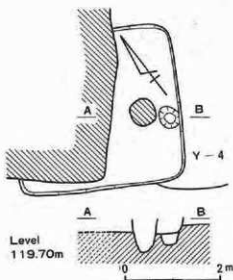
R-2号竈穴住居跡(第59図、図版第51)

位置 D-13・14グリッドにまたがり、弥生時代M-1溝状遺構を重複して検出される。標高121.10m付近にあり、南側調査区の北端で、中央を南北にはしる緩い背の西側部分である。西壁を接して縄文時代J-1号竈穴住居跡、南西側に5m程して古墳時代K-8号竈穴跡をみる。R-1号竈穴住居跡は南側へ10m程離れて存在している。

構造 形状は略正方形を呈し、規模は320×305cm、床面積約9㎡を測る。長軸方位はN-54°-Wを示す。壁高は20cm程である。床面構造は下層に掘り方を有し、それは壁際が20cm程深く掘られ、中央は数cmと方台状にたかくなる。古墳時代竈穴住居跡の床面構造でA類と称した構築方法に類している。周溝は明確でなかったが、10cm程の巾をもってほぼ一周しよう。床面の北半部は竈より流出する焼土・灰が一面に散布する。なお、北壁の東西両隅は歴史時代土壌墓、小坑によって攪乱される。柱穴や貯蔵穴等の内部施設は確認されない。竈は北壁東寄りに位置する。大半が破壊されて、規模60×50cm、高さ40cm程で袖部が「U」状に残存するに過ぎない。芯石の使用はない。遺物は竈西隣に甕1個体分が破片の状態で出土する。さらに東壁中程の壁際に刃子を見る。検出時には鞘におさまっていたが、取り上げの際に粉砕し



第59図 R-2号竈穴住居跡実測図



第60図 R-3号竪穴住居跡実測図

構造 平面プランの3分の2程を攪乱によって失い、不明瞭な部分が多いが、形状は略正方形、規模は360（推定）×340 cm、床面積約12㎡が予想される。長軸方位はN-59°-Wを示す。壁高は5～10cm程で、床面は水田耕作で削除されてしまっており、掘り方のみの検出となる。若干壁際が深く掘られており、R-2号竪穴住居跡に類する可能性がある。周溝は定かでない。掘り方内に存在する小坑は東側がK-4号竪穴住居跡の柱穴で、西側は調査区全域に点散する歴史時代の小坑である。本住居跡の柱穴、貯蔵穴等の内部施設は確認されない。竈も攪乱で失うが、北側埋土に若干の焼土粒、灰等が混入している。遺物は皆無に等しい。

第2節 遺物

本調査によって得た律令時代の遺物は土器、および鉄器類である。

1. 土器

本調査によって得た土器は須恵器・土師器である。

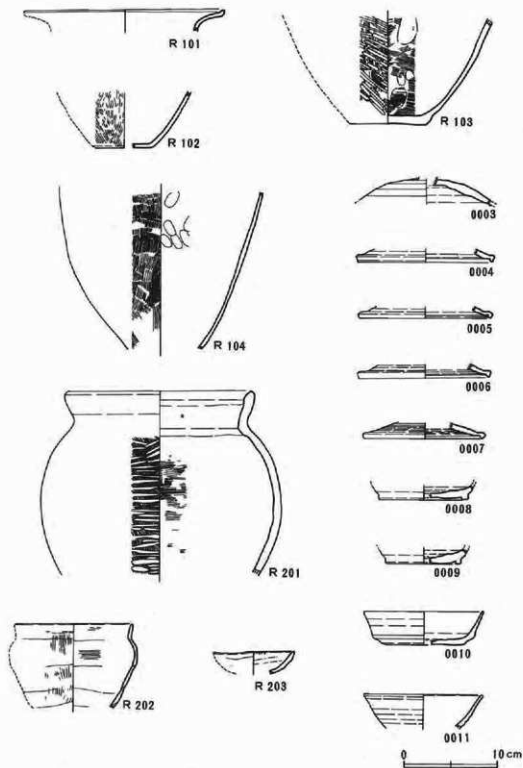
須恵器は全て表採品で、坏・蓋が認められる。しかし、全てが細片で全形を窺えるのは極く僅かで、詳細な観察は不可能にちかい。坏は高台を有するものと、ないものがある。高台付坏の底部は糸切り、平底で高台を超えない。蓋は口端の返りが短かく、三角形状を呈して、つまみ部は不明であるが、壺宝珠状よりも三角状や中央のややへこんだ形状が予想される。これは蓋の消滅がちかい時期であることを暗示していよう。

土師器はR-1・2号竪穴住居跡より、甕・坏等が出土している。甕はいわゆる「鞍車型」と呼称される球胴甕、おそらく肩部から口縁部が略「コ」字状に反する長胴甕が認められ

てしまった。

R-3号竪穴住居跡（第60図、図版第52）

位置 C・D-19グリッドにまたがり、古墳時代K-4号竪穴住居跡を重複して検出される。標高119.60m付近にあたり、南側調査区の中央南西寄りで、中央を南北にはしる緩い背の部分の西側に位置して、地形はそれより南西にひくくなる。西側には攪乱溝が南北にはしって、床面の3分の2程を失っている。南側へ5m程するなかに縄文時代第3号土壘跡、第4・7・9号集石土壘跡をみて古墳時代竪穴住居跡も列状、弧状に存在し、遺構が密集する。しかし、律令時代遺構は北東側へ15m程しないとR-1号竪穴住居跡に達しない。



第61圖 土器実測図⑥

土器番号	器種器形	口径高さ	特徴	調整・文様	備考
R 101	長胴甕	21.4 (2.3)	胎土 金雲母、長石を含み細かな 精選された砂粒を含む 焼成 良好 色調 (器表) 赤褐色 (器底) 淡褐色	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	口縁部1/4存 R 102と同一個体か
R 102	長胴甕	(6.1) 5.8	胎土 金雲母、長石を含む 焼成 良好 色調 (器表) 赤褐色～暗褐色 (器底) 黄褐色	外面 タテハケメ (6本/1cm) 内面 ヨコナデか?肌あれ激しい	胴下部～底部1/4存 R 101と同一個体か
R 103	球胴甕	8.4 (11.4)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 良好 色調 (器表) 暗褐色 (器底) 暗褐色	外面 タテハケメ (12～13本/1cm) 一志下り ナメヘラミガキ 内面 ヨコハケメ (10～11本/1cm, 7～8本/1cm の2輪脚押え(上部)ハケメのあと押え, ヨコナ デ, (下部)押えのあとハケメ, 底部, 本家煎	胴下部1/4存、底部 略欠存
R 104	長胴甕	(16.9)	胎土 金雲母を施しえる細粒を含む 焼成 普通 色調 (器表) 淡褐色～淡黒褐色 ～淡茶褐色 (器底) 黄褐色	外面 タテハケメ (10本/1cm, 7本/1cm) 内面 ヨコナデ, オヤエ	胴部1/2存
R 201	球胴甕	19.3 (19.8)	胎土 細かな砂粒を含む 焼成 良好 色調 (器表) 赤褐色、暗褐色 (器底) 赤褐色	外面 タテハケメ (11～12本/1cm) ヨコハ ラミガキ 内面 ヨコハケメ (6本/1cm)	口縁～胴部下半 1/2存
R 202	甕	12.4 (9.2)	胎土 金雲母、石英等をかなり多 量に含む 焼成 普通 色調 (器表) 暗褐色～淡茶褐色 (器底) 暗褐色～淡茶褐色	外面 タテハケメ (5本/1cm, 8本/1cm) 口縁部ヨコナデ 内面 細かなヨコハケメ, ヨコナデ	口縁部1/4存、胴部 上半1/3存 一部スス付着
R 203	環	8.8 (2.4)	胎土 かなり精選されている 焼成 良好 色調 淡褐色	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	1/5存
0003	須恵器 環蓋	(3.0)	胎土 砂粒を含む(大粒が目立つ) 緻密 焼成 良好 色調 暗灰色	外面 天井部へウ割り 内面 ロクロ目	
0004	須恵器 環蓋	14.8 (1.5)	胎土 若干の砂粒を含み緻密 焼成 良好、硬質 色調 暗灰色	外面 体部ロクロ目、口縁部ナデ 内面 ロクロ目、口縁部ナデ	口縁部1/7存
0005	須恵器 環蓋	14.3 (1.4)	胎土 わずかな砂粒、長石を含み 緻密 焼成 良好、硬質 色調 暗灰色	外面 体部ロクロ目、口縁部ナデ 内面 ロクロ目、口縁部ナデ	口縁部1/7存

第11表 土器個体説明⑧

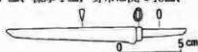
土器番号	器種・器形	口径・高さ (口径)	特徴	調査・文様	備考
0006	須恵器 環蓋	14.2 (1.5)	胎土 砂粒多く、若干粗 焼成 やや粗、軟質 色調 乳灰色	外面 体部ロクロ目、口縁部ナデ 内面 ロクロ目、口縁部ナデ	口縁部1/7存
0007	須恵器 環蓋	13.1 (1.8)	胎土 砂粒含み緻密 焼成 普通 色調 灰色	外面 天舟部回転へり削り、体部ロクロ目、 口縁部ナデ 内面 ロクロ目、口縁部ナデ	口縁部1/6存
0008	須恵器 環	(1.6) 9.5	胎土 おずかな砂粒を含み緻密 焼成 良好・硬質 色調 灰色	外面 ナデ、底部中央部に糸切り痕 内面 ナデ	
0009	須恵器 環	(1.7) 7.9	胎土 おずかな砂粒、長石を含み 緻密 焼成 良好・硬質 色調 灰色	外面 ナデ、底部中央部に糸切り痕、体部と の間に明確な線を付す 内面 ナデ	
0010	須恵器 環	12.7 3.6 8.0	胎土 若干の砂粒を含み緻密 焼成 良好・硬質 色調 暗青灰色	外面 口縁部～体部ナデ、底部へり削り 内面 全面ナデ	1/4存
0011	須恵器 環	(12.8)	胎土 砂粒含み、やや粗 焼成 やや粗・普通 色調 白灰色	外面 ロクロ目、口縁部ナデ 内面 全面ナデ	口縁部1/6存

第12表 土器個体説明 ⑨

る。球胴甕（R201）は最大径を胴部中央にもち、胴部で一旦ぐびれて口縁部に連なる。口縁部は明確な折り返しはされずに僅かな窪みとなる。これは最大径を肩部にもつ旧態より新しい要素として知られる。口縁部が直立する小型甕、半円形の浅い体部を呈した略手捏様の環を伴出して、箱形で内面に放射状の暗文を有する環をみえていない。これはいわゆる甲斐型と称され、発生を8世紀後半とされれば、本遺跡はそれ以前、ひろく8世紀中半に主体をおいてよからう。

2. 鉄器類

本調査によって得た鉄器類はR-2号竪穴住居跡周溝内より出土した刃子1口（第62図、図版第53）がある。完形品で検出時には鞘におさまっていたが、取り上げの際に粉砕したものである。平棟平造りで、全長は145.5mmを測る。身長104.5mm、棟厚4mm、身巾は関で13mm、先端で7mmと除々に狭まっていく。関から身中程にかけて使用による磨耗が激しくなっている。茎は長さ41mm、厚さは4mmで、巾は組内で8mm、先端で5mmと除々に細



第62図 鉄器類実測図①

くなり、木痕が付着している。鉋は厚さ 1mm、巾 5mm 程の鉄板を長径 11mm、短径 7mm の卵形に作られている。

第VI章 歴史時代

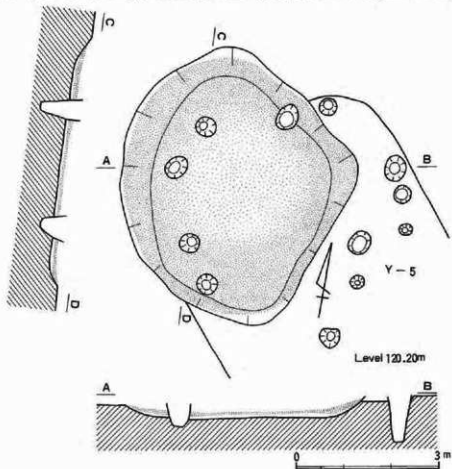
第1節 遺構

本調査によって得た歴史時代の遺構は焼土を内包する大形土壇跡1基と、多数の円形土壇跡である。中世～近世に属するであろう。

1. 焼土を内包する大型土壇跡(第63図, 図版第44)

位置 E・F-17・18グリッドにまたがって検出される。F-18ポイントを底面中央にみる。標高120.00m～120.10m付近にあり、南側調査区の中央で、もっとも平坦な地域に位置する。遺構も比較的密集して、古墳時代K-5・6号整穴住居跡を重複する、その両者の床面を大半削取している。

構造 形状は西～南壁が弧状を描き、北～東壁が隅丸形状となる。規模は510 × 480 cm、



第63図 焼土を内包する大形土壇跡実測図

面積約24㎡を測る。断面は皿状で深さ30～40cm程を測る。底面は比較的凸凹となっており、日常使用された痕跡はない。なお、底面より隣接するK-5号竪穴住居跡にかけて、径40cm程で極端に深い小坑がほぼ弧状となって10数坑確認される。これらは本土墳跡を切って穿孔され、より新しい所産であるが、性格を把握できない。調査区全域に点散する。

本土墳跡の最大の特徴は墳内全域に堆積する多量の焼土・炭化材である。これは黒色の腐食土にはさまれ、つまりサンドウィッチ状となって内包され、壁際にとくに厚く10cm程を測る。炭化材はいわゆる炭産物の堆積ではなく、焼土の上下層にカヤ状の細材から3cm程の丸材が散在している。瞬時の燃焼の結果であろう。遺物の出土はない。

2. 円形土墳跡

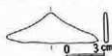
市内各所の遺跡を発掘調査すると、必ずといって良い程検出される普遍的な遺構である。径100cm内外を測り、中世～近世にかけての墳墓跡、つまり樽棺墓である把握が一般化している。本遺跡内には無縁墓地が数箇所存在したこともあって、人骨片、銭貨類、鉄器類、さらに灯明皿、かわらけ等の出土があった。

第2節 遺物

本調査によって得た歴史時代の遺物は銭貨類、および鉄器類、さらに多数の陶器片、かわらけ片である。

1. 銭貨類 (第65図, 図版第53)

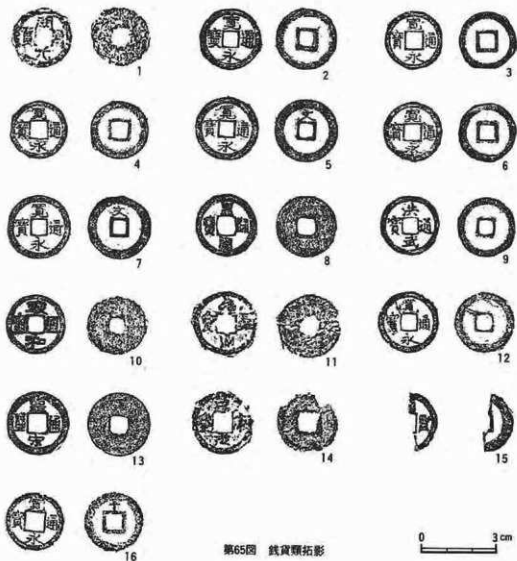
本調査によって得た銭貨類は16点である。①一開元通宝は昭和54年の遺跡確認踏査の際に有舌尖頭器等と共に表採されたものである。②～⑦一寛永通宝はE-16グリッドより、6枚が紐に結ばれて出土した。⑤、⑦は背「文」銭である。なお、それはヒウチガマに認め得る鉄器、および石英片、いわゆるヒウサイシと共に布に巻かれた状況であった。周囲には骨片、骨粉が散在していた。⑧一皇宋通宝、⑨一洪武通宝⑩一至和通宝はD-17グリッドよりやはりまとまって出土したものである。⑪一元祐通宝は古墳時代K-4号竪穴住居跡埋土中、⑫一寛永通宝はH-8グリッドより出土したもので、⑬は鉄銭である。⑭一皇宋通宝、⑮一聖宋元宝はC-14グリッドより出土したもので、⑯が風化が激しく判読は危うい。⑰一紹聖元宝は半欠してC-20グリッドより出土、⑱一寛永通宝はE-16グリッドより出土するが、鉄銭で背文に「十」



第64図 鉄器類実測図②

をみる。

寛永通宝は江戸時代の代表的な銭貨で、初鋳は寛永13年、西暦1636年である。1656年に鑄造が一時中断され、1668年より復活して、以後明治初期まで200年にわたって鑄造される。中断以前を古寛永、以後



第65図 銭貨類拓影

を新寛永と呼称され、書体が異なるが、細字で、「寶」字の足が「八」となって、本道跡出土の寛永通宝は新寛永である。

他は唐、北宋、明よりの渡来銭を国内で私鑄したビタ（鋸）銭と呼ばれる粗悪な銭貨である。時代的には鎌倉時代末期から江戸時代初期にかけて鋳造、使用されたとはい。

ここでは一応、本道跡出土の銭貨の初鑄年を示せば、開元通宝（唐）621年、皇宋通宝（北宋）1039年、至和通宝（北宋）1054年、元祐通宝（北宋）1093年、紹聖元宝（北宋）1094～1097年、聖宋元宝（北宋）1101年、洪武通宝（明）1368年である。

2. 鉄器類 (第64図, 図版第53)

いわゆるニウチガマに認め得る完形品で、器長74mm、器巾25mm、器厚4mmを測る。布裏の付

着が認められる。これはE-16グリッドより、紐に結ばれた寛永通宝6枚と、ヒウチインであろう半拳大程の石英片と共に出土したものである。周囲には骨片、骨粉が散在しており、これに副葬されたものであろう。

第Ⅶ章 調査総括

上石敷遺跡の発掘調査の概要は以上である。遺跡の発見が区画整理事業の途上であったため、その大半が破壊された状況下の調査となったが、その成果は予想以上のものがあつた。それらをまとめて調査の総括とすれば、以下のとおりである。

先ず、表面踏査で指摘されていたように、先土器時代より縄文時代～古墳、律令、歴史時代にまたがった本地域でも有数の複合遺跡であつた。表採による有舌尖頭器によつた先土器時代の明確な包含層の確認、関連遺物の出土はなかつたが、これは若宮遺跡にも言えることで、有舌尖頭器が終末期に小形化・鎌形へ変化していくことは周知されるが、その下限は現状では定かでない。したがつて、縄文時代の石器に記載しているが、そこに断定しているのではない。今後とも本地域の先土器時代の有り方は課題となつて残ろう。

縄文時代は早期後葉、野島式土器に比定されるまとまつた資料を得た。代官屋敷遺跡に続いて2例目となり、愛鷹山麓地域との関連、検討も必要となつてこよう。また、摺糸文が施される実底土器が出土している。その下限が本地域の問題として常に論議を呼んでいるが、本遺跡によれば、野島式期までは伴出関係を指摘できよう。

近年、本地域の早期遺跡が明らかになりつつあるなか、若宮遺跡より代官屋敷遺跡に続く、摺糸文土器、押型文土器の伴出関係の整理、さらには過去より多くの表採資料を提供してきた沼久保坂上遺跡の発掘調査の実施計画等、本遺跡の押型文土器の欠片をもつて、一連の摺糸文土器の序列の一端がとらえられるような段階にあることは確かとなつてきている。沼久保坂上遺跡の成果を期待したい。

さらに縄文時代は中期初頭、五領ヶ台式土器、西日本系土器群、鷹島式・北裏C1式類似土器のまとまつた資料も得た。五領ヶ台式期については前述の代官屋敷遺跡に続いてやはり2例目であるが、鷹島式・北裏C1式類似土器は初例である。その内容は駿東郡長泉町柏窪遺跡の構成に似ている。代官屋敷遺跡が諸磯b・c式期～十三菩提式期に主体をもつて、さらには大歳山類似土器もみていることから、本地域の前期中葉～中期初頭の内容はさらに明らかとなろう。

また、竪穴住居跡の検出も代官屋敷遺跡に続くものである。諸磯式期より3例目となり、五領ヶ台式期のなかでは2例目である。この時期に至ると竪穴住居跡形状が、前期的な方形から中期的な円形への転換が計られることが関東地方を中心に予想されている。しかし、その過程をとらえた例は少ない。そのなかで代官屋敷遺跡例が五領ヶ台式期の古い段階の所産で、形状が若干歪んだ隅丸長方形、本遺跡例が五領ヶ台式期の新しい段階の所産で、形状が略円形であつたことは、転換期のひとつのあり方を提供できたかも知れない。が、地域性の相違、社会構造、あるいは集団の背景等、総合的な判断が求められるなか、本地域の条件はまだ不十分と言えよう。

古墳時代は五領式期、本地域の編年によれば大廓式に属する竪穴住居跡（竪穴状遺構も含む）を8基、溝状遺構を1基検出した。その内容はとくに古い様相を呈しており、弥生時代～古墳時代の接点が不透明ななかで、貴重な資料を上積みできた。本地域でも月の輪上遺跡（弥生時代後期後半）→上石敷遺跡（大廓式古）→月の輪平遺跡（大廓式新）と徐々に整備されてきている。今後に期待される。

集落構造は一時の類焼とされる4基の竪穴住居跡を認め、それによれば、直径約20m程を有する円形空間（広場）を中心に、大型住居跡、一般住居跡が10m程の間隔を保って整然に配置されている状況が窺えた。これは月の輪遺跡群にも指摘されており、後は類別の積み重ねと、溝状遺構の性格と関連の追求が必要となろう。

律令時代、つまり奈良・平安時代の集落跡の検出は富士宮市にとって初例であった。時期的な判断は8世紀中半、関東編年では真間期にあたろう。隣接する富士市には「駅家」、「郡衙」等の性格が予想される東平遺跡^{注3}や三新田遺跡^{注4}、さらには本遺跡と丘陵をひとつ隔てた天間代山遺跡^{注5}等、比較的遺跡に恵まれ、遺跡毎の前後関係も整理しつつある。本遺跡の規模、地域的な立地条件は天間代山遺跡にちかいため、東平遺跡等とは自ずから性格を異にしよう。つまり、東平遺跡を中心とする一大遺跡群の周縁に点在する後進集落であり、今後、こうした本地域の律令時代集落の具体相についての検討が必要となろう。

歴史時代については、もはや発掘調査の普遍的な遺構と言うべき、円形土壇跡が調査区に万遍なく検出される。いわゆる中世～近世にかけての樽棺墓跡で、人骨片とともにヒウチガマ・ヒウチイシ・六文銭等の副葬品が布に付着して検出され、多くの銭貨を得たのは初例であった。

以上、昭和56年度に発掘調査を実施した上石敷遺跡の報告と、それに関する問題について簡単に述べてきた。調査が限られた一部であって、全体の性格を把握するには困難が伴い、断片的な資料の列記にならざるを得なかった。今後共、本地域における関連資料の整理と研究を進めていかなければならないと思う。

注1 富士宮市教育委員会 1985 「沼久保板上遺跡」 富士宮市文化財調査報告書第7集

注2 長泉町教育委員会 1980 「柏窪遺跡発掘調査概報」

注3 日本道路公団名古屋建設局・静岡県富士土木事務所・静岡県教育委員会・富士市教育委員会 1981 「東平」西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書

注4 富士市教育委員会 1983 「三新田遺跡発掘調査報告書」

注5 富士市教育委員会 1977 「天間代山遺跡」

圖 版

図版第 1



A. 航空写真

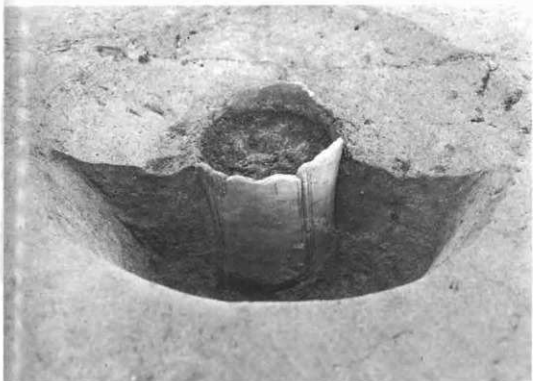


B. 遺跡全景 (古墳・律令時代)

图版第 2



A. J-1号竖穴住居跡床面



B. J-1号竖穴住居跡内埋甕

図版第 3



A. 第1号集石土痕跡検出状況



B. 第1号集石土痕跡掘り方

図版第 4



A. 第2号集石土痕跡検出状況



B. 第2号集石土痕跡掘り方

図版第 5



A. 第 3 号集石土壇跡検出状況

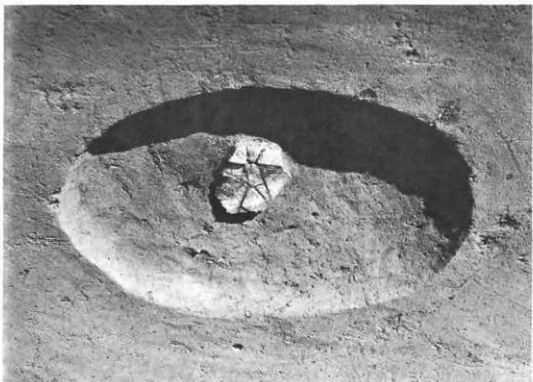


B. 第 3 号集石土壇跡掘り方

图版第 6

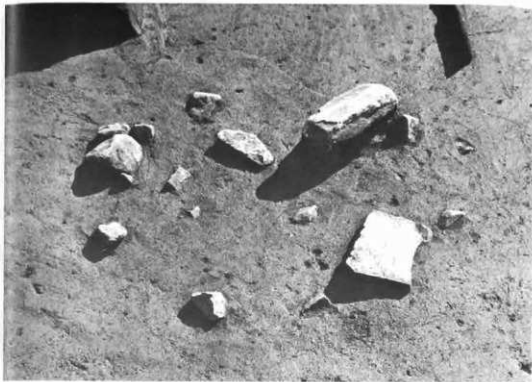


A. 第 4 号集石土痕跡検出状況



B. 第 4 号集石土痕跡掘り方

图版第 7

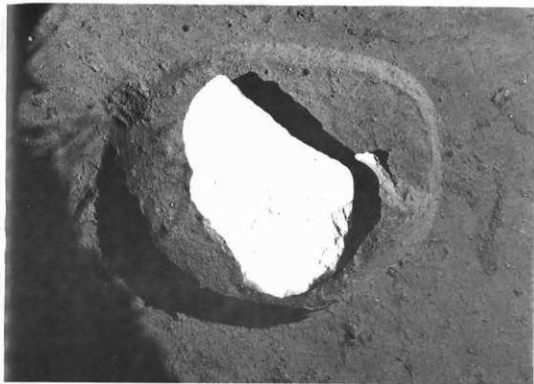


A. 第 5 号集石土坑跡出土状況



B. 第 5 号集石土坑跡掘り方

図版第 8



A. 第6号集石土痕跡検出状況



B. 第6号集石土痕跡掘り方

図版第 9



A. 第1号集石跡検出状況 (南側)



B. 第1号集石跡検出状況 (北側)

图版第10



A. 第2号集石跡検出状況

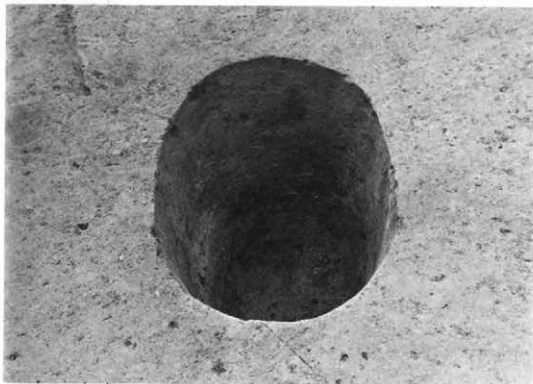


B. 第3号集石跡検出状況

图版第11



A. 第1号土壤跡完掘状況

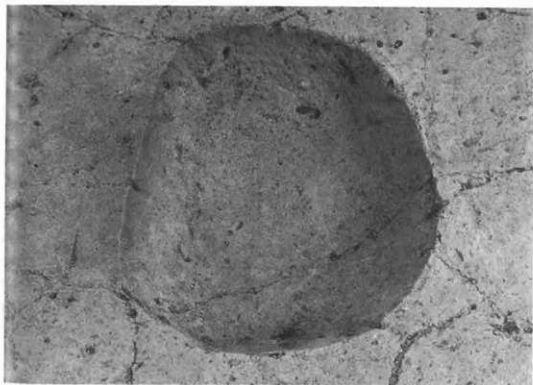


B. 第2号土壤跡完掘状況

图版第12

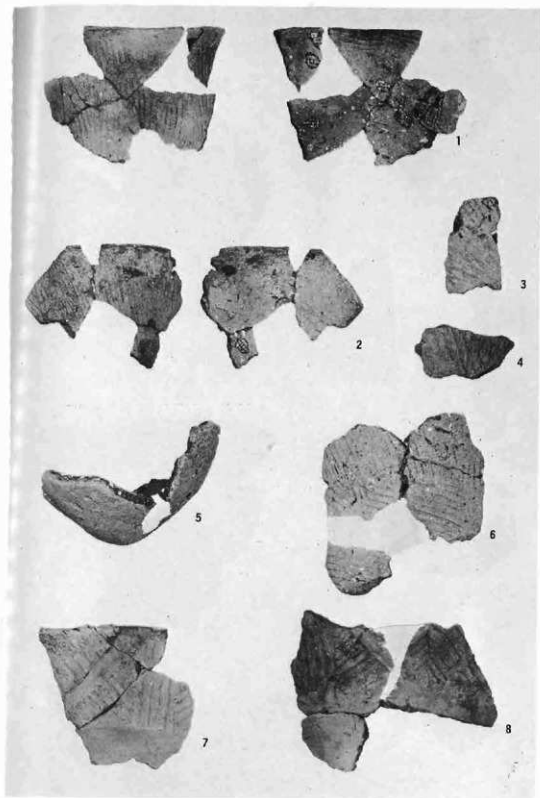


A. 第3号土壤跡完掘状況



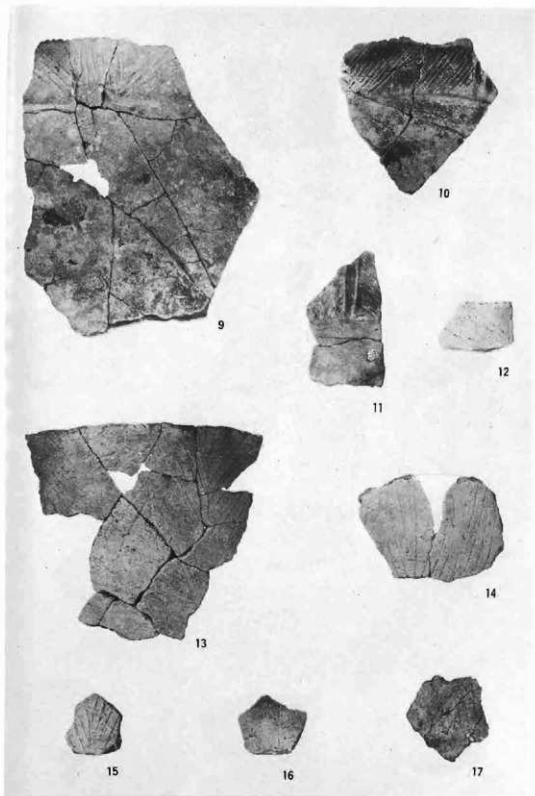
B. 第4号土壤跡完掘状況

図版第13



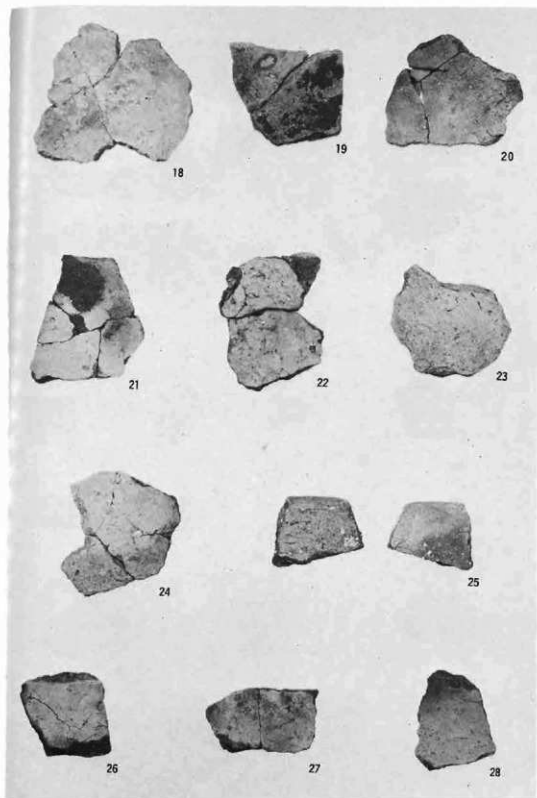
第I群土器(1~6)・第II群土器(7~8)

图版第 14

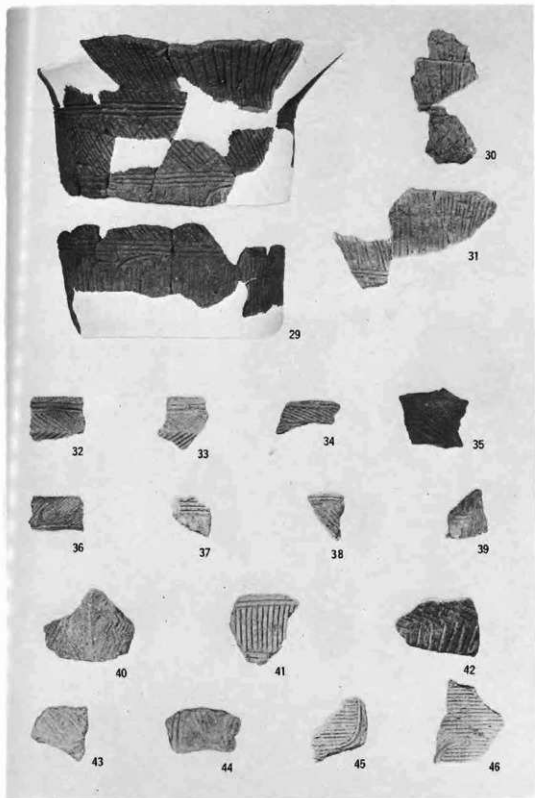


第Ⅱ群土器 (9~17)

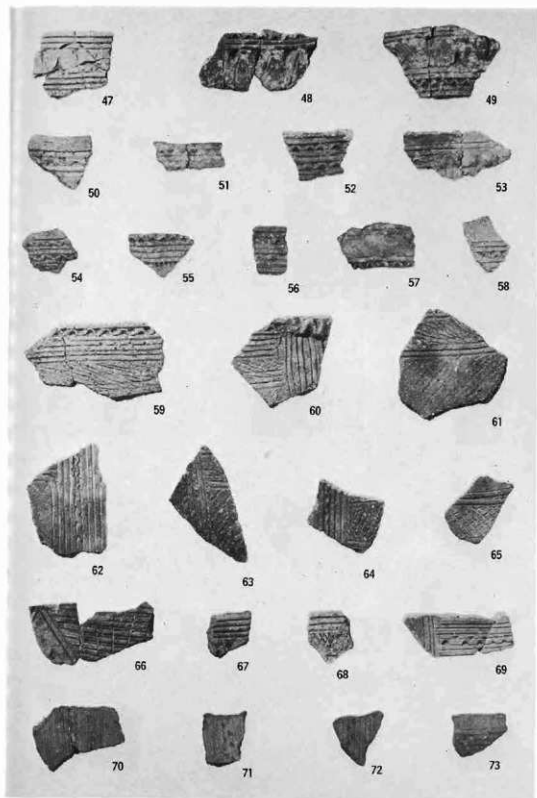
图版第 15



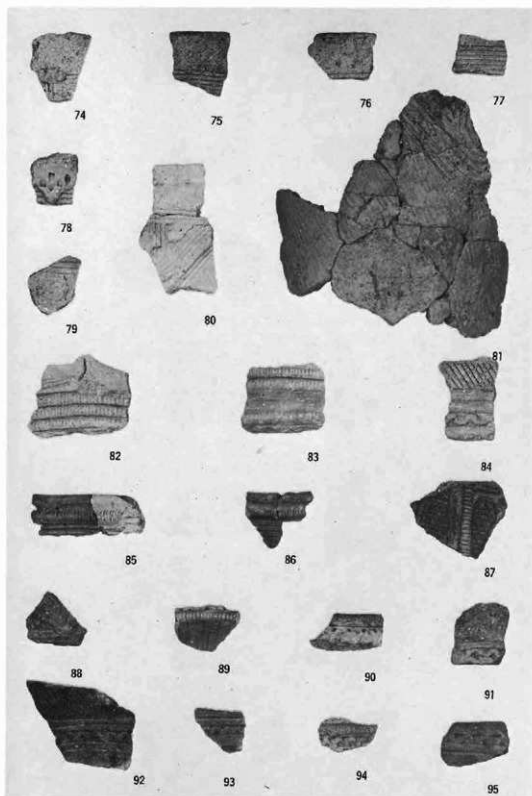
图版第 16



图版第17

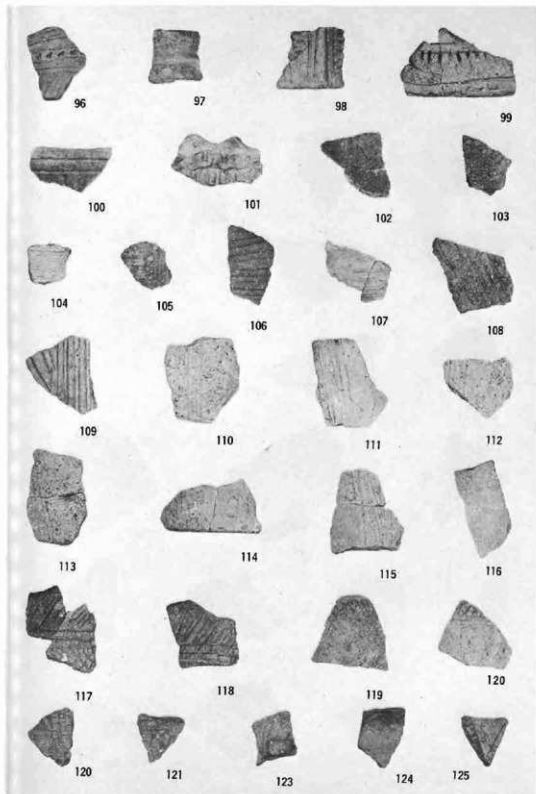


图版第18

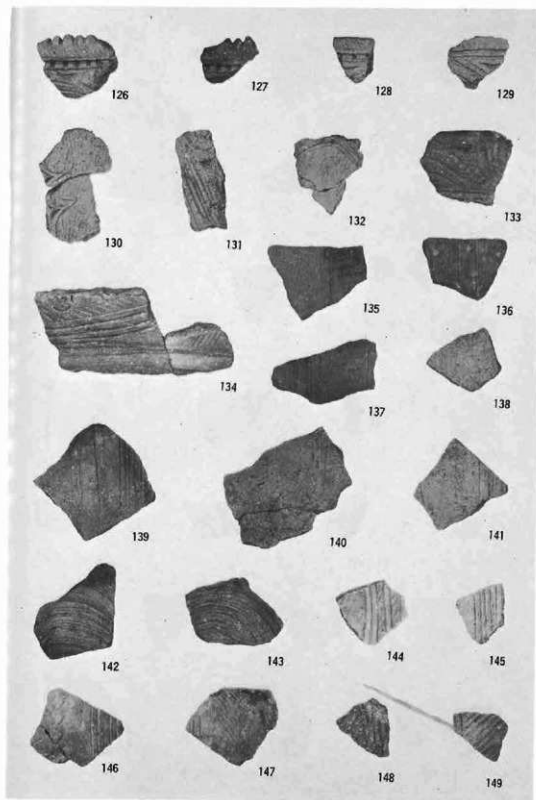


第三群土器 (74~95)

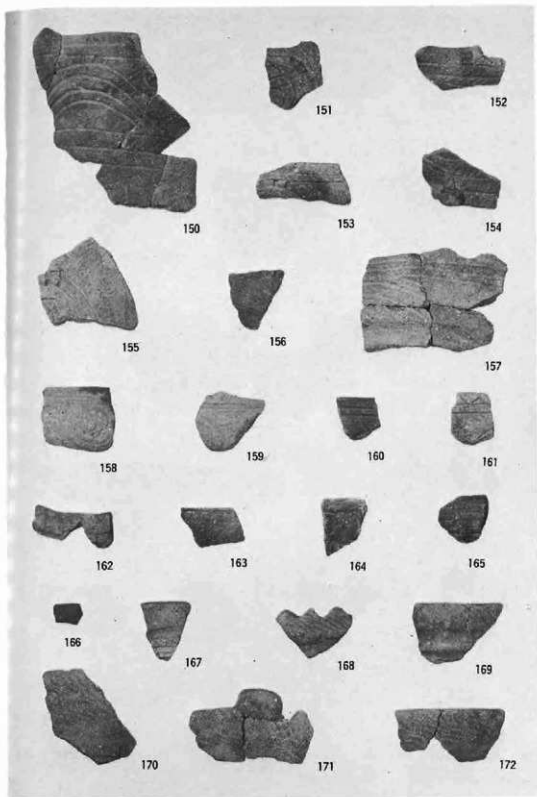
図版第19



图版第20

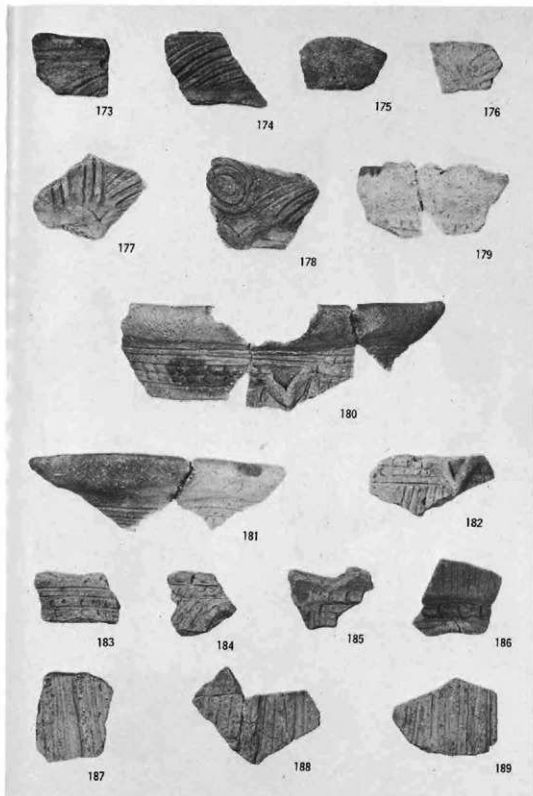


图版第 21

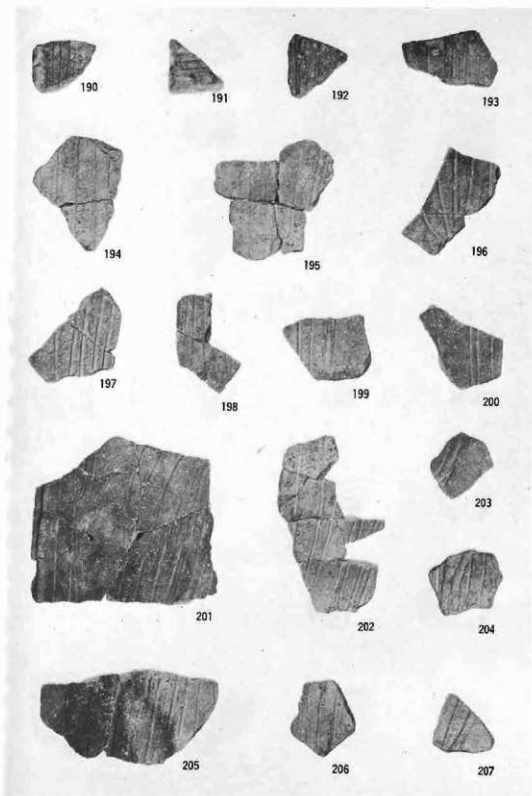


第三群土器 (150~172)

图版第 22

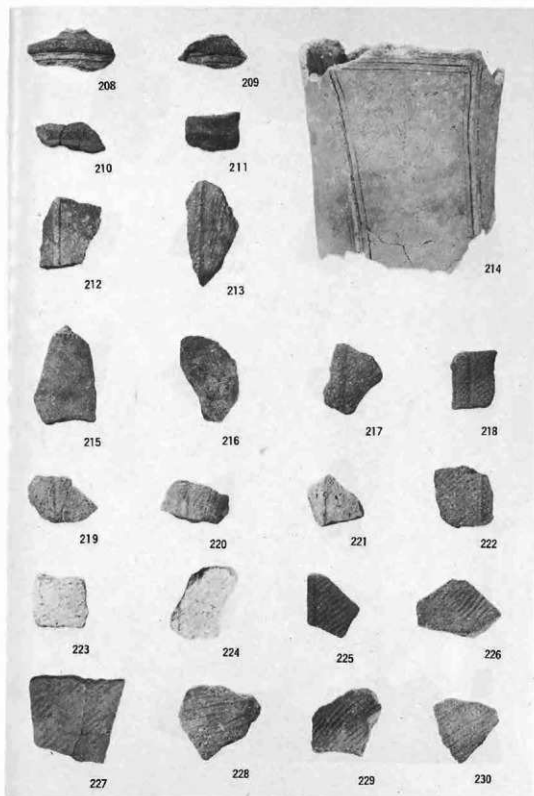


図版第23



第三群土器 (190~207)

図版第 24



图版第25



231



232



233



234



235



236



237



238



239



240



241



242



243



244



245



246



247



248



249



250

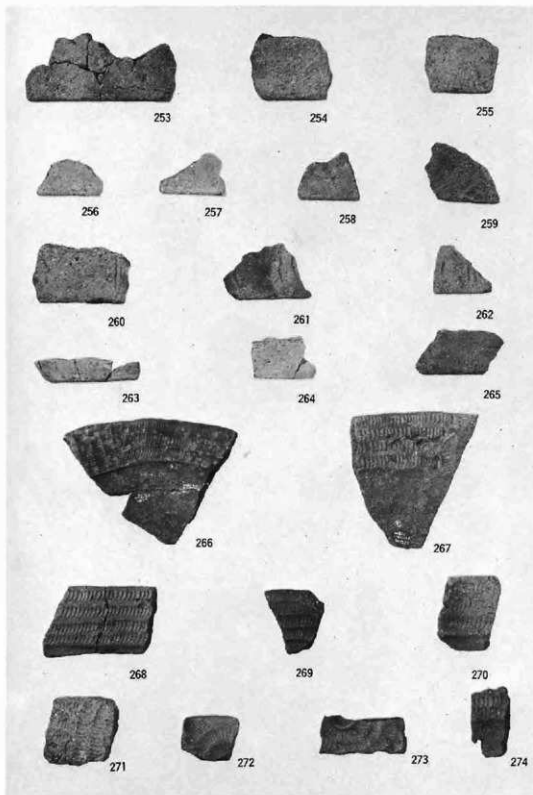


251

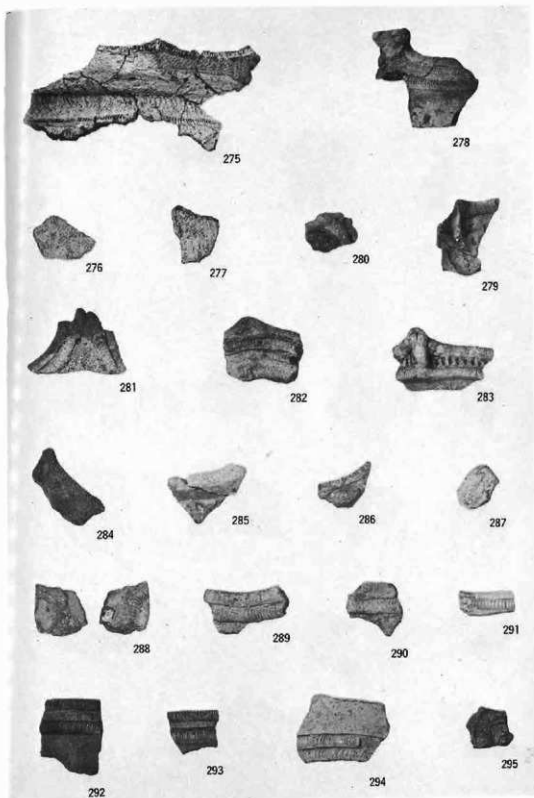


252

図版第 26

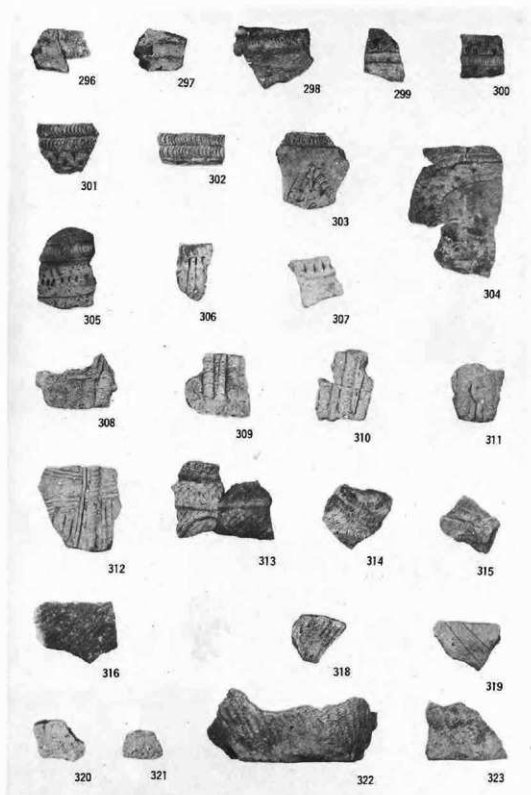


图版第 27

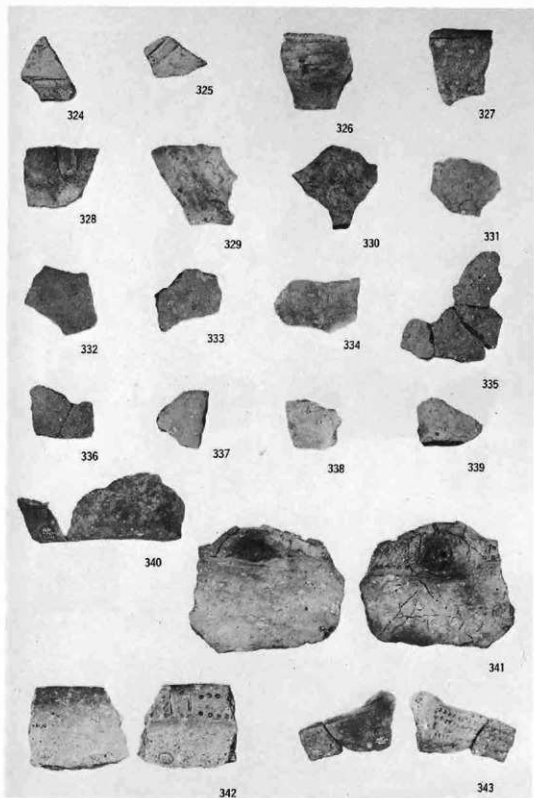


第IV群土器 (275—295)

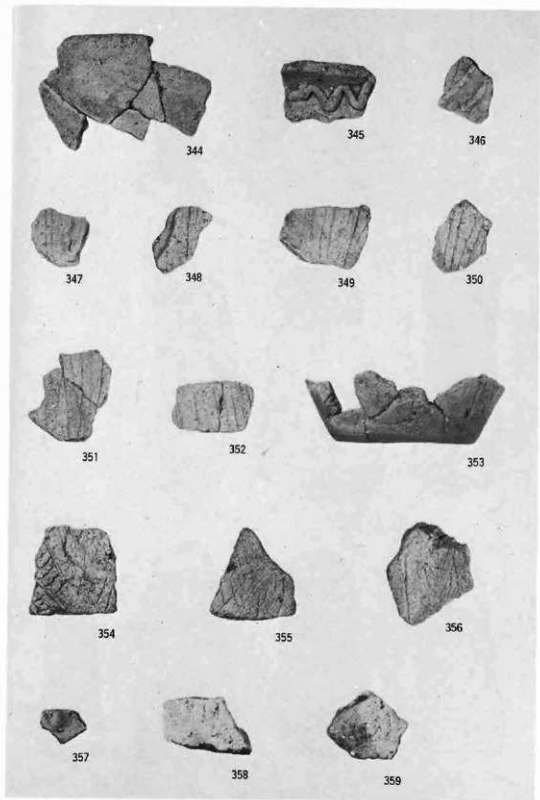
图版第28



图版第 29



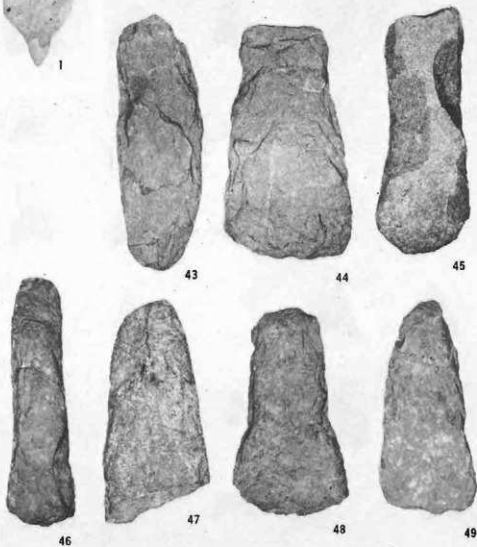
図版第 30



第V群土器 (344~353)・第II群土器 (354~359)

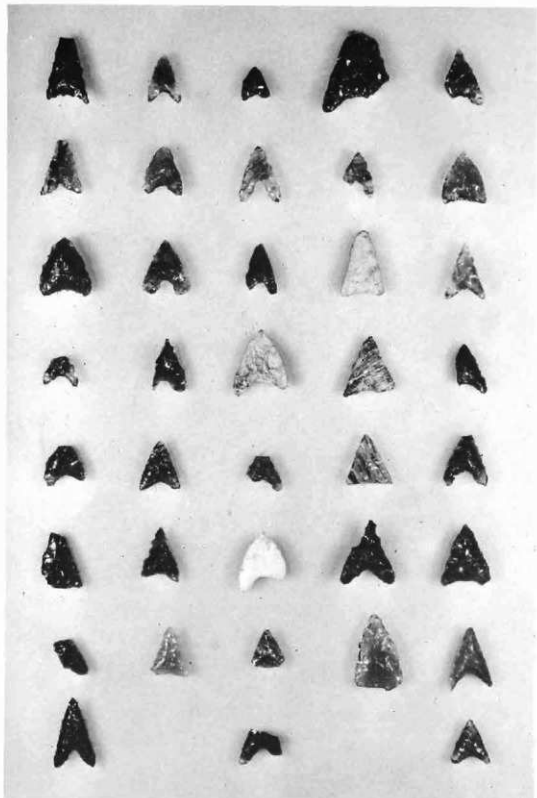


A. 尖頭器



B. 石 斧

図版第32



図版第33



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61

図版第34



62



63



64

A. 石 錘



66



67



68



69



70



71

B. 磨 石

図版第35



72



73

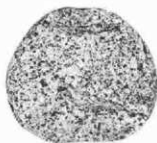


74

A. 磨石



75



76



77



78



79



80



83

B. 敲石



A. 敲石

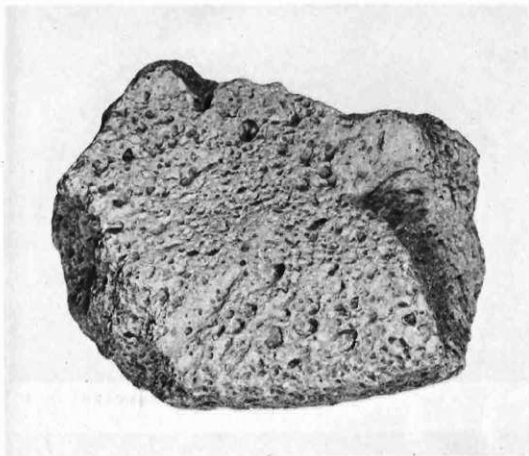


B. 石 錘



C. 磨製石器

図版第37



A. 石 皿

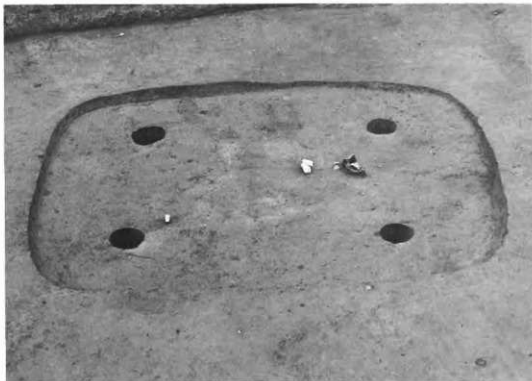


B. 土 偶



C. 土 鐘

图版第38



A. K-1号竖穴住居跡床面

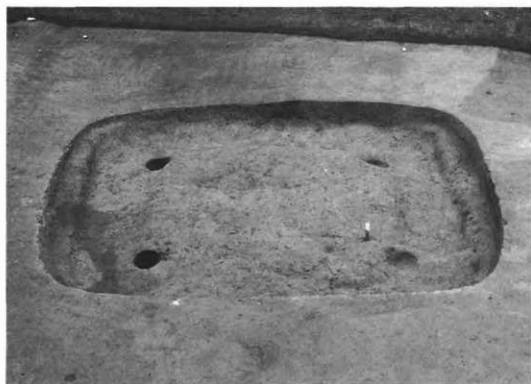


B. K-1号竖穴住居跡出土土器

図版第39



A. K-1号壑穴住居跡検出状況



B. K-1号壑穴住居跡掘り方

図版第40



A. K-2号壑穴住居跡床面



B. K-2号壑穴住居跡掘り方

图版第41



A. K-3号竖穴住居跡床面



B. K-3号竖穴住居跡掘切方

図版第42



A. K-4号竪穴住居跡検出状況



B. K-4号竪穴住居跡床面

図版第43



A. K-4号竪穴住居跡出土土器



B. K-4号竪穴住居跡掘り方

図版第44



A. K-5・6号竪穴住居跡、焼土を内包する大形土坑跡床面



B. K-5・6号竪穴住居跡、焼土を内包する大形土坑跡掘り方

图版第45



A. K-8号竖穴遗構完掘状況



B. M-1溝状遺構完掘状況

図版第46



A. M-1 溝状遺構出土土器 (遠景)



B. M-1 溝状遺構出土土器 (近景)

図版第47



K 101



K 102



K 103



K 104



K 401



K 402



K 403



K 404



K 405



K 406



K 408



K 409



K 407



K 410



K 501

図版第48



K 801



K 802



M 102



K 803



M 101



M 104



M 109



M 110



M 111



M 112



M 116



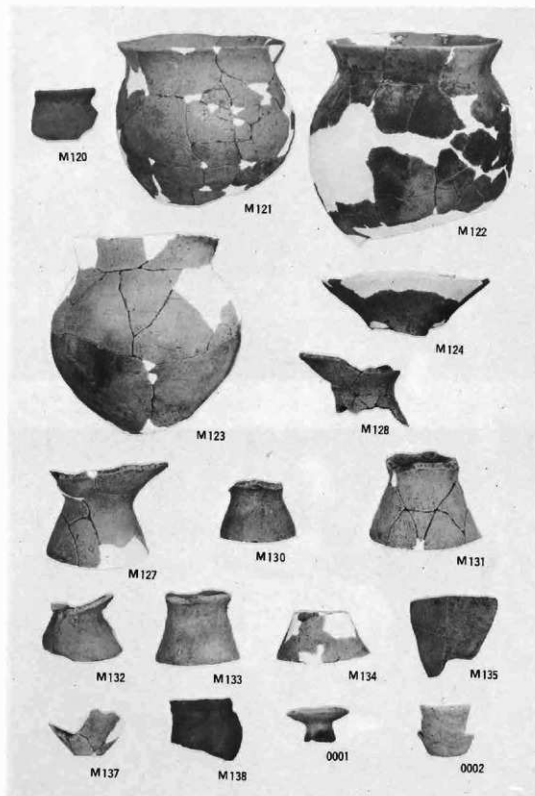
M 119



M 117



M 118



图版第50

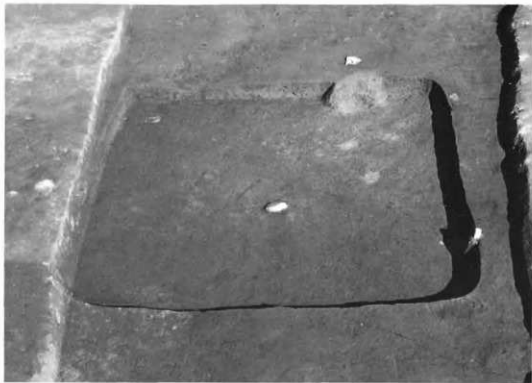


A. R-1号整穴住居跡床面



B. R-1号整穴住居跡窟

图版第51



A. R-2号竖穴住居跡床面

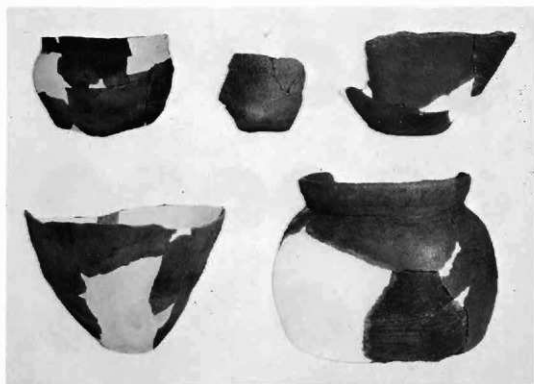


B. R-2号竖穴住居跡出土土器

图版第52

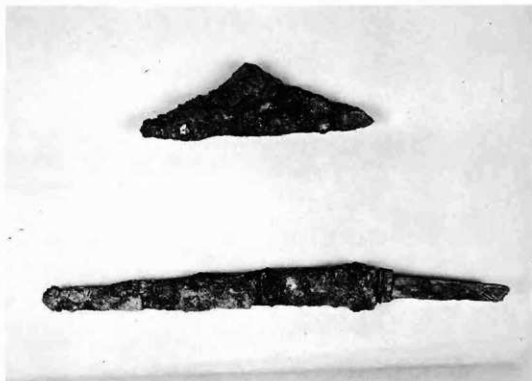


A. R - 3号型穴住居跡床面

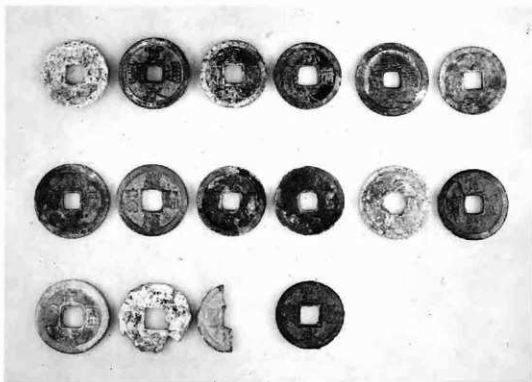


律令時代土器

図版第53



A. 鉄器類 (上・ヒウチガマ、下・刀子)



B. 銭貨類

富士宮市文化財調査報告書第8集

上石敷遺跡

昭和60年3月30日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

静岡県富士宮市元城町1番1号(〒418)

電話(0544)27-311109

印刷 緑星社